

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 67

田治部氏屋敷址

主要地方道新見勝山線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1988. 3

岡山県教育委員会

田治部氏屋敷址

主要地方道新見勝山線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1988. 3

岡山県教育委員会

序

新見市は岡山県の西北部に位置し、阿新圏域内の政治経済の中心として、また古くから県南と山陰を結ぶ交通の要衝としても知られています。さらに近年、中国縦貫自動車道、伯備線の複線電化など交通条件の改善が進み、関連生活道の整備とともに圏域外の都市を結ぶ幹線自動車道の整備改良が大きな課題となっていましたところであります。こうしたことから津山・勝山圏域を結ぶ主要地方道新見勝山線の改良工事が計画され、岡山県教育委員会では、この工事に先立ち昭和61年7月より新見市上熊谷の路線内に所在する田治部氏屋敷址の発掘調査を実施したわけであります。

新見市には古くから開けた新見盆地を中心にして、古代・中世遺跡の存在が広く知られています。なかでも、12世紀後半に皇室領の最勝光院の莊園となり、1333年（元弘3）に京都の東寺領になった「備中国新見莊」は現在の新見市の正田・高尾・金子から以北、神郷町の高瀬付近に至る大莊であったことなどが、莊園研究にかかすことができない資料とされている『東寺百合文書』にも残されています。

今回の調査では、中世～近世の掘立柱建物6棟、礎石建物1棟、倉庫2棟を検出し、広範囲におよぶ屋敷内的一部である可能性を確認するなど『東寺百合文書』に見られる多治部氏の動向の一端を確認することができました。この調査成果を収載した報告書は、からずしも充分意を尽くしたものとは申しませんが、今後の研究、文化財の保護と活用の一助になれば幸いと存じます。

なお、現地調査の実施、報告書の作成にあたって、新見市教育委員会をはじめ、岡山県文化財保護審議会委員、岡山県道路建設課、阿新地方振興局建設部工務第一課、学識経験者各位、ならびに多くの方々のご協力とご指導を得ることができましたことを深く感謝いたします。

昭和63年3月

岡山県教育委員会

教育長 宮地暢夫

例　　言

1. 本報告書は主要地方道新見勝山線道路改良工事に伴い、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した「田治部氏屋敷址」の調査概要である。
2. 遺跡は新見市上熊谷1715番地に所在する。
3. 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター（以下センター）職員、松本和男・高畠知功が担当し、確認調査（松本）を昭和60年10・11月本格調査（高畠）を昭和61年7月から10月まで実施した。なお、現地では新見市教育委員会をはじめ、阿新振興局建設部工務第一課、地権者である山田正治氏、ならび地元の方々の暖かいご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表します。
4. 発掘調査および報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌・近藤義郎・水内昌康各氏よりご指導・ご教示を得た。
発掘調査はセンター職員の援助を受けた。
5. 和気天神山城関連の出土遺物の実測、掲載に関して、和気郡北部教育委員会ならびに康廣貞衛氏のお世話になりました。記して感謝いたします。
6. 報告書の作成は昭和62年8月から63年3月までセンターにて実施した。遺物の整理・実測は埴岡美矢、安井ともえ、高畠、遺構図の浄写は高畠、木口貴子、坪田由利恵が行い、実測図の確認浄写、遺物の写真撮影および編集は高畠があたった。
7. 報告書で用いる断面図高度値は海拔高であり、方位は第1・2・6図を除き磁北である。
8. 報告書に掲載した地形図は1/50,000（高梁・皆部・上石見・勝山）建設省国土地理院発行のものを縮少して使用した。
9. 報告書に關係する遺物・写真・実測原図・マイクロフィルム等は、センターに保管している。

本文目次

第1章 調査の契機及び経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査体制.....	2
第3節 日誌抄.....	2
第2章 地理的・歴史的環境.....	3
第3章 発掘調査の概要.....	7
第1節 遺跡の位置.....	7
第2節 調査の概要.....	8
第3節 遺跡の概要.....	8
第4章 結語.....	67
第1節 遺跡の概要.....	67
I. 遺構、遺物について.....	67
II. 田治部氏屋敷址と多治部氏について.....	71

図目次

第1図 田治部氏屋敷址位置図 (1/1,600,000)	3
第2図 周辺遺跡分布図 (1/100,000)	4
第3図 トレンチ、土層断面ポイント位置図 (1/600)	5
第4図 グリッド設定 (1/750)	8
第5図 田治部氏屋敷址周辺地形・路線図 (1/1,000)	9
第6図 田治部氏屋敷址周辺地形図 (1/10,000)	9
第7図 トレンチ土層断面 (1/100)	11
第8図 K・Lトレンチ出土遺物 (1/4)	12
第9図 田治部氏屋敷址遺構配置図 (1/450)	13
第10図 建物-1 (1/80)	14
第11図 建物-2 (1/80)	15
第12図 建物-3 (1/80)	16
第13図 建物-4 (1/80)	17
第14図 建物-5 (1/80)	18
第15図 建物-6 (1/80)	19
第16図 柱穴列-2 (1/80)	19
第17図 柱穴列-3 (1/80)	19
第18図 遺物出土柱穴番号 (1/200)	21.22
第19図 柱穴内出土遺物 (1/4)	23
第20図 柱穴内出土遺物 (1/4)	24
第21図 柱穴内出土遺物 (1/3)	25
第22図 柱穴内出土遺物 (1/4)	25
第23図 柱穴内出土遺物 (1/4)	25
第24図 溝状遺構-2・3 (1/120)	26
第25図 溝状遺構-2・3断面 (1/40)	27
第26図 溝状遺構-1・2・3出土遺物 (1/4)	27

第27図 配石-1 (1/100)	28	第53図 備前焼 (1/4)	49
第28図 配石-1 出土遺物 (1/4)	29	第54図 東播系須恵器 (1/4)	49
第29図 配石-2 (1/50)・出土遺物 (1/4)	30	第55図 美濃,瀬戸,常滑,信楽焼 (1/4)	50
第30図 井戸-1 (1/30)	31	第56図 肥前陶磁器 (1/4)	50
第31図 井戸-1 (1/60)	32	第57図 肥前陶磁器 (1/4)	50
第32図 土壙-1 (1/30)	33	第58図 肥前陶磁器 (1/4)	50
第33図 土壙-3 (1/30)	33	第59図 円板形土製品, 土錐 (1/3)	51
第34図 土壙-3 出土遺物 (1/4)	33	第60図 錢貨 (1/2)	51
第35図 土壙-7 (1/50)・出土遺物 (1/4)	34	第61図 鉄釘 (1/3)	52
第36図 土壙-9 出土遺物 (1/4)	34	第62図 鉄製品 (1/3)	53
第37図 土壙-10・11(1/30) 出土遺物 (1/4)	35	第63図 鉄製品 (1/3)	54
第38図 土壙-12(1/30)・出土遺物 (1/4)	36	第64図 繩文土器 (1/4)	56
第39図 土壙-14 (1/30)	36	第65図 繩文土器 (1/4)	57
第40図 土壙-15(1/30) 出土遺物 (1/4)	36	第66図 石器 (1/3)	58
第41図 土壙-16(1/30) 出土遺物 (1/4)	36	第67図 石器 (1/3・1/4)	59
第42図 土壙-17出土遺物 (1/4)	37	第68図 弥生中期土器 (1/4)	59
第43図 P-538 (1/30)	37	第69図 土師器 (1/4)	60
第44図 土壙-18 (1/40)	38	第70図 土師器 (1/4)	61
第45図 土壙-18(1/40)・出土遺物 (1/4)	39	第71図 土師器 (1/4)	62
第46図 中国製陶磁器 (1/4)	40	第72図 須恵器 (1/4)	63
第47図 土師質土器 (1/4)	42	第73図 田治部氏屋敷址遺構分布図 (1/600)	67
第48図 土師質土器 (1/4)	43	第74図 時期別遺構配置図 (1/500)	68
第49図 土師質土器 (1/4)	44	第75図 和気天神山城関連遺物 (1/4)	70
第50図 亀山焼 (1/4)	45	第76図 土居地区小字名 (約1/300)	72
第51図 亀山焼 (1/4)	47		
第52図 備前焼 (1/4)	48		

表 目 次

表-1 遺構一覧表.....	65	表-4 遺構・遺物変遷表.....	75
表-2 遺物出土柱穴一覧表.....	65.66	表-5 多治部氏関連年表.....	77.78
表-3 遺構・遺物変遷表.....	69		

図版目次

- 図版1 新見市上熊谷土居地区航空写真(俯瞰)
- 図版2 1. 遺跡周辺航空写真(東から)
2. 田治部氏屋敷址周辺航空写真
(西から)
- 図版3 1. 塩城山上から土居地区を望む
(南西から)
2. 塩城山城山麓から上土居地区を望む
(南西から)
- 図版4 1. 遺構検出状況(北西から)
2. 遺構検出状況(西南西から)
- 図版5 1. 遺構完掘状況(西南西から)
2. 建物-3・4 完掘状況(西南西から)
- 図版6 1. 溝状遺構-1・2・3 検出状況
(西南西から)
2. 溝状遺構-3 土層断面(東北東から)
3. 溝状遺構-2 土層断面(東北東から)
4. 溝状遺構-2 土壤化した柱痕
(北々西から)
5. 溝状遺構-2 柱痕
6. 溝状遺構-2 土壤化した柱痕
(東北東から)
7. 溝状遺構完掘状況(西南西から)
8. 溝状遺構-2 柱穴列(北々西から)
- 図版7 1. 配石-1 (北々西から)
2. 配石-2 (東北東から)
- 図版8 1. 土壙-1 (南々東から)
2. 土壙-4 (東から)
3. 土壙-7 (南から)
4. 土壙-9 (東から)
5. 土壙-14 (西南西から)
6. 土壙-15 (南々西から)
7. 土壙-16 (南西から)
8. P-538 (南から)
- 図版9 1. 土壙-18 (南々東から)
2. 井戸-1 (北西から)
- 図版10 1. 柱穴検出状況(南から)
2. 方形柱痕(南々西から)
3. O.Pトレンチ南端石組状況
(北々西から)
4. 配石-1 下位土層(西から)
5. 繩文土器出土状況
6. K.Lトレンチ南端土層断面
(南々西から)
7. M.Nトレンチ土層断面(西から)
8. 遺跡近景(南西から)
- 図版11 1. 溝状遺構発掘調査風景(西から)
2. 建物-3 発掘調査風景(西南西から)
- 図版12 1. 塩城山城(北西から)
2. 宝篋印塔(南々西から)
- 図版13 1. 繩文晩期土器
2. 繩文晩期土器
- 図版14 1. 繩文後・晩期土器、石器
- 図版15 1. 須恵器
- 図版16 1. 土師器
- 図版17 1. 陶磁器
- 図版18 1. 陶磁器
- 図版19 1. 磁器
2. 備前焼
- 図版20 1. 土師質椀・皿
- 図版21 1. 土師質小皿・土鍋

図版22 1.土師質小皿

図版23 1.土師質小皿

図版24 1.鉄製品

2.鉄滓

第1章 調査の契機及び経過

第1節 調査に至る経過

岡山県の西北部に位置する新見市は、北は中国山地を境として鳥取県と接し、西は神郷町から哲西町をへて広島県東城町に至り、東は奈良時代以降備中国刑部郷を経由して美作国に抜け、南は吉備高原の山波をぬって備中南部に通じる中国山間部の交通の要衝として古くから重要な位置をしめてきた都市である。

今回、調査対象とされた主要地方道新見、勝山線は、JR姫新線新見、津山間の鉄道沿いに山間の狭少な谷間を新見市から真庭郡勝山町に抜ける幹線地方道である。

岡山県土木部はこの道路の改良工事に伴い新見市上熊谷字家ノ前所在の「田治部氏屋敷址」について、文化財保護法第57条3の協議を昭和59年8月9日付で、新見市教育委員会を経由して文化庁長官宛に提出した。このため岡山県教育委員会文化課は工事との調整を計りながら、当該遺跡の内容を把握するための確認調査が必要である旨の通知を昭和59年12月7日付でおこなった。

一方、実務担当部局である阿新地方振興局工務課とは現地事状について協議を進め当該地が水田地となっているため稻作収穫後に確認調査を実施することとした。そして、昭和60年10月21日から昭和60年11月7日まで、新設となった岡山県古代吉備文化財センターにおいて実施した。

しかし、調査にあたっては幾つかの制限があり、当初予定していた計画で十分実施することが出来なかった。中でも第2次調査（全面調査）を大きく狂わせる原因となった中世の密度の高い遺構、包含層の残存状態や縄文土器の包含層の所在については確認調査時点で地山まで掘り下げることが出来なかったことに原因する。これは、昭和61年度に稻の作付をもう一作行うこととなっていたため、地権者の了解をえることが出来なかつたためである。

このような状況下ではあったが確認調査の結果、工事予定地全域が発掘調査対象地として把握されたのである。そして、新たに岡山県土木部道路建設課と全面発掘調査について協議を行い、昭和61年7月7日から全面調査を実施することとしたのである。 (河本 清)

第2節 調査体制

専門委員

鎌木義昌（岡山理科大学教授 岡山県文化財保護審議会委員）
近藤義郎（岡山大学教授 岡山県文化財保護審議会委員）
水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

岡山県古代吉備文化財センター

所長 橋本泰夫	調査課
総務課	課長 河本 清
課長 佐々木清	文化財 保護主査 松本和男
主査 遠藤勇次	〃 高畠知功
主任 花本静夫	文化財 保護主事 平井泰男
〃 岡田祥司	〃 光永真一
主事 片山淳司	

発掘作業員

猪 茂美 小野房子 川内 悟 木曾田品代 小村 功 渋谷藤馬 清水 昇 橋本春章
西村正志 前田雅章 三上幸子 宮永花子 山田武夫 山田千代子 山田豊子 吉田公一

第3節 日誌抄

昭和59年8月9日付の協議から関係各課による諸条件の整備までに約2年を経過し、昭和61年7月7日の発掘調査の開始に至る。

7月はおりからの梅雨、集中豪雨により雨対策に重点をおき、雨のあいまをぬってユンボと11t トラックを併用して表土剥ぎを行った。約5日間を費して1400²を剥ぎ他所へ運搬する。第一次調査のトレンチ壁面清掃と西端より遺構検出を開始し、7月末に終了する。8月前半は路線センター杭を基準にし、トランシットにて方眼を組む。遺構の一段掘り下げと並行して平板による遺構上面の平面図を作成開始する。後半は個々の掘り下げを行う。9月前半は空中撮影を行い、柱穴の半截、平板測量を進める。9月後半以降は文化財センターより河本清調査課長、平井泰男文化財保護主事、光永真一文化財保護主事等の応援を得て遺構の精査、実測図の作成を中心に行う。10月は遺構の精査、作図を続行しながら、柱穴の完掘、遺物取上げを行った。

縄文、中世の包含層を掘り下げ遺物の取上げを行う。中旬に遺構の写真撮影、実測を終了し、10月19日に遠景写真を撮り、撤収する。

第2章 地理的・歴史的環境

本遺跡は岡山県新見市上熊谷1715番地に所在する。新見市は岡山県の北部西端に位置する。中国山地脊梁部と吉備高原の境に沿い、東部より西部に向って津山、勝山、新見、東城を結ぶ盆地列がみられ、ここを姫新線・芸備線が通り、中国縦貫自動車道も並走している。ほぼ東西に近いこの盆地列と、中国山地に源を発し、新見市の中央やや西よりを南下する高梁川との交差するところに新見盆地がある。この盆地を中心に市域が形成されており、南北約36.87km、東西9.75km、若干長軸が西偏する南北に長い範囲であり面積352.80km²をはかる。北は鳥取県日野町、西は鳥取県日南町、岡山県神郷町、哲多町、備中町、東は北部より大佐町、北房町、南は高梁市に接している。

新見盆地には北東から熊谷川、小坂部川、西から西川、本郷川が注ぎ込み、川沿いには鉄道、道路が走り、新見に集結し、そして分散する交通の要衝となっている。

遺跡地は高梁川東岸の一支部を形成する熊谷川上流域の狭長な谷平野および丘陵山麓に営まれており、県北西部より県南、美作、出雲へ通じる交通の重要な拠点を占めている。

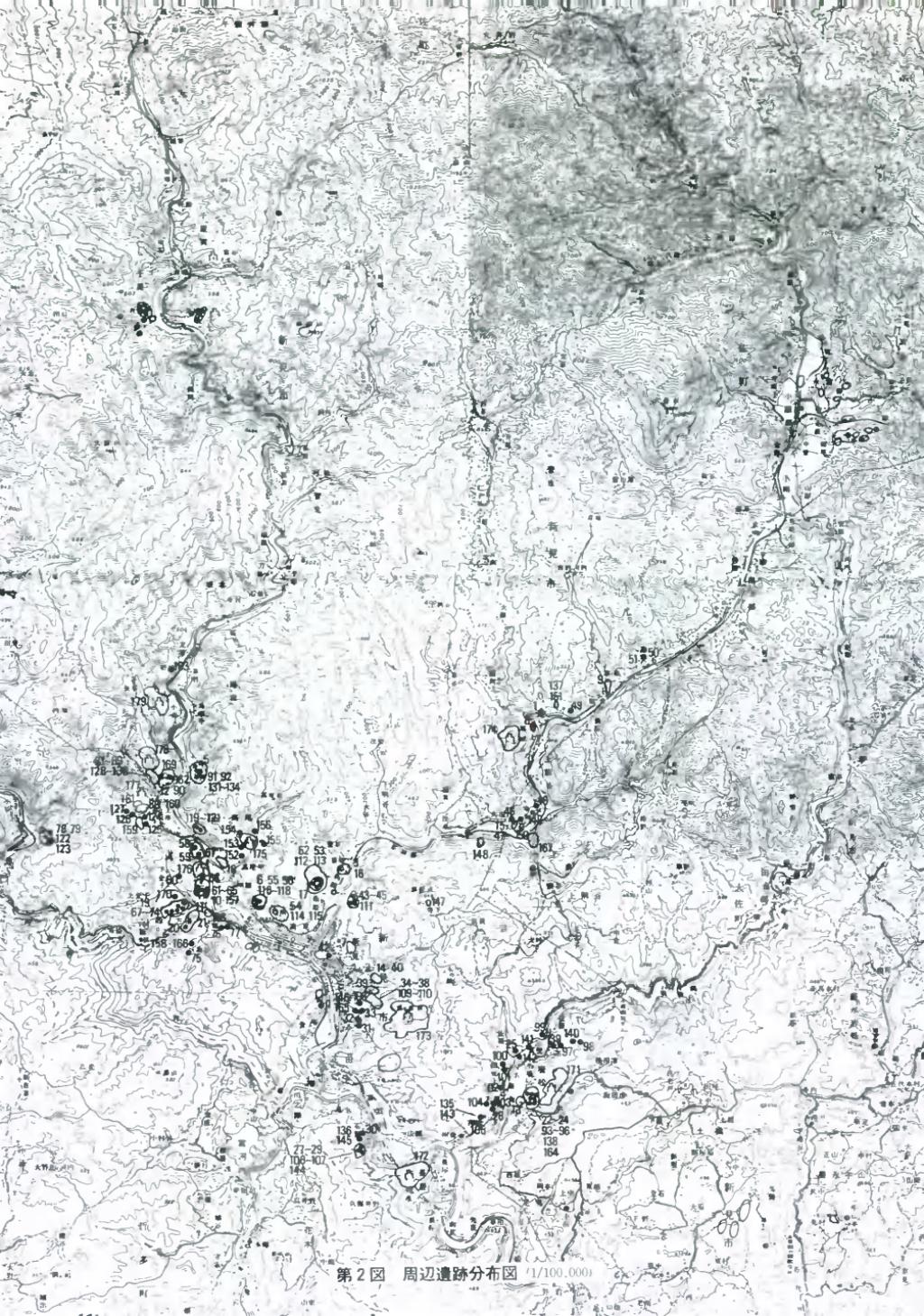
平安時代中期ころに作成された「倭名類聚抄」によれば、当該地は備中國英賀郡6郷の1つである丹治部郷域内に含まれる。丹治部の名は本遺跡より北東4kmにJR姫新線の丹治部の駅名として残っており、阿哲郡大佐町田治部の中心地域となっている。

本遺跡の所在する熊谷川流域における遺跡分布は非常に希薄な状況を呈しており、寺元、桑原両地区および本遺跡周辺にまとまりがみられるのみである。大佐町田治部戸谷遺跡(註1)、新見市下熊谷青地遺跡(註2)等で縄文早期、前期の遺構、遺物が散見している程度である。

寺元地区では弥生時代の散布地(15)、横穴式石室を内部主体に持つ太田古墳(46)、岩山神社古墳(48)、五輪塔、宝篋印塔を中心とする寺元遺跡(150)、塔ノ畠遺跡(149)、



第1図 田治部氏屋敷址位置図 1/1,600,000



第2図 周辺遺跡分布図 (1/100,000)

- | | | |
|----------------|----------------|----------------------------|
| 1. 田治部氏屋敷址 | 46. 太田古墳 | 91. 石垣古墳群 5基以上 |
| 2. 宝福寺西遺跡 | 47. 上熊谷遺跡 | 92. 石垣古墳群 3号墳 |
| 3. 青地遺跡群 | 48. 岩山神社古墳 | 93. 鬼山古墳群 1号墳 |
| 4. 宗金遺跡 | 49. 真福寺東古墳 | 94. 鬼山古墳群 6号墳 |
| 5. 石垣遺跡 | 50. 大石 1号墳 | 95. 塚本の塚 |
| 6. 岩倉遺跡 A地点 | 51. 大石 2号墳 | 96. 金谷の塚 |
| 7. 上野町遺跡 | 52. 青地古墳群 | 97. 掛屋塚 |
| 8. 宮上遺跡 | 53. 青池古墳群 2号墳 | 98. 山中の塚 |
| 9. 宮脇遺跡 | 54. 大仁子古墳群 | 99. 真壁円山墳 |
| 10. 土井遺跡 | 55. 岩倉遺跡 B地点 | 100. 番迫の塚 1号墳 |
| 11. 久原遺跡 | 56. 岩倉墳墓群 | 101. 番迫の塚 2号墳 |
| 12. 上市遺跡 | 57. 宗金古墳群 1号墳 | 102. 田元上の塚 |
| 13. 位田遺跡 | 58. 宗金古墳群 2号墳 | 103. 岩山神社古墳 1号墳 |
| 14. 宝福寺西遺跡 | 59. 宗金遺跡 | 104. 岩山神社古墳 2号墳 |
| 15. 上熊谷遺跡 | 60. 下金子古墳 | 105. 宮地の塚 |
| 16. 青地遺跡群 | 61. 土井古墳群 1号墳 | 106. 下石蟹古墳群 |
| 17. 青地 B遺跡 | 62. 土井古墳群 2号墳 | 107. 下石蟹古墳群
(坂林下の塚) 1号墳 |
| 18. 高尾平遺跡 | 63. 土井古墳群 3号墳 | 108. 小丸山古墳 |
| 19. 辻田遺跡 | 64. 土井古墳群 4号墳 | 109. 小岸古墳群 1号墳 |
| 20. 久原 1号墳 | 65. 土井古墳群 5号墳 | 110. 橋本古墳 |
| 21. 久原 2号墳 | 66. 土井古墳群 6号墳 | 111. 龍頭古墳群 1号墳 |
| 22. 鬼山古墳群 | 67. 辻田遺跡 | 112. 青池古墳群 1号墳 |
| 23. 鬼山 2~4号墳 | 68. 辻田土括墓群 | 113. 青池古墳群 3号墳 |
| 24. 鬼山古墳群 5号墳 | 69. 辻田墳墓群 1号墳 | 114. 大仁子古墳群 1号墳 |
| 25. 真壁古墳 | 70. 辻田墳墓群 2号墳 | 115. 大仁子古墳群 2号墳 |
| 26. 安田の塚 | 71. 辻田墳墓群 3号墳 | 116. 岩倉古墳群 4号墳 |
| 27. 下石蟹古墳群 2号墳 | 72. 辻田墳墓群 4号墳 | 117. 岩倉古墳群 5号墳 |
| 28. 下石蟹古墳群 3号墳 | 73. 辻田墳墓群 5号墳 | 118. 岩倉古墳群 6号墳 |
| 29. 石蟹遺跡 | 74. 辻田墳墓群 6号墳 | 119. 向田古墳群 3号墳他 |
| 30. 石蟹荒神塚 | 75. 古墳 | 120. 向田古墳群 1号墳 |
| 31. 水船古墳 | 76. 古墳 | 121. 向田古墳群 2号群 |
| 32. 小岸古墳 | 77. 古墳 | 122. 塚ヶ市古墳群 1号墳 |
| 33. 立野の塚 | 78. 塚ヶ市古墳群 | 123. 塚ヶ市古墳群 3号墳 |
| 34. 小岸古墳群 | 79. 塚ヶ市古墳群 2号墳 | 124. 堂前の塚 |
| 35. 小岸古墳群 2号墳 | 80. 高下谷遺跡 | 125. 井村古墳 |
| 36. 小岸古墳群 3号墳 | 81. 横見古墳群 1号墳 | 126. 高下谷 1号墳 |
| 37. 小岸古墳群 4号墳 | 82. 横見古墳群 2号墳 | 127. 高下谷(高下谷の塚) 2号墳 |
| 38. タクゾウ古墳 | 83. 横見古墳群 3号墳 | 128. 横見古墳群 10号墳 |
| 39. 小岸南高下遺跡 | 84. 横見古墳群 4号墳 | 129. 横見古墳群 11号墳 |
| 40. 宝福寺西遺跡 | 85. 横見古墳群 5号墳 | 130. 横見古墳群 12号墳 |
| 41. 上野町遺跡 | 86. 横見古墳群 6号墳 | 131. 石垣古墳群 1号墳 |
| 42. 六軒古墳 | 87. 横見古墳群 7号墳 | 132. 石垣古墳群 2号墳 |
| 43. 龍頭古墳群 2号墳 | 88. 横見古墳群 8号墳 | 133. 石垣古墳群 4号墳 |
| 44. 龍頭古墳群 3号墳 | 89. 横見古墳群 9号墳 | 134. 石垣古墳群 5号墳 |
| 45. 龍頭古墳群 4号墳 | 90. 上市遺跡 | |

135. 宮地墓地	150. 寺元墳墓	165. 小岸墳墓
136. 久保井道墳墓	151. 鉢屋敷中世墓	166. 敷布地
137. 鉢屋敷中世墓	152. 明智墳墓	167. 田治部国衛所址
138. 敷布地	153. 敷布地	168. 西方政所址
139. 小市墳墓	154. 高尾墳墓	169. 横見政所址
140. 唐松墳墓	155. 中組墳墓	170. 金子氏屋敷址
141. 真壁墳墓	156. 公園内墳墓	171. 鬼山城址
142. 佐栗谷墳墓	157. 松月庵中世墓遺跡	172. 石蟹山城址
143. 宮地墳墓	158. 敷布地	173. 蒜ヶ巣城址
144. 下石蟹墳墓	159. 井村墳墓	174. 塩ヶ城址
145. 久保井道墳墓	160. 高下谷遺跡	175. 丸山城址
146. 小岸墳墓	161. 敷布地	176. 茶臼山城址
147. 塙頭ヶ畠遺跡	162. 横見墳墓	177. 粗根城
148. ハブ谷遺跡	163. トウの山遺跡	178. 朝倉城
149. 塔の畠遺跡	164. 敷布地	179. 楠城址

ハブ谷遺跡(148)等の中世墳墓、応永年間に設置されたと言われる田治部郷の政所(167)等が所在する。本遺跡周辺では弥生中期の散布地である宮上遺跡(8)、宮脇遺跡(9)、真福寺東古墳(49)等がみられる。

中世では当遺跡に関連を持つ遺跡が中心となり、熊谷川を隔てた西側には多治部氏の居城である塩城山が聳え、西谷川を隔てた東側丘陵平坦部には総高約175cmを測る14世紀中葉～15世紀と考えられる宝篋印塔をはじめ五輪塔群が所在する。そこより谷づたいに頂上までの間に鉢屋敷墳墓(137)、頂上にも平坦部および墳墓(151)が存在する。鉢屋敷の東南山麓には多治部氏の菩提寺と伝えられる真福寺が現存し、永録・天正の頃塩城山城主として存在した丹治部雅楽頭景治の位牌が祀られている。表に「丹丘院殿白翁淨雲大居士」、裏に「文禄四乙未三月十五日逝去 景治公」が刻まれている(註3)。

これらの中世遺跡、遺構、遺物は「東大寺百合文書」に残る新見庄史料(註4)と少なからず関連をもち存在した可能性が考えられる。また、備中兵乱期(註5)にも関連を有した地域と考えられ、上熊谷字土居の原家には、原彦三郎に宛てた尼子晴久感状、原太郎左衛門尉に宛てた手利元就書状、毛利元就・同輝元連署書状、毛利輝元書状、小早川隆景書状等の「原家文書」(註6)が現存していた。

註

- (註1) 橋本惣司「戸谷遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」11 岡山県教育委員会 1976年
- (註2) 浅倉秀昭「青地遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」11 岡山県教育委員会 1976年
- (註3) 塚本茂夫「塩ヶ城をめぐる地名と多治部氏についての私考」「備北文学」26号 1984
- (註4) 杉山 博『庄園解体過程の研究』東京大学出版会 1982
- (註5) 『吉備群書集成』第3輯 1924年 1574年(天正2)から翌年にわたる備中松山城主三村元親と毛利氏との戦い。
- (註6) 藤井 駿・水野恭一郎共編『岡山県古文書集』第二輯 思文閣出版 1955

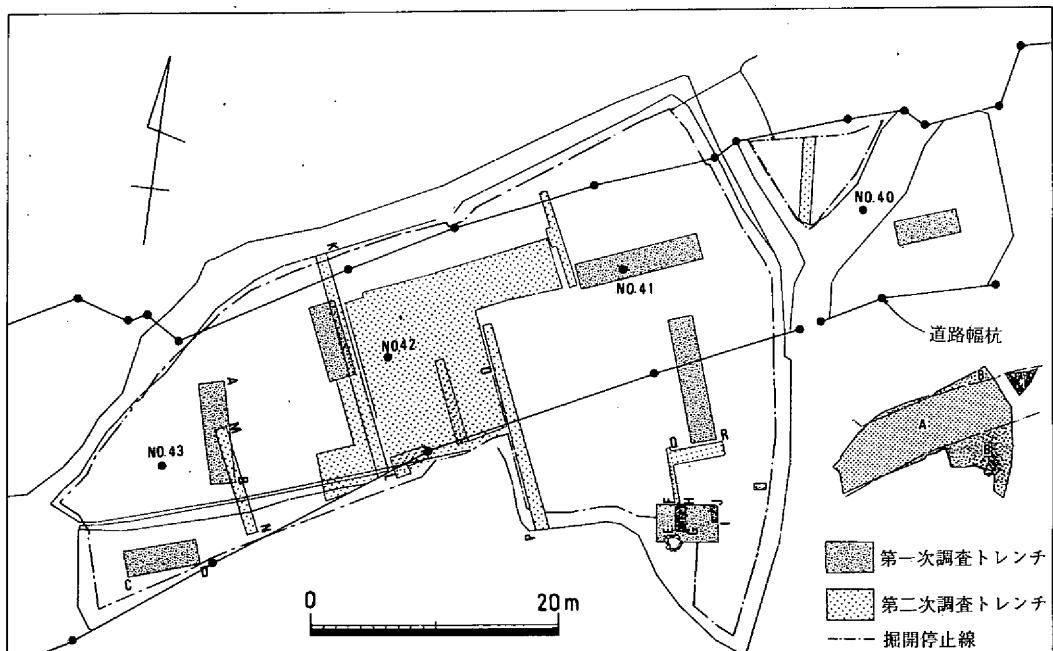
第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の位置

遺跡は岡山県の北西部、新見市上熊谷土居の部落内に所在する。JR新見駅から約6.8km北東に位置し、四方を山々に囲まれた谷底の両岸、狭長な平野部に営なまれている。

調査地区は北方からの菅生川と北東からの大畠川・西谷川が南下し、JR姫新線岩山駅の上で熊谷川に合流する北部にあたる。すなわち、東西および南側を河川に囲まれ、北側に山を背負い、自然地形を生した屋敷地に適した場所である。小字名を「家ノ前」と呼称し、上熊谷1715番地の田にあたる。上下3枚の水田に跨っている。上田の海拔高は299.61mをはかり、下田は298.75mである。

下土居、上土居の両地区を中心にして、その周辺を含めて地域が遺跡地となり、調査区は遺跡の北端部分にあたる。



第3図 トレンチ・土層断面ポイント位置図 (1/600)

第2節 調査の概要

確認調査の結果(註1)に基づき、道路改良幅内および用地外水田域(註2)、 1650m^2 の発掘調査を実施した。重機とダンプカー(11t)を併用して表土剥ぎを実施し、電動ベルトコンベヤー使用による遺構検出後、道路センターNo41杭を原点として長軸線1～5、短軸線A～Gの $10\times10\text{m}$ の方眼格子を組む。海拔高は調査区西端部に設置された阿新振興局の仮B・M(H=299.63m)を基準とした。

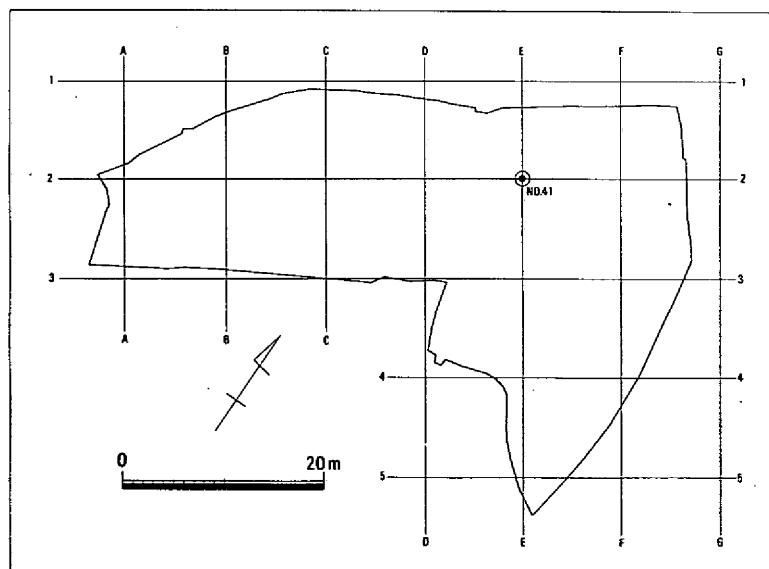
道路幅南北約17m・東西約70m(A地区)、北側水田域(B地区)、南側水田域(B'地区)、宅地(C地区)の4区に別け、A地区西端から東に向って遺構の調査を進行させた。なお、遺構について不明瞭な場所では第1次調査のトレーニチに加えて、隨時トレーニチを設定した。

調査は予想を上回る重複した掘立柱建物の柱穴、縄文後・晩期を中心とする包含層の存在、重ねて7月の集中豪雨に伴う畦畔の崩壊、復旧作業等の諸事情により予定期間を若干超過しての終了となった。

なお、9月中旬以降は遺構実測を中心にセンター職員の援助を受けた。

第3節 遺跡の概要

調査地は北から南に延びる低丘陵の東側、南々西に開口する谷頭中央部に位置しており、比較的広い範囲を削平して平坦面($60\times40\text{m}$)が造り出されている。その平坦面両側は丘陵斜面が削平された状況を留め、礫を含む地山が露われている。東西の地山に囲まれた擂鉢状の谷内

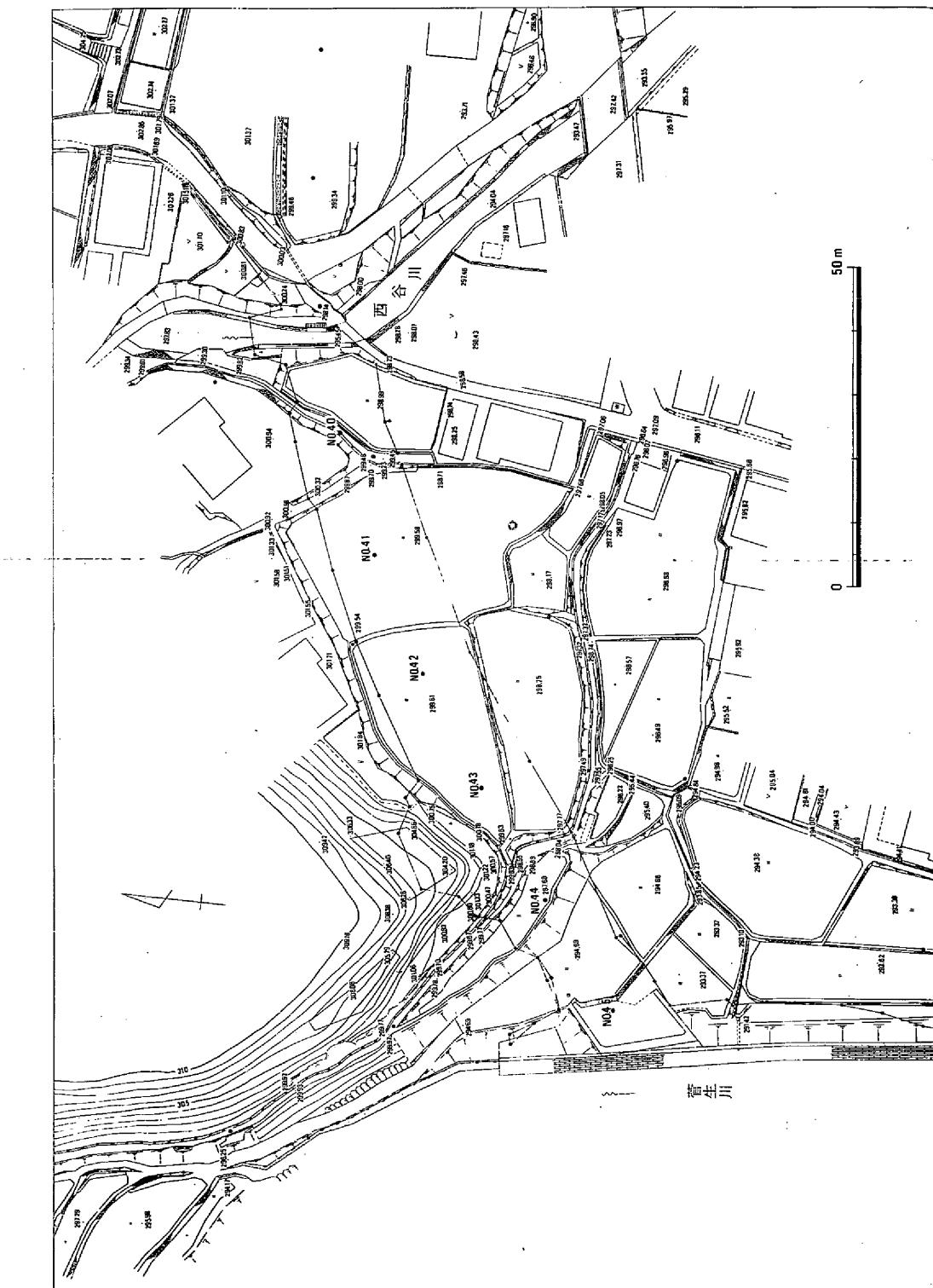


第4図 グリッド設定 (1/750)

には黒ボク(火山灰、有機土層)及び黒茶色系の土層を基調にする微砂質土が現水田直下まで堆積している。地山の傾斜角度は約 10° をはかり谷頭頂および周縁から比較的緩やかな傾きで南々西に下降しております、上部の堆積層についても同様の

状況が認められる。

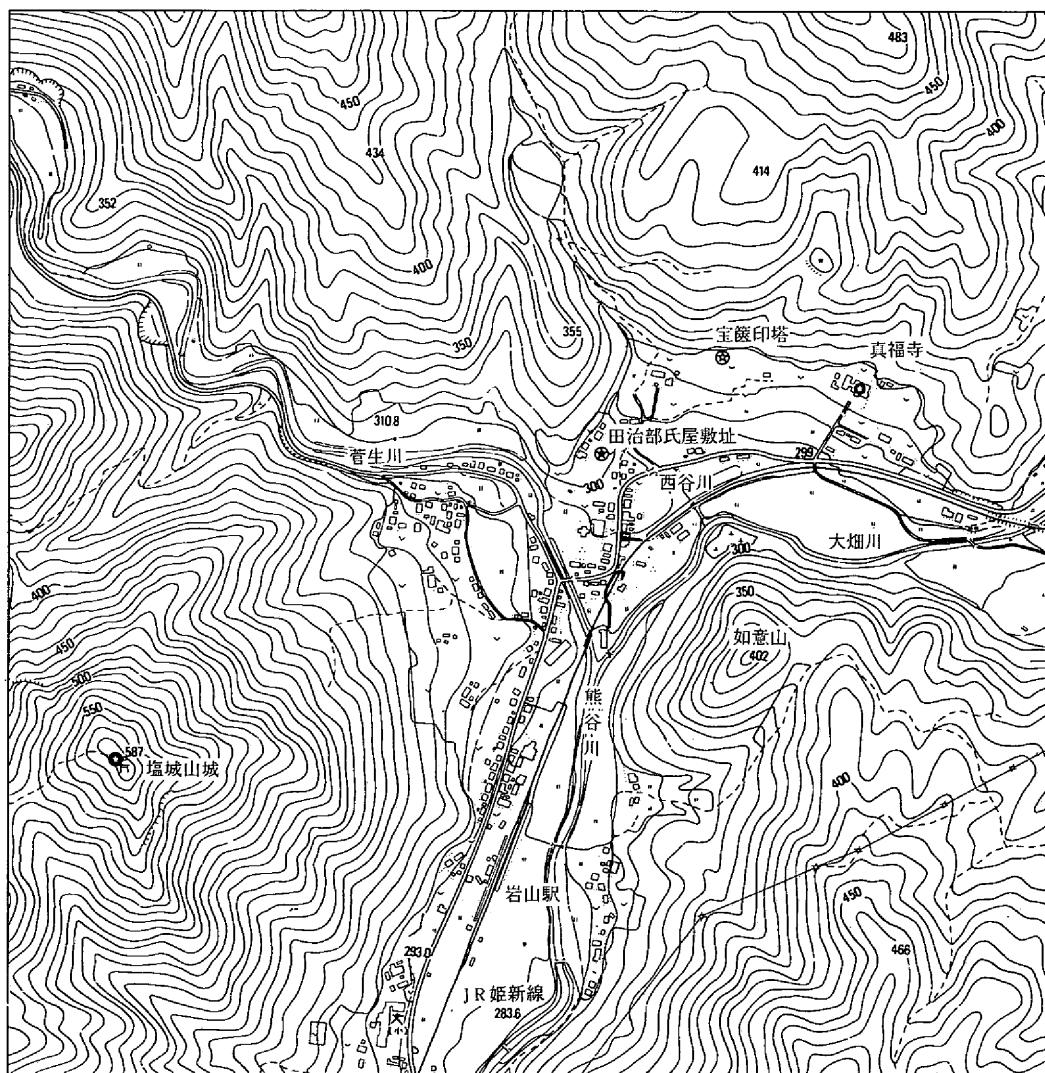
第5図 田治部氏屋敷址周辺地形・路線図 (1/1,000)



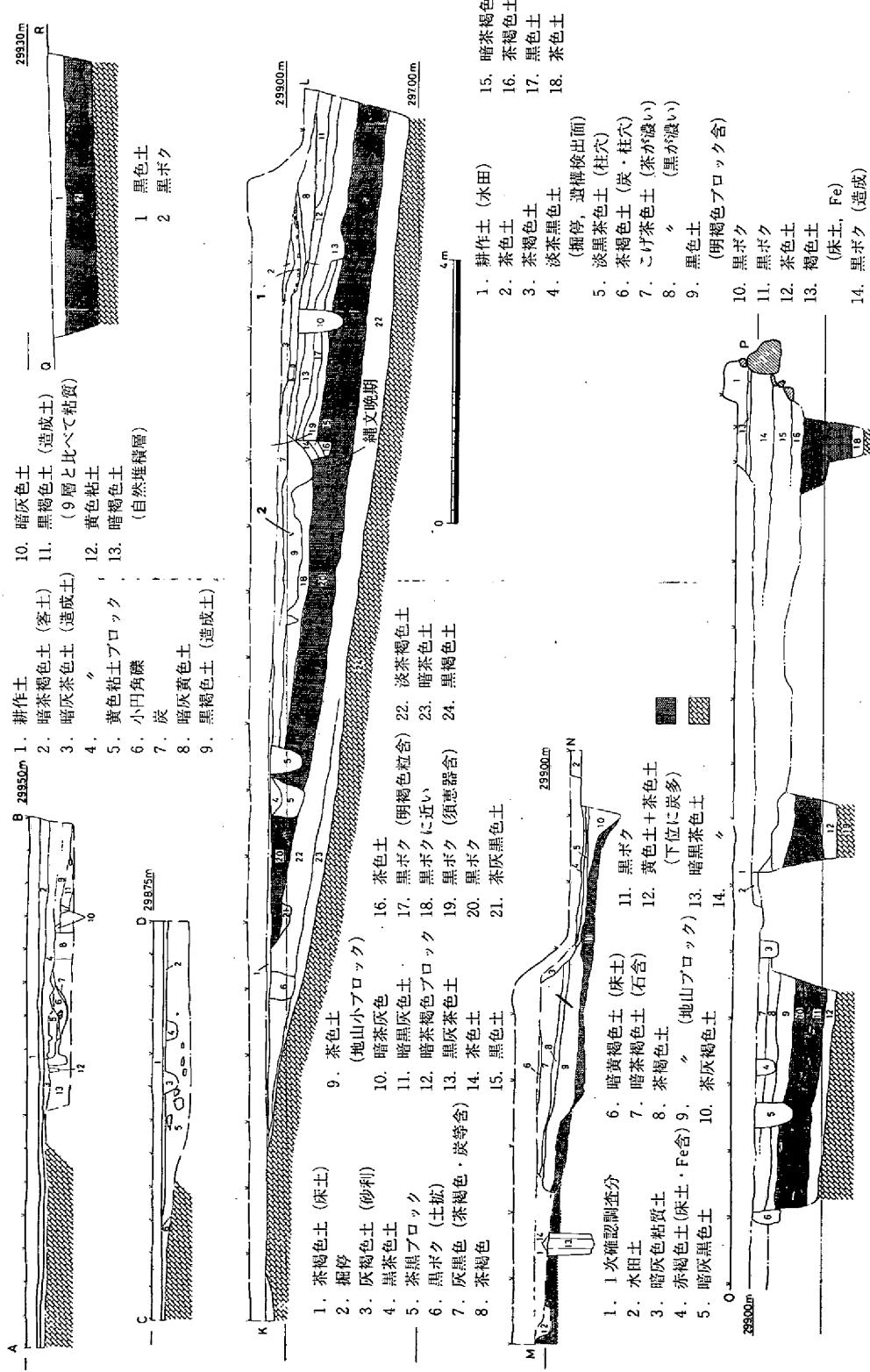
参考までに記すと、路線南側において確認できる谷部の広がりは上端部で最大幅約56m、最深部で約2.3mをはかる。

すなわち、検出した遺構はほとんど谷内部に流れこんだ堆積土を削平、造成した平坦面上に構築されたものである。

谷内部における土層の状況を第7図にK・L土層断面図を参考に説明を加える。最上層は調査前まで耕作が実施されていた水田層であり、若干南に下降ぎみであるが、ほぼ平坦面を形成している。その上層を除去するとK測点から南に約2.7mまでは丘陵斜面が削平され、海拔299.32mをはかる地山面が平坦に露われており、そこより自然地形が下降している。下降する地山直上には若干粘性をおびた茶褐色を基調とする第22・23層が約40cm幅で認められる。遺物

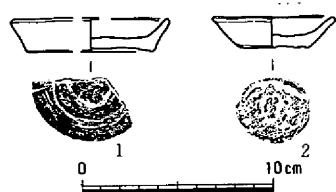


第6図 田治部氏屋敷址周辺地形図 (1/10,000)



第7図 トレンチ土層断面 (1/100)

を含んでおらず、地山の土が漸次変化していった可能性が考えられる土層である。上面には黒ボケを基調とする第20層が約50cmの幅でほぼ同様の傾きをもって堆積しており、縄文後・晩期・弥生前・中期の土器片、石器等が包含されている。二次的な堆積によって形成された土層であり、出土した遺物は丘陵部の遺跡地からの流れ込みと考えられる。第12、13、17、19層は第20層に並行する斜面堆積状況を呈し、中世の遺物が中心を占めており、とりわけ第13層では非常に多くの小土器片が集中して出土している。第12、13層はO.P.トレンチでは確認できな



第8図 K.L.トレンチ出土遺物
(1/4)

いことより、谷内の低所部にあたる第20層の凹地に堆土とともに押出され、放棄された可能性が強い。第9層はそれらの層を切って存在し、2の土師質小皿が出土している。

第3、8層は遺構に関する土層であり、砂利を敷きつめた状況が看取できる。このように第3、8層の下位に生活面が一部存在するが、ほとんどの遺構は水田床土を除去した段階で検出されている。しかし、これらの遺構もおそらく後世の削平により上面を消失し、原状をとどめていないものと考えられる。

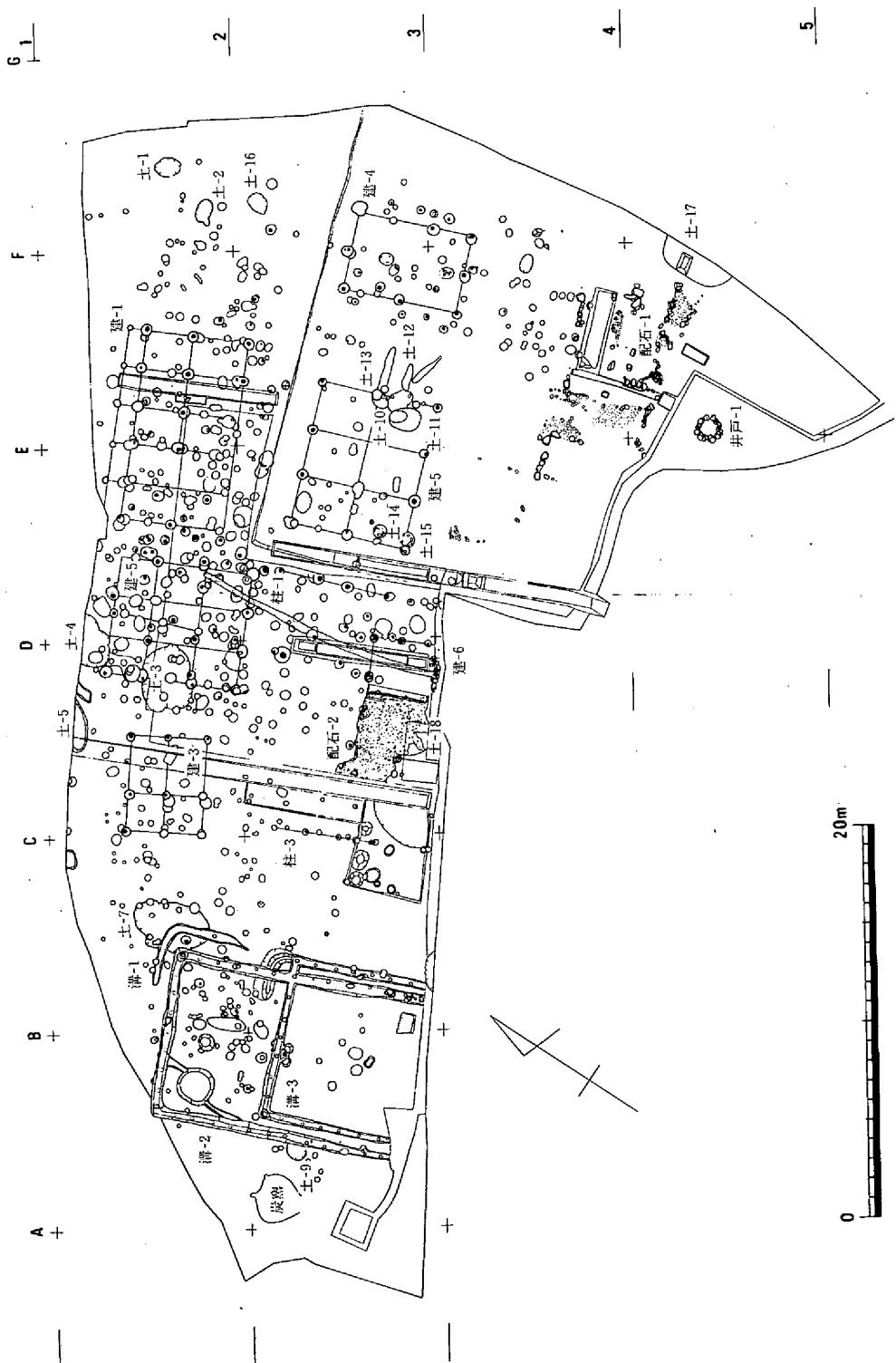
1. 遺構・遺物

調査区平面形は南に開く変形「コ」字形を呈しており、遺構は分布密度の稀薄な東西両端部を除くほぼ全域に存在する。随所で切り合い、重複する遺構が認められ、長期に渡って継続して利用された場所であることが理解できる。

本遺跡の発掘調査の契機となった「古井戸」を初め、それに関連を持つと考えられる中世、近世の遺構が中心を占めており、中世以前に溯る遺構は発見できなかった。確認することのできた遺構は掘立柱建物6棟、柱穴列3、溝状遺構3（掘立柱を設置する掘り方）、溝1条、配石2カ所、土壙18基であり、総数33遺構を数える。柱穴の総数は720穴前後となり、柱穴列・掘立柱建物6棟以外にも、まとまりを確認することのできなかった掘立柱建物等の構造物を想定することができる。

遺物は第1、2次の発掘調査で縄文後・晩期から近世に至る物がコンテナ箱(54.5×34.0×14.0cm)に19箱出土している。遺構に伴う遺物は非常に少なく4箱のみで、他の15箱は包含層からの出土品である。内容は建物、溝、配石、土壙等に伴うもの1箱、柱穴出土が3箱であり、包含層では縄文後・晩期、弥生中期の土器、石器が2箱、古代の須恵器・土師器が2箱、中・近世では中国・日本製の磁器1.5箱、備前焼2.5箱、亀山焼1箱、土師質椀・小皿を中心に土鍋を含め6箱が出土している。

他に常滑焼、東播系須恵器が数点、古銭、鉄製品、土製品、石製品、鉄滓等がみられる。

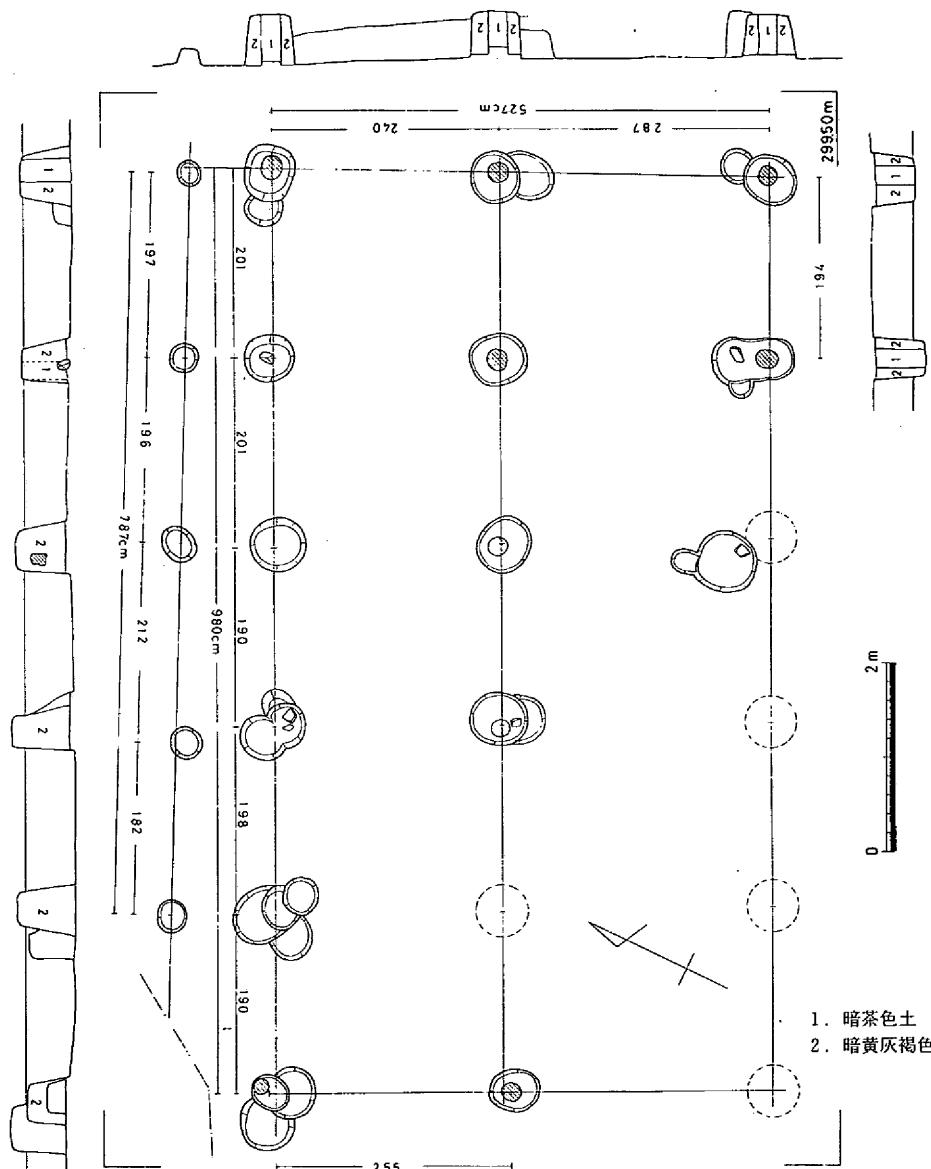


第9図 田治部氏屋敷址遺構配置図 (1/450)

(1) 建物

建物一 1 (第10・18図、図版5-1)

調査区北東部に位置する掘立柱建物であり、北辺に庇あるいは縁が付設されている。桁行5間、梁行2間にて棟方向をN-65°-Eにとり、桁、梁の長さがほぼ2:1の比率で構成されている総柱の柱穴配置である。桁行約980cm、梁行約527cm、面積は51.6m²をはかる。主柱穴の



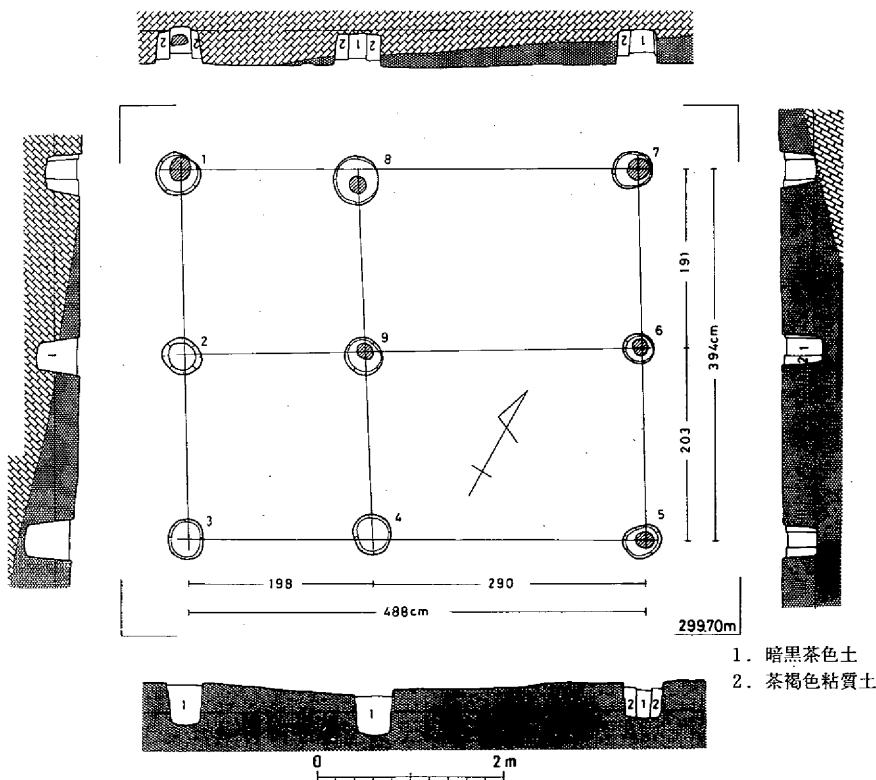
第10図 建物一 1 (1/80)

掘り方平面は円形を呈し、直径の平均値は約58cm、深さ約50cm、柱痕直径は約20~26cmを測る。

P-59, 66, 80, 84, 103, 110, 124, 126, 158, 164の柱穴埋土内に若干の遺物が混入している。土師質小皿、亀山焼、備前焼等の小片が含まれており、擂鉢35は二次焼成を受けている。

建物-2 (第11・20図、図版5-1)

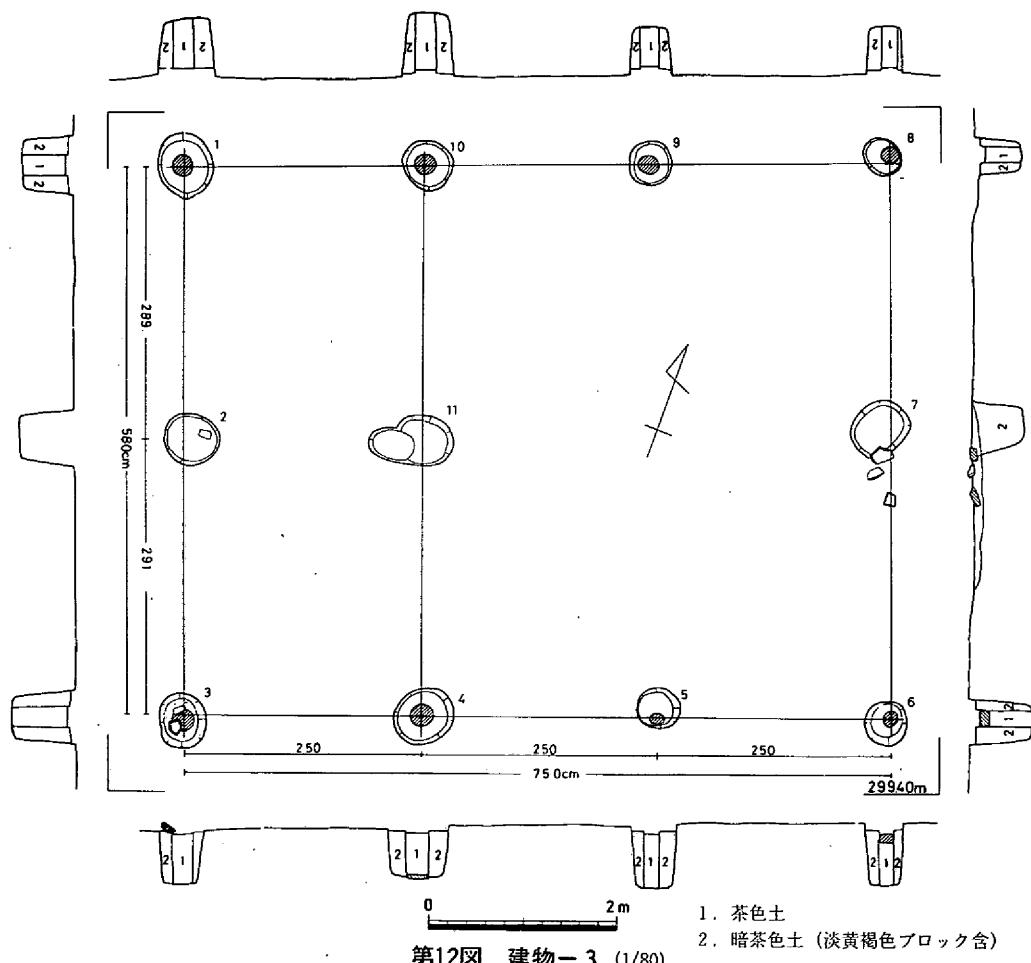
調査区北部中央西よりC-1区に位置する掘立柱建物である。桁行2間、梁行2間にて棟方向をN-60°-Eにとり、東西に長い方形を呈する。桁行約488cm、梁行約527cm、面積は19.2m²を測り、総柱の形態を呈する。桁間は西側198cm、東側290cmの異なる間隔であり、柱間を等間隔に配置しない構造である。柱穴の掘り方平面形は円形を呈し、直径26~45cm、深さ34~48cm、柱痕直径は約17~23cmとまとまりを欠いている。北・東辺の柱穴底の高さがほぼ均一していることに対して、西・南辺は黒ボクからの掘り込みであることも関連して総じて深く掘られている。P-301, 302, 318の柱穴埋土内に若干の遺物が混入しており、土師質椀・小皿・鍋、備前焼甕、瀬戸焼碗等の小片がある。土師質小皿301の推定復元計測値は最大径6.9cm、口径6.7cm、底径5.1cm、器高1.4cmを測り、淡灰白色を呈する。外底面はヘラオコシの痕跡をとどめている。



第11図 建物-2 (1/80)

建物—3（第12・19図、図版5-2）

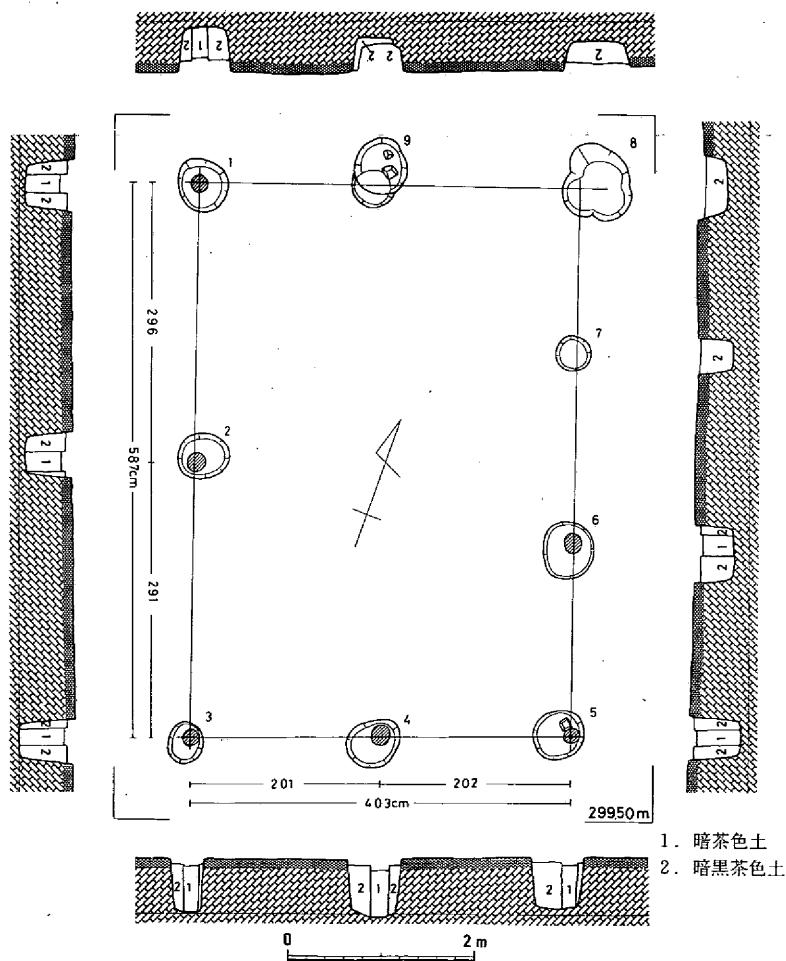
調査区南部中央東よりD・E-2区に位置する掘立柱建物である。近世～近代と考えられる黄灰色粘土の詰った土壌-13に切られており、P-541は土壌埋土下からの検出である。桁行3間、梁行2間にて棟方向をN-71°-Eにとり、平面は長方形を呈する。桁行約750cm、梁行約580cm、面積は43.5m²をはかり、桁間250cm、梁間約200cmにはば統一した数値を示している。柱穴の掘り方平面形は円形を呈し、直径40～46cm、深さ53～68cm、柱痕直径は16～24cmを測る。11本の柱穴底面はほぼ統一した高さで整えられており、しっかりしたまとまりを持つ。P-529は掘り方底に柱痕の直径とほぼ同一規模の扁平な石が設置されている。北東隅の柱穴を除く、P-508, 510, 518, 521, 525, 529, 536, 541, 546の柱穴埋土内より遺物が出土している。土師質土器椀・小皿、備前焼壺・甕、京焼、染付、白磁、肥前系陶磁器等の小片であり、P-521より京焼系の椀21、P-510より肥前系陶磁器の皿24、P-534では土鉢138の上部がみられ、空洞部径2.5cmをはかる。P-541・546では備前焼の徳利38、灯明皿41等がみられる。



建物一4（第13・19図、図版5-2）

調査区東端中央、E・F-2・3区に位置する掘立柱建物である。建物-3と同じ、一段掘り下げられた「L」字区画内に建物-3と並列して配置されている。桁行約587cm、梁行約403cmを測り、東西の桁間が異なる。北・南・東辺の柱間隔は約200cm、西辺が約300cmと差が認められる。柱穴の掘り方平面形はほぼ円形を呈し、直径44~60cm、深さ42~59cm、柱痕直径は16~22cmを測る。P-559, 565, 582, 583, 588の柱穴埋土内より遺物が出土している。土師質土器小皿、肥前系陶磁器、青磁等の小片であり、P-583・588より肥前系陶磁器碗31、皿26がみられる。31は最大径11.3cmを測る伊万里碗であり、26は最大径11.35cm、口径11.1cm、底径3.7cm、器高2.54cmを測り、見込みに砂目の跡が残る唐津の皿である。

建物-3と共に17世紀前半期を含めて、その後に建てられた掘立柱建物の可能性が考えられる。

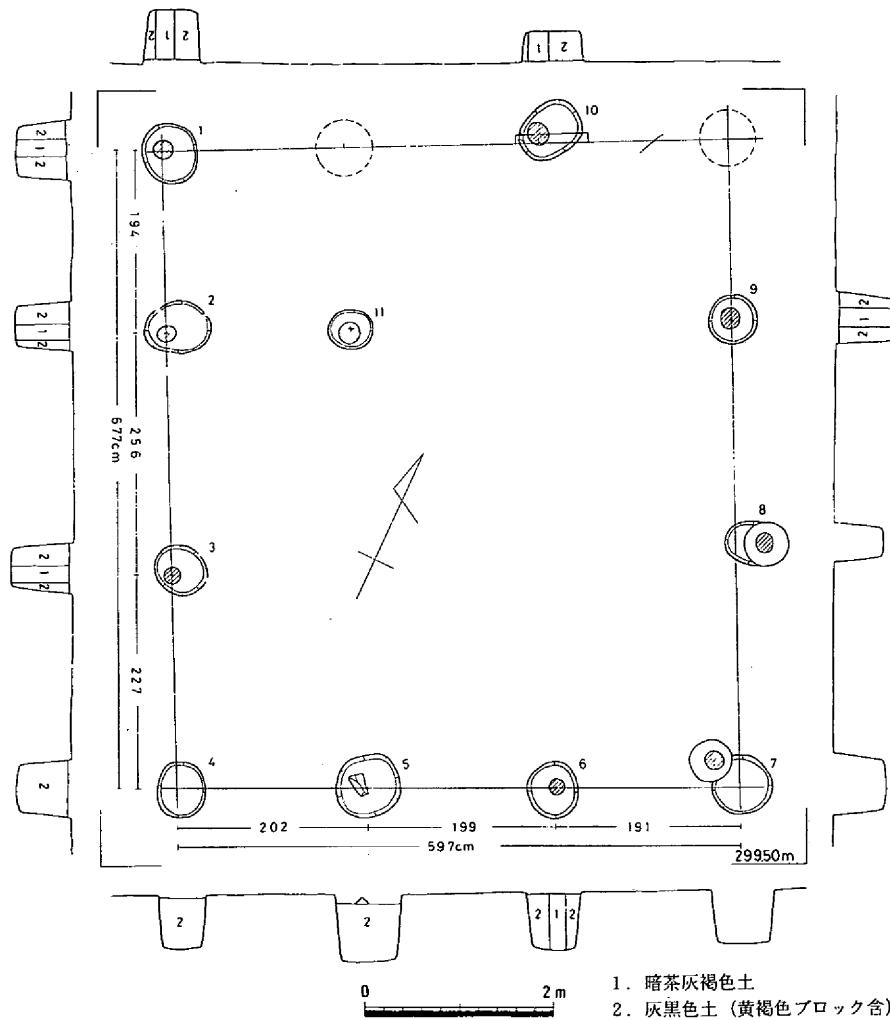


第13図 建物一4 (1/80)

建物—5（第14・19図）

調査区北側中央、C・D-1に位置する掘立柱建物である。建物—1・2に挟まれた配置であり、桁行3間、梁行3間にて棟方向をN-25°-Wとする。桁行677cm、梁行597cm、面積40.4m²、桁間は194~256cm、梁間は191cm~202cmを測る。

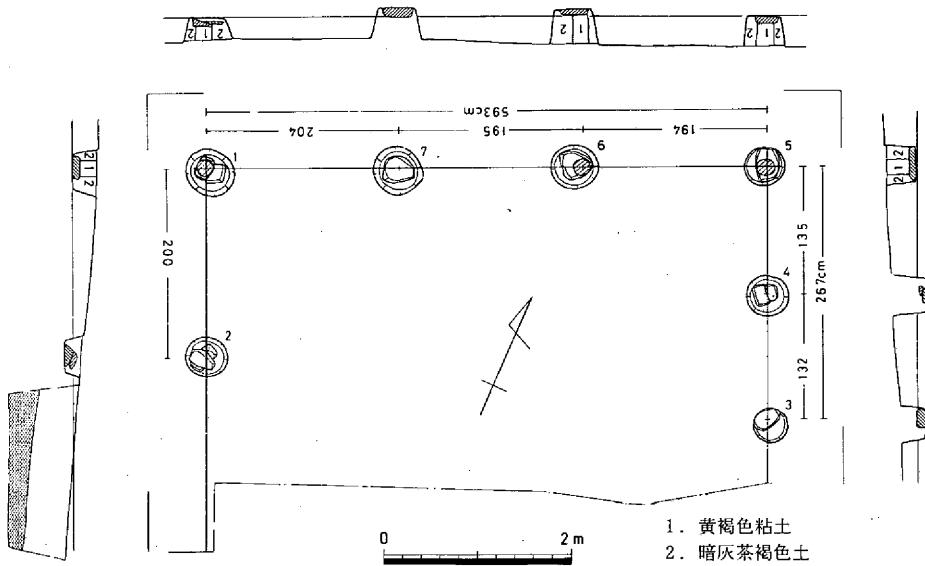
P-183, 190, 226, 247, 251, 274の柱穴埋土内より遺物が出土している。土師質椀・小皿、備前焼、亀山焼、青白磁、染付等の小片であり、P-226より染付碗28、P-274より瀬戸焼19等がある。28はP-487出土の染付皿27に類似しており、二次焼成を受けている。16世紀中葉前後にみられる遺物である。



第14図 建物—5 (1/80)

建物—6（第15・19・20図）

調査区南部中央、C-2区に位置する掘立柱建物である。配石-2を除去した段階で西側の



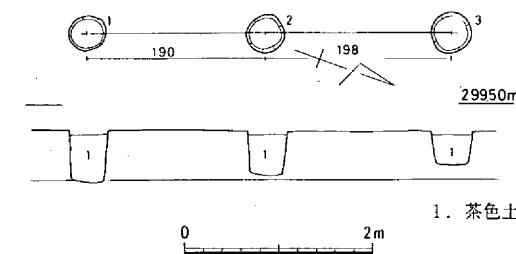
第15図 建物-6 (1/80)

柱穴を検出したものであり、近世の遺構下位よりの発見である。南半分が下段の造田時の削平にあって消失しており、従来の規模は不明であるが、建物-5との梁行数値の近似、北辺の同一方向等より棟方向を南北にとることが推定できる。

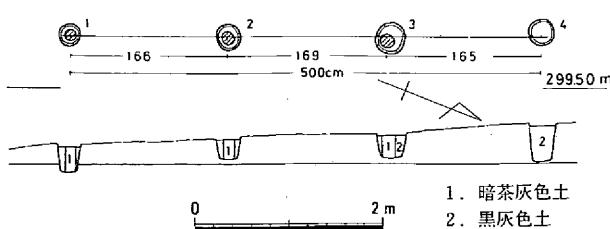
桁行 $(2 + \alpha)$ 間、梁行 3 間にて棟方向を N-24°-W にとり、桁行 $(267 + \alpha)$ cm、梁行 593cm を測る。東西の桁間の数値が

異なる形態であり、建物-4にもみられた。柱穴の掘り方平面は円形を呈し、直径 35~52cm、深さ 11.6~35cm、柱痕直径は 17~19cm を測る。7 本の柱穴底面にすべて扁平な石が配置されており、柱の台石として使用されたと考えられる。柱痕と考えられる部分には黄褐色の粘土が詰め込まれた状態が認められる。

P-482, 702, 703, 705, 706 の柱穴埋土内より土師質椀・小皿・鍋、至大通宝が出土している。P-706 より 133, 137 の土鍋、P-482 より古銭 582 がみられる。



第16図 柱穴列-2 (1/80)



第17図 柱穴列-3 (1/80)

(2) 柱 穴 列

柱穴列－1（第18図）

調査区中央、D－2区に位置する柱穴列である。建物－3の西側梁行に並行する状態で3間の柱間を検出し、北より205、150、200cmを測る。柱穴の掘り方平面は円形を呈し、直径45～60cm、深さ34.2～36.8cm、柱痕直径は20～23cmを測る。P－481、731、772の柱穴埋土内より備前焼、亀山焼、土師質椀・小皿、鉄滓、トリベ等が出土しており、P－481より破損したトリベ139がみられる。最大径7.3cm、口径6.6cm、器高3.7cm、器厚1.1cmをはかり、椀形を呈す。金属製品であるが、磁力に反応せず、内面底にみられる付着物にのみ反応が認められる。器壁内部に穀殻の圧痕が多くみられる。

柱穴列－2（第17図）

調査区中央北部、D－1に位置する柱穴列である。建物－5と切り合っており、柱穴内埋土の状況から建物－5より新しいと判断した。南北に2間で388cmを測る。柱穴の掘り方平面は円形を呈し、直径40～45cm、深さ35～45cm、柱痕直径14～21cmを測る。掘り方内よりの遺物は発見されていない。

柱穴列－3（第18図）

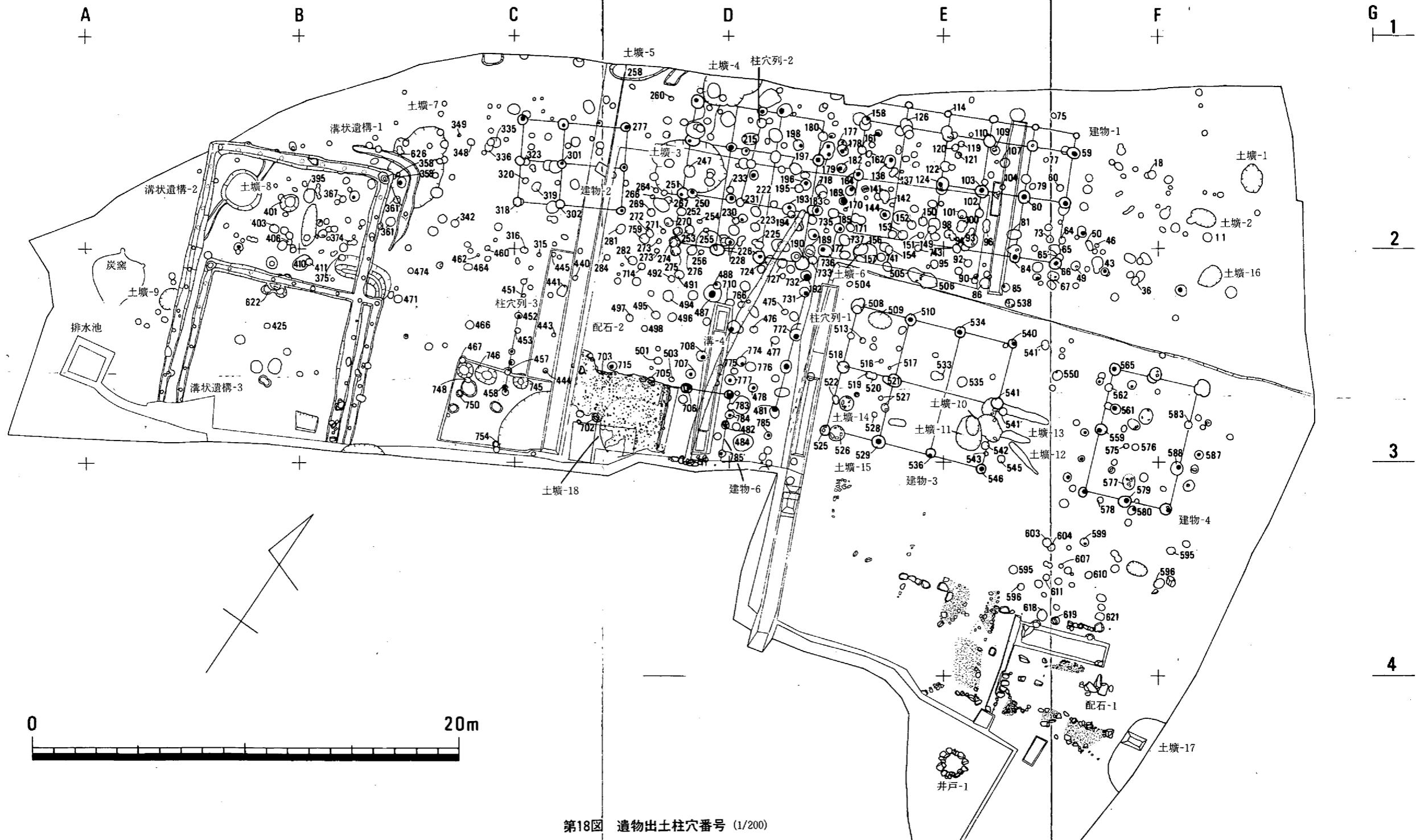
調査区南側中央西より、B・C－2に位置する柱穴列である。南北に3間、柱間165～169cm、柱穴掘り方直径22～33cm、深さ24～39cm、柱痕直径14cmを測る。P－452、458の柱穴埋土内より須恵器、土師器、土師質椀、小皿等の小片が出土している。

(3) 柱 穴

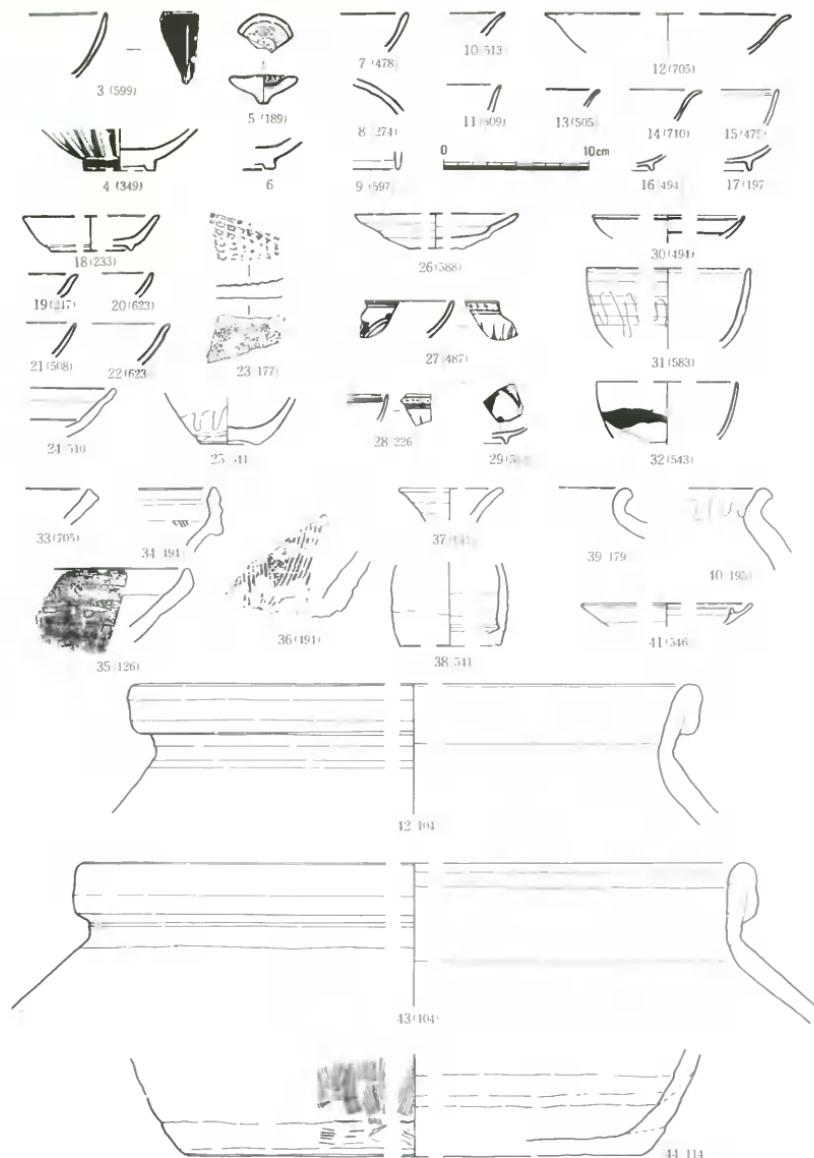
柱穴（第18～23図）

調査区全域において約720穴を前後する柱穴が出土している。その分布は黒ボクの堆積した範囲を中心に扇形に広がっている。比較的大型の柱穴は構造物としてまとめることが可能であったが、他の柱穴についてはまとめきることができなかった。720穴中の約1/3にあたる250穴前後の柱穴掘り方埋土より遺物が出土しており、小片ではあるが、柱穴の機能した時期の上限を知る手がかりとなる。

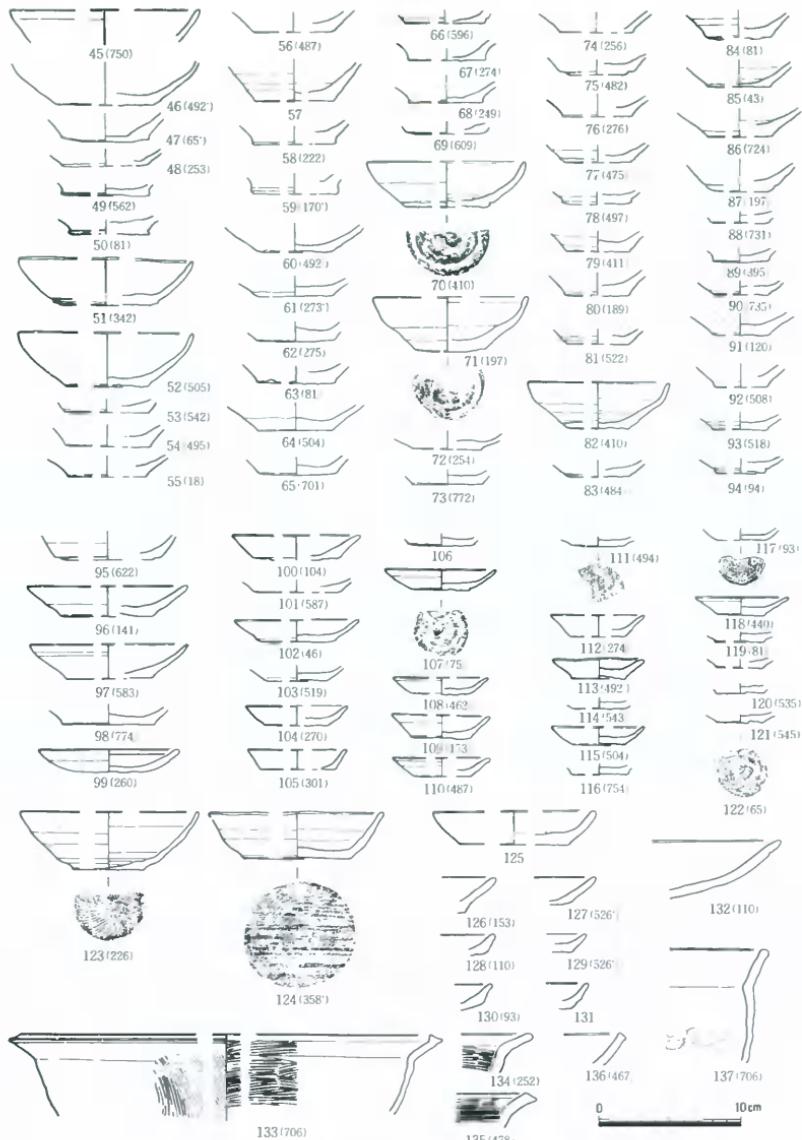
出土遺物は土師質椀・小皿・鍋（45～137・143～148）、備前焼壺・徳利・甕・擂鉢（33～44）、亀山焼、中国製陶磁器碗・皿・蓋物（3～17・27～30）、美濃・瀬戸焼（18～20・22・23）、肥前系陶磁器（24～26・31～32）、土鈴（138）、トリベ（139）、土錘（141）、古銭（142）等がある。これらの遺物と柱穴の関連では、土師質椀・小皿を出土する柱穴が最も多くほぼ全域に分布し、159穴を数える。備前焼が60穴、亀山焼が28穴、中国製陶磁器が19穴、肥前系陶



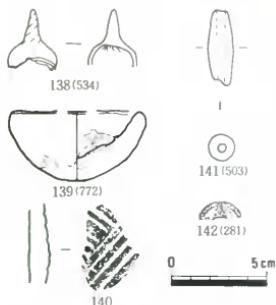
第18図 遺物出土柱穴番号 (1/200)



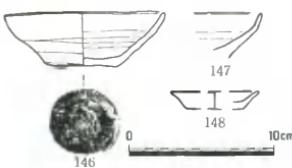
第19図 柱穴内出土遺物 1/4



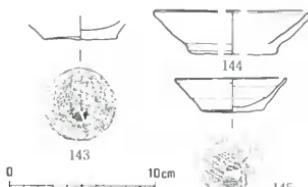
第20図 柱穴内出土遺物 (1/4)



第21図 柱穴内出土遺物 (1/3)



第22図 柱穴内出土遺物 (1/4)



第23図 柱穴内出土遺物 (1/4)

磁器が16穴、美濃・瀬戸焼が7穴、古銭が2穴、京焼が3穴、鉄器が1穴、鉄滓が2穴となる。備前・龜山焼等とその他他の遺物が共伴する例も多いが、これらに混在して縄文、弥生、古墳、奈良時代の小土器片も出土している。

中国製陶磁器を参考にすると13世紀中葉より16世紀後半までの年代幅を考えられ、引続いてみられる肥前系陶磁器では18世紀中葉までの年代が抑えられる。すなわち、ほとんどの柱穴は中・近世の時期に所属すると考えられる。

(4) 溝状遺構・溝

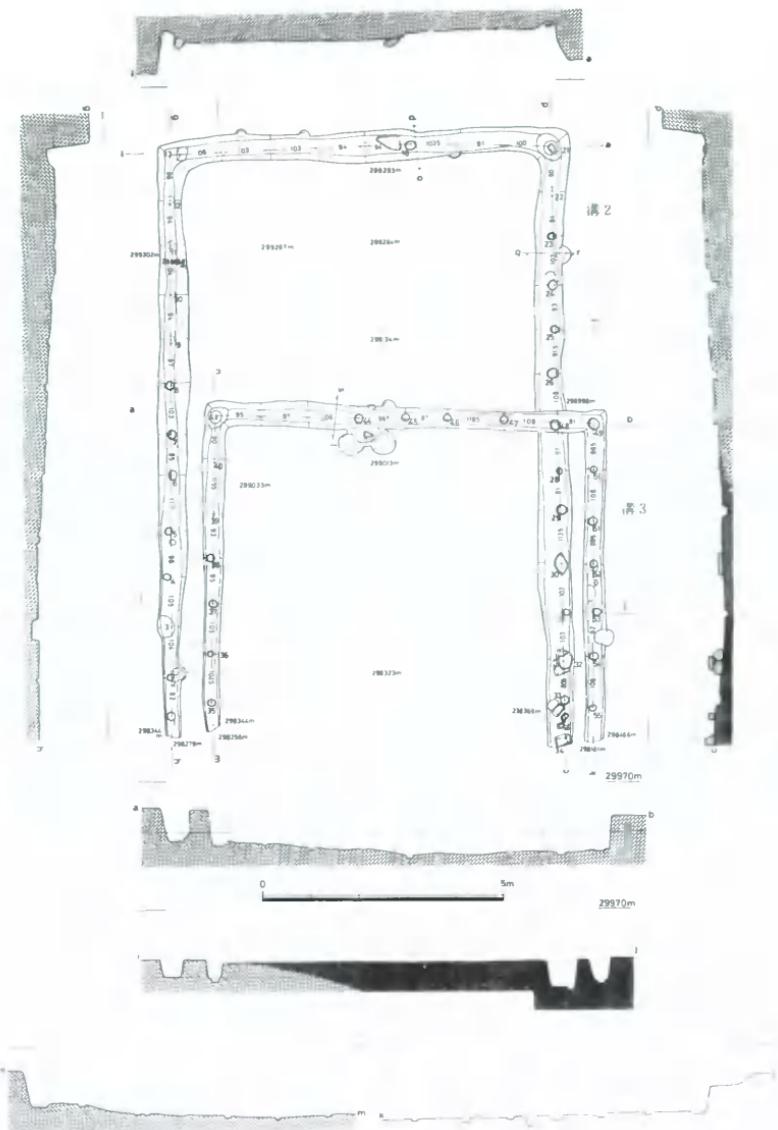
溝状遺構-1 (第26図、図版5-1)

調査区西部、B-1に位置する溝状遺構である。幅約50cm、深さ約8cm、全長約7mを測る「L」字形の浅い溝である。北東角より西へ3m、南へ4mにて消滅しているが、溝状遺構-2・3等との位置、形状の関係より溝状遺構-2・3に類した平面形を有していたものと考えられる。後世の削平により高所部が残存したものだろう。

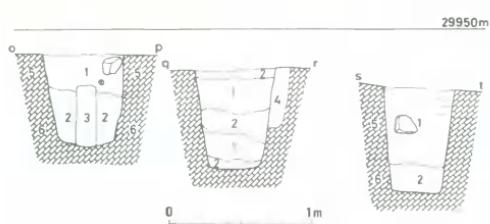
検出時に周辺および溝内より149~155の遺物が出土しており、埋土時の混入と考えられる。153~155は明の染付皿であり、16世紀の範に入るものであろう。

溝状遺構-2 (第24~26図、図版5-1・6)

調査区西部、A・B-1・2区に位置する溝状遺構である。溝状遺構-1、3ともに南北方向に長軸をもち、「コ」字形の平面形を呈する。南側用地外にも延長しているようである。北辺が高所部にあたり、南に向って地形が若干下降している。「コ」字状の溝状遺構は北辺が8.58m、東辺現存長13.00m、西辺現存長14.32m、溝幅約30~70cm、平均が65cm、深さは約7



第24図 溝状遺構-2・3 (1/120)



第25図 溝状遺構-2・3 (1/40)

台石は東西が対応する格好で、ほぼ等間隔に配置されており、その距離は約8mを測る。角に所在する柱痕底の掘り方からそれらに比較して、少し太目の柱が使用された可能性が強い。O・P断面においては埋設された柱が直立した状態で土壤化した痕跡が認められ、残存高約40cmを測る。

すなわち、溝状遺構-2は構造物の土台部にあたり、掘立柱建物の掘り方とはほぼ同様の機能を持ち、それ以上にしっかりした上屋構造を有する壁を支えた基礎部分にあたると考えられる。

たとえば、柱の両側に壁を塗り柱自体を内蔵させる真壁の形状を呈する倉等の存在が想定できる。

遺物は掘り方内の埋土中より156～158の土師質土器が出土している。時期は土壌-7より新しい年代が与えられる。

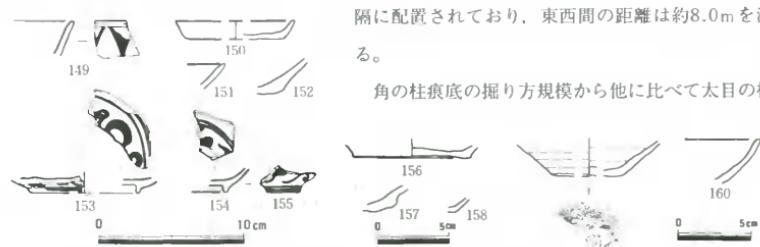
溝状遺構-3 (第24～26図、図版5-1・6)

溝状遺構-2とほとんど同じ場所に位置する。溝状遺構-2の主軸方位がN-22°-W、溝状遺構-3は若干東に傾いており、N-21°-Wをはかる。

北辺が8.4m、東辺現存長6.96m、西辺現存長8.82m、溝幅約32～55cm、平均が40cm、深さは8.8～79cm、平均が70cm位を測る。溝底面には直径12～19cmを測る柱痕跡が認められ、柱間は90～115.5cm、平均値は99.31cmを測る。それらの柱痕跡は東西が対応する格好で、ほぼ等間

隔に配置されており、東西間の距離は約8.0mを測る。

角の柱痕底の掘り方規模から他に比べて太目の柱



第26図 溝状遺構-1・2・3出土遺物 (1/4)

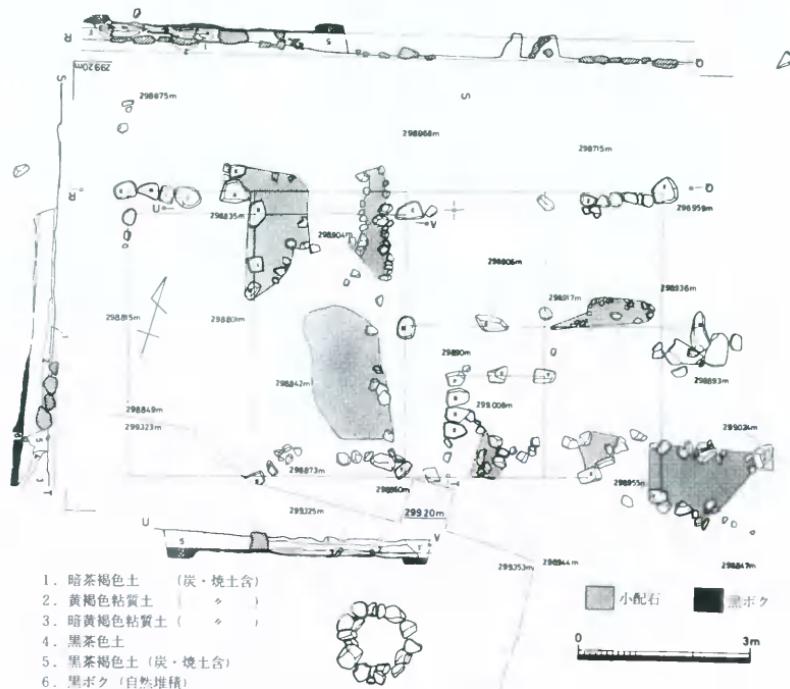
が使用されたことがうかがえる。

溝状遺構－2が廃絶後に、南へ約51cm、東に約35cm移動して、形状・規模ともにはほとんど同様の建物を建替えたと考えられる。

(5) 配 石

配石－1（第27・28図、図版7-1）

調査区南東部、D・E・F-3・4に位置する配石（礎石建物）遺構である。建物－3・4の南側12×16.5mの範囲内に入頭大から握り拳位までの角礫の分布が認められる。整然とした並びではないが、配石場所、方向に規則的な部分を残しており、東西に長軸を持つ礎石建物が存在した可能性がうかがえる。なお、長軸方向はN-73°-Eをはかり、北側に所在する建物－3の桁行、建物－4の梁行方向とも一致する。ほぼ、同時期に機能した構造物と考えられる。配石は造成作業と並行して実施されたと考えられ、南に緩やかに下降する黒ボク堆積土面に



第27図 配石－1 (1/100)

基礎になる角礫（ $27 \times 20 \times 12\text{cm}$, $25 \times 14 \times 18\text{cm}$ ）を配置し、炭・焼土粒を含む黒茶褐色土、黄褐色粘質土をもって約 $20\sim 25\text{cm}$ の客土を行い、平坦面を造り出している。大部分の使用石材はその面において設置されたと考えられ。石の平坦面が露出する状況で炭・焼土粒を含む暗茶褐色土により最終的に整地されている。

構造物の規模は配石状況により長辺 11.30m 、短辺 5.50m 内におさまる可能性が考えられるが明確にしない。比較的安定していると思われる石材A～Zの配置を観察すると、北辺G～E (9.50m)、東辺E～Y (5.50m)、西辺B～N (4.80m)、南辺N～F (9.00m) の石列が存在する。

北辺にあたると考えられるG～Eの石列は建物-3・4の南辺を繋ぐ線と約 5.80m を隔てて並行関係にあり、その距離は建物-3の梁行、建物-4の桁行に使用されている長さと同数値を示す。また、建物-4の東辺桁行の南側延長線上にFが位置し、そこより 90° 西方向にN～FがG～Eと並行している。

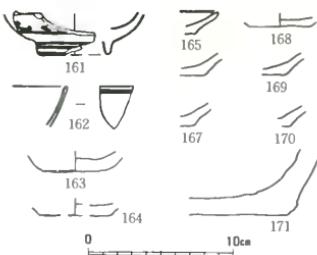
このような石列方向、配置等を参考にすれば、配石-1は建物-3・4、井戸-1と相互に関連を持ち、同一計画のもとに構築が実施された可能性も考えられる。さらに、井戸-1との位置関係を考慮に入れると、屋敷内における炊事機能を有した礎石をもつ建物の存在が想定できる。

遺物は配石に伴う状況での出土は確認できなかったが、配石と同時に実施されたと考えられる3層の造成土内より土師質椀・小皿、肥前系陶磁染付碗、備前焼窯底部の小片計11点が発見されている。**161**、**162**の肥前系陶磁染付碗が最も新しい遺物と考えられ、17世紀末～18世紀代に造成が実施された可能性がうかがえる。

配石-2 (第29図、図版7-2)

調査区の南中央部、C-2区に位置する配石遺構である。西側をK・Lトレンチにより、南側を水田の地下げにより消失しており、現存長は東西に約 4.6m 、南北 3.9m を測る。北・東辺が原形に近い格好を残しており、本来は方形に近い形態を呈していたものも考えられる。

海拔 299.0m の面において土壤周縁に配置された角礫（ $35 \times 22\text{cm}$ ）を検出す。周縁に配置された角礫の内側は直径が約 $3\sim 10\text{cm}$ の河原石を中心とする砂利が掘り方底まで敷き詰められており、 $10\sim 20\text{cm}$ の厚さにおよんでいる。これらの河原石とともに炭・焼土を含む灰褐色砂質土が埋土に使用されており、遺物はこれらに混在した状況で出土している。



第28図 配石-1 出土遺物 (1/4)

186は備前焼であり16世紀後半の特徴をもつ臺の口縁部である。187は亀山焼の口縁部、188は奈良時代の須恵器杯身である。177~185が土師質碗・小皿であり、中世遺構に関連した遺物と考えられるが、配石-2に直接伴うものではない。172・173、174・175は17世紀代と考えられる肥前系陶磁器である。189・190は円板状の土製品であり、備前焼の臺脚部片を利用している。189は直径約6cm、厚さ1.6cm、重量74.04g、190は直径約7cm、厚さ1.5cm、重量77.82gをはかる。



第29図 配石-2 (1/50)・出土遺物 (1/1)

(6) 井 戸

井戸-1 (第30・31図、図版9-2)

調査区南部、D・E-4に位置する石組の井戸である。

相当古くから開口していた井戸と考えられ、今まで「田治部氏屋敷址」と呼称されている由縁でもある。調査に先立ち、地権者である前田正治氏より現状保存の意向が明確にされており、井戸内堆積土の掘り下げは実施せず、現状での清掃、写真撮影、実測作業にとどめた。

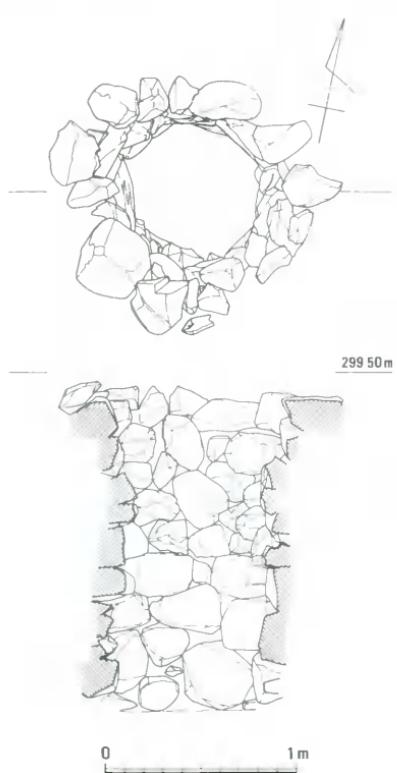
平面は円形を呈し、上端部径は約90cm前後をはかる。上端部より約170cmまでの井戸内石組が露出しており、上端部より約71°~77°の角度をもって内傾しながら約40cm下降し、そこよりほぼ垂直に約130cmにて堆積土の上面にあたる。その位置での直径は約70cmを測る。堆積土上

面より下位100cmまではボーリングによる何の反応もなく、底部はさらに深いものと考えられる。

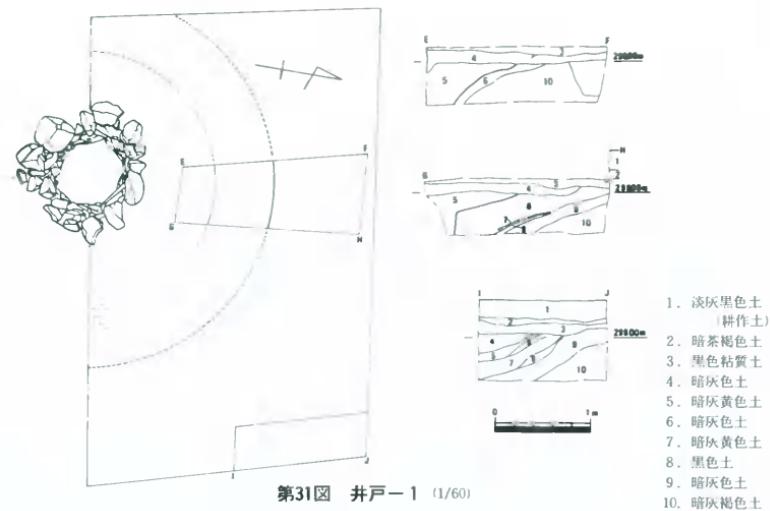
使用石材は $15 \times 10 \times 10\text{cm} \sim 41 \times 35 \times 35\text{cm}$ を測る角礫が使用されており、堆積土より上位約83cmまでは大型の角礫、箇部および広がりをもつ上部には若干小型の角礫が利用されている。上下部にみられる石材規模の相異は井戸使用の時期差であるのか、あるいは一時的に面を整えた技術的結果であるのかは明確にしえないが、下部が整然としており、上部が粗雑な積み方を呈している。

井戸の掘り方を第一次調査による土層断面から推測すると、平面はほぼ円形を呈するを考えられ、直径約384cmを測る。G・H断面では第6層を切って、上端部より 15° の角度でもって中心に向い約67cm下降し、さらにそこより 83° の角度で下降している。その変換点での直径は約260cmを測る。

配石-1との関係をみてみると、配石平



第30図 井戸-1 (1/30)



坦面の海拔高は298.81m～299.07mの範囲内におさまり、掘り方上部と近い数値を示しており、同じ造成土面に存在した可能性が考えられる。その場合には井戸-1の石組が配石-1の平坦面より約40cm位露出した不安定な状態となる。おそらく、前述した井戸内石組の石材規模の相異が何らかの変化を示すものと考えられ、下部石組が古い井戸になり、上部石組が後後に積石された井戸になる可能性が考えられる。

(7) 土 壤

土壤-1 (第32図、図版8-1)

調査区北東、F-2区に位置する土壤である。

地山を掘り込んで造られており、長径132.5cm、短径106cm、深さ68cmを測る。上壙内には90×60×33cmの角礫をほぼ中央に入れ、上部を小角礫で覆う状況に多くの石材が投げ込まれている。遺物等の出土もなく性格、時期ともに不明である。

土壤-2

調査区北東、F-2区に位置し、直径120cm、短径80cm、深さ3cm前後を測り平面が小判形を呈する土壤である。茶褐色土の堆積がみられたが無遺物であり性格、時期ともに不明である。

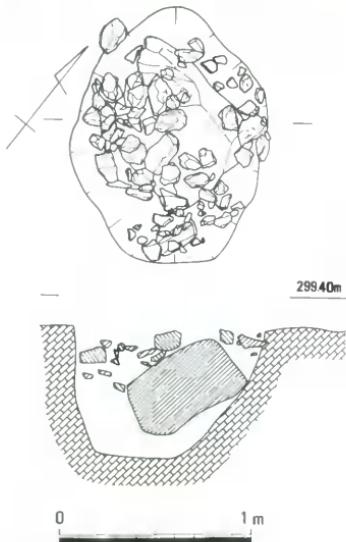
土壤-3 (第33・34図)

調査区北部中央、C-1区に位置し、長径360cm、短径250cm、深さ20cmを測る東西に長い上

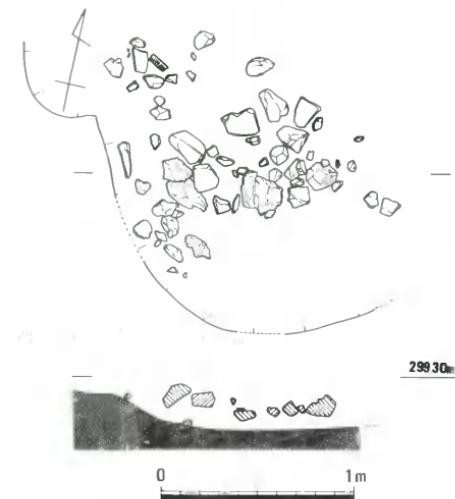
壙である。土壤内西側に角礫がまとまって分布しており、範囲は150×130cmを測るが、とくに規則性は見出せない。土壤上端部を建物-5の柱穴により破壊されており、建物より古いことが判明している。

遺物は土師質椀、備前焼甕、瓦質土器の破片が角礫とほぼ同じ位置より出土している。191は口径約36.2cmを測り、垂直に立つ頸部に直径1.2cmの菊花状のスタンプ文が一巡している。

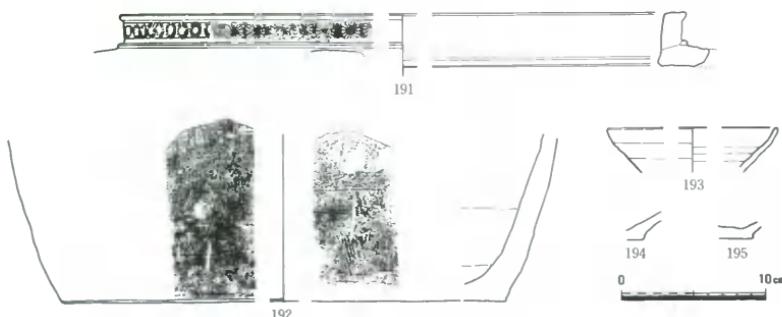
肩部に透し孔の一部が認められ、色調淡灰橙色を呈する瓦質火鉢と考えられる。193～195は焼成の良好な土師質椀であり、橙褐色系と乳灰



第32図 土壙-1 (1/30)



第33図 土壙-3 (1/30)

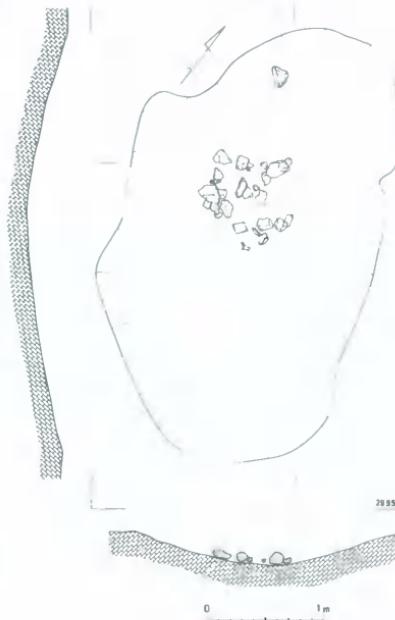


第34図 土壙-3 出土遺物 (1/4)

白色系の二者がある。193は口径約11.8cm、胎土に0.1~4mm程の砂粒を含み色調淡橙褐色を呈する。器内外面に凹凸の目立つヨコナデが施されており、外底面は194・195と同じヘラによる切り離しと思われる。

土壤-4 (図版8-2)

調査区北部中央、C・D-1区に位置し、東西に長い土壤である。長径250cm、短径135cm、深さ約50cmを測る。2~3基の土壤および柱穴の切り合い関係にあるが、遺物は出土しておらず性格、時期も不明である。

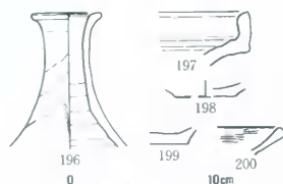


土壤-5

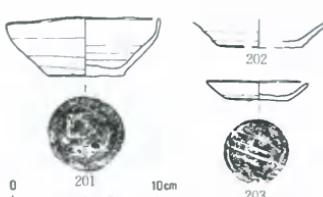
調査区北部中央、C-1区に位置し、現存長290cm、深さ約15cmを測る楕円形の土壤である。土壤-4と同じく性格、時期も不明である。

土壤-7 (第35図、図版8-3)

調査区北部西より、B-1区中央に位置し、長径388cm、短径228cm、深さ33cmを測る楕円形の浅い土壤である。溝状構造-1・2により西南部をカットされて



第35図 土壤-7 (1/50)・出土遺物 (1/1)



第36図 土壤-9 出土遺物 (1/1)

いるが、底部に80×90cmの範囲に拳大から20×13.5×11cmまでの角碟約30石がまとまって出土している。それらに混在して196の備前焼徳利の首が出土しており、16世紀中葉の時期に比定できる。

土壤-8 (第18図、図版5-1)

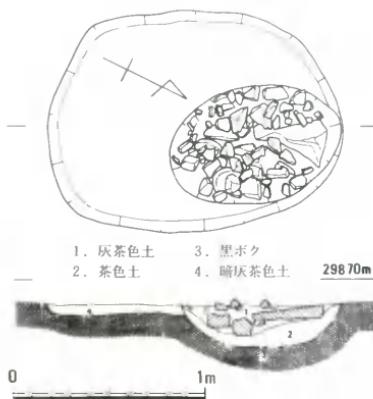
調査区西部、A-1区に位置し、直径約

185cm、深さ約26cmを測る円形の土壙である。溝状遺構-2に伴う可能性が考えられる施設である。

土壙-9 (第36図、図版8-4)

調査区西部、A-2区に位置する土壙である。溝状遺構-2により東側が削平されており、長径現存長110cm、短径約70cmを測り梢円形を呈する。

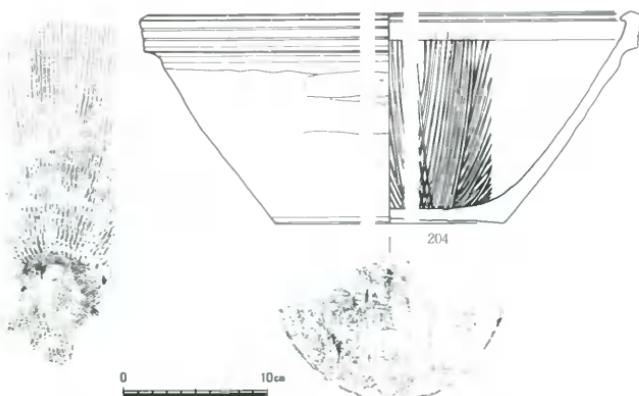
土壙上層から土師質椀・小皿の完形品が出土している。201はヘラオコシによる底部から口縁に向って内湾する土師質椀であり、器内外面にはヨコナデ痕跡が顕著に認められ、胎土中に0.3cmまでの白色砂粒を比較的多く含んでいる。



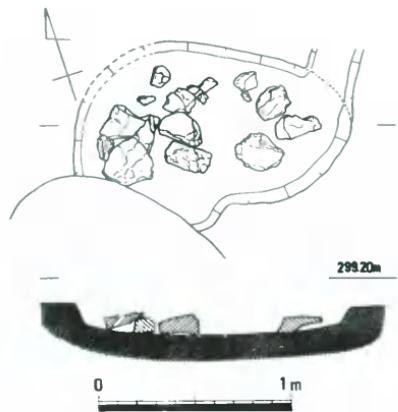
外底面に板目痕、内底面には仕上げナデが認められる。色調は灰白色を呈する。最大径10.98cm、口径10.73cm、器高3.82cm、底径5.26cm、重量85.24gを測る。203は最大径7.22cm、口径7.1cm、器高1.4cm、重量23.82gを測る土師質小皿である。調整技法、色調、胎土、焼成ともに椀201に近似しており、焼成良好である。

土壙-10・11 (第37図、図版21)

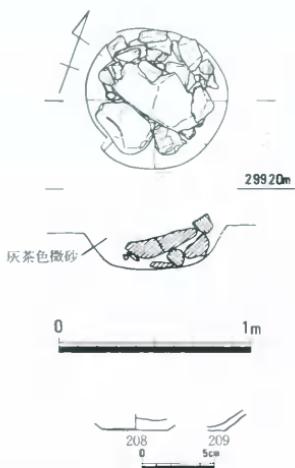
調査区東部、E-2に位置し、土壙-10が土壙-11を、土壙-11が土壙-12を切ってつ



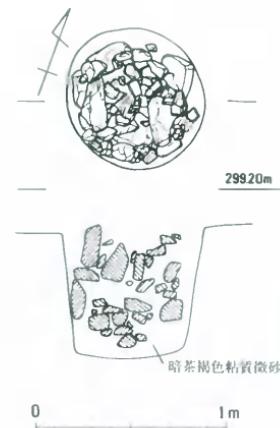
第37図 土壙-10, 11 (1/30) • 出土遺物 (1/1)



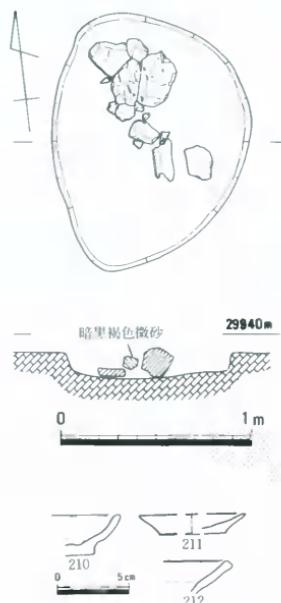
第38図 土壌-12 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第40図 土壌-15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第39図 土壌-14 (1/30)



第41図 土壌-16 (1/30)・出土遺物 (1/4)

くられている。土壌-10は長径92cm, 短径62cm, 深さ約22cmを測り, 平面は楕円形, 断面楕形を呈する。掘り方西側の傾きに沿って擂鉢片が投げ込まれており, 土壌内全面に石が詰められている。204は最大径34.8cm, 口径31.8cm, 器高14.5cmを測る擂鉢である。内面は削し目が幅3.7cm内13本の単位でもって放射状にみられ, 底面より上位5.5cm間に摩耗痕が認められる。外面部は横位のヘラケズリ, 口縁部外面は二条の沈線, 内面に突出部がみられる。色調は暗茶褐色を呈し, 形態, 技法的には備前焼に近似するが生産地は不明である。

土壌-12 (第38図)

調査区東部, E-2に位置する楕円形の土壌である。長径143cm, 短径約100cm, 深さ17cmを測り, 底面に接して板状の礫15石がみられる。炭, 烧土粒を含む黄灰褐色砂質土より青磁, 土師質小皿, 唐津系陶器が出土している。207は唐津系陶器で17世紀前半期に比定できる。

土壌-14 (第39図, 図版8-5)

調査区南部, D-2に位置する円形の土壌である。直径約70cm, 深さ68cmを測り, 底部近くより上端まで小角礫が充満している。

土壌-15 (第40図, 図版8-6)

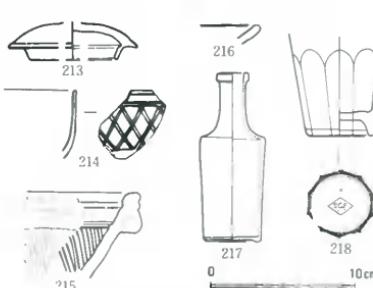
土壌-14の南側に位置する円形の土壌である。直径約75cm, 深さ22cmを測り, 板状および拳大の角礫が數かれている状態を呈する。礫石の可能性も考えられるが, 性格, 時期ともに不明である。

土壌-16 (第41図, 図版8-7)

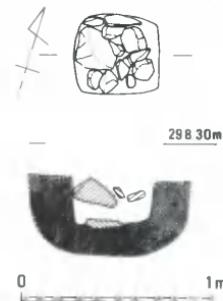
調査区東端, F-3に位置する不整形の土壌である。長径134cm, 短径105cm, 深さ13cmを測り, 底部に角礫が見られ, 合土内より土師質皿, 鍋の小片が出土している。

土壌-17 (第18図)

調査区南東端に位置し, 東側半分以上を宅地造成により消失している。長径400cm, 短径130cm, 深さ91.5cmを測り, 掘り方底は地山面を少し掘り込んでいる。土壌内より肥前系陶磁



第42図 土壌-17出土遺物 (1/4)



第43図 P-538 (1/30)

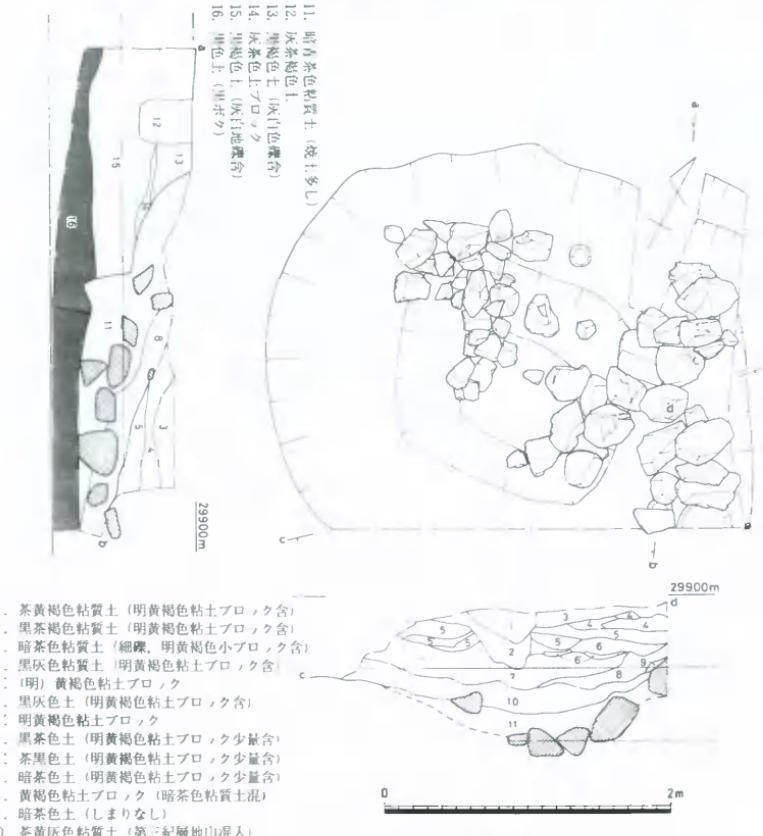
器、備前焼、土師質鍋、ガラス瓶、カップ等が出土しており、218の底にはSGFのアルファベットがみられる。近代のゴミ穴と考えられるものである。

P-538 (第43図、図版8-8)

調査区東部のE-2に位置する隅円方形の土壌である。一辺約40cm、深さ26cmを測り、底面に扁平な石が配されており、上部に小角礫が詰め込まれている。石と石の間には土が入っておらず、新しい時期の遺構と考えられる。

土壤-18 (第44・45図、図版9-1)

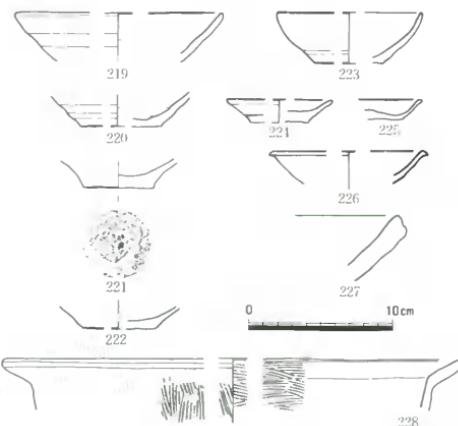
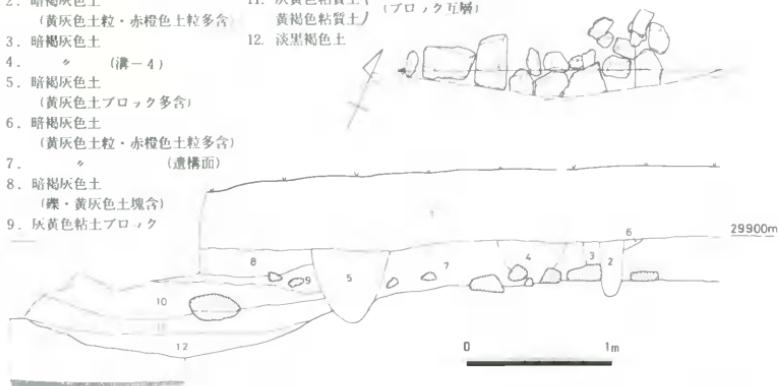
調査区南側中央、C-2区に位置し南端を水田により削平を受けた隅円方形の土壌である。配石-1、建物-6等と三時期の切り合い、重複関係を有し、本土壌が最も古く、建物-6、配石



第44図 土壤-18 [1/10]

1. 褐灰色土
2. 暗褐灰色土
(黄灰色土粒・赤橙色土粒多含)
3. 暗褐灰色土
4. ショウ (磧-4)
5. 暗褐灰色土
(黄灰色土ブロック多含)
6. 暗褐灰色土
(黄灰色土粒・赤橙色土粒多含)
7. ショウ (遺構面)
8. 暗褐灰色土
(砾・黄灰色土塊含)
9. 黄褐色粘土ブロック

10. 黒褐色土
11. 黄褐色粘質土
(プロノク互層)
黄褐色粘質土
12. 淡黒褐色土



第45図 土壌-18 (1/40)。出土遺物 (1/4)

もって硬度に締めている。その互層のくりかえしが第7層と第5'・6層、第5層と第4・4'層、そして第3層の関係で認められる。一挙に埋め戻された状況を呈する層序である。

遺物は第3～第11層中より土師質椀219～223、土師質小皿224・225、白磁皿226、龜山焼227、土師質鍋228が出土している。219は口径14.3cm、胎土中に約0.5cmの白色小砂粒、雲母を含み橙褐色を呈する。220～223は219と異なり淡褐灰色系の色調であり、口辺部が内湾する椀と考えられる。223は最大径10.15cm、口径9.95cm、器高3.6cm、底径4.7cmを測る。13～14世紀の所産と考えられる。

— 1 の順序で存在した状況を呈する。

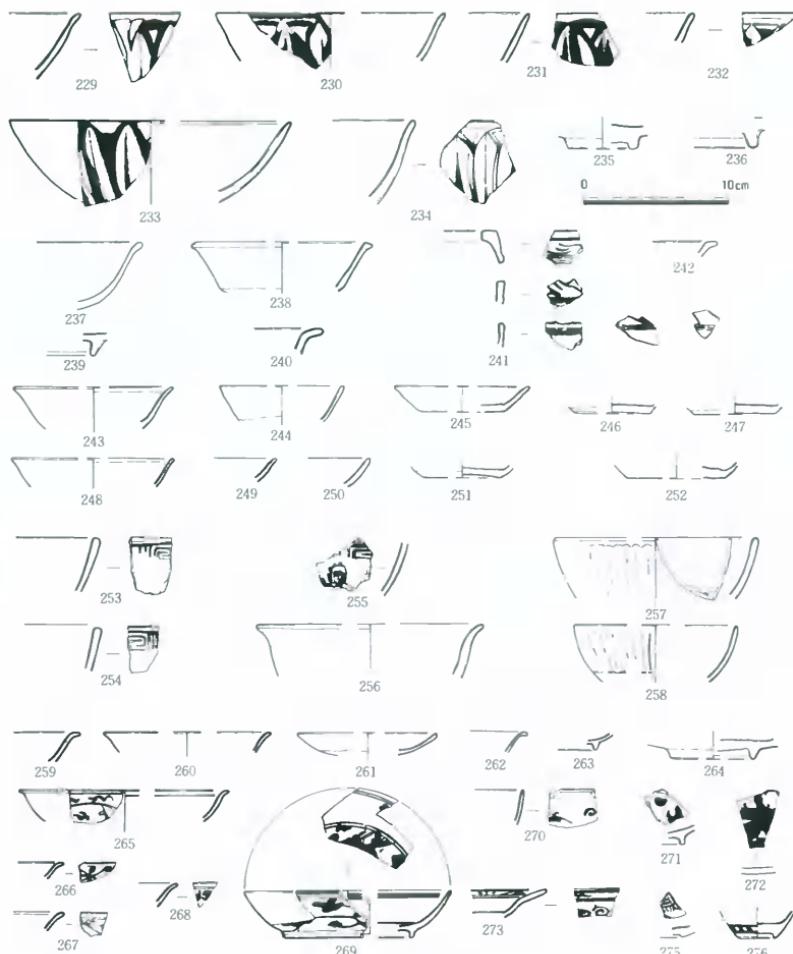
平面形上端および下端ともに隅円方形を呈しており、直径170cmの円内におさまり、下端は88×72cm、深さ約110cmを測る。断面形は擂鉢状を呈し、底面および斜面部に北、西側上部より投げ込まれたと考えられる人頭大の角礫50石前後が散乱している。その上部は大きく7層からなる上層により埋められている。石の上部に第11層である焼土を含む暗青茶色粘質土を置き、さらに、黄灰褐

色系の粘質土である第8、10層で

(8) 包 含 層

前述したようにコンテナ (54.5×34.0×14.0m)にして19箱出土した遺物のうち、15箱が包含層からの出土品である。

まず、屋敷址に関連する中・近世の遺物を取上げ説明を行い、その後に縄文、弥生、古墳、古代にかけての遺物説明を行う。



第46図 中国製陶磁器 (1/4)

中世では中国製陶磁器、土師質土器、龜山焼、備前焼、東播系須恵器、瀬戸・美濃焼、肥前系陶磁器、他に円板状土製品、上鍤、古錢、金属製品、鉄滓等がみられる。近世では肥前系陶磁器、備前焼、產地不明陶磁器等がみられる。

中国製陶磁器（第46図、図版17・19－1）

229～276が相当する遺物である。13世紀中葉より16世紀末、17世紀初頭までの年代幅が考えられる。229～235が竜泉窯系青磁碗であり、色調は暗緑灰色、暗オリーブ色を呈するものが多い。体部外面は片切影によって幅の広い蓮弁を表現しており、229、234等は鋸の隆線が顕著に認められる。高台内を除く全面に施釉されており、暈付の一部にまで釉がまわっている個体がある。238、239が竜泉窯系青磁杯である。241は景德鎮窯の青白磁と考えられ、青白色を呈する香炉である。243～252は白磁皿であり、青灰色のかかった白色を呈する。口径は約9.4～11cm、底径は約5.2～6.8cm、器高約1.8～3.5cmのバラエティがあり、内面底にスタンプ状の押圧痕がみられる246、251がある。246、247は外面底に施釉がまったくみられずヘラキリ痕が明瞭である。口縁端および内面上部2～5mmは無釉であり、いわゆる口禿の杯である。

以上の遺物が13世紀中葉から14世紀中葉間に比定できる。

253～254は口縁部外面に雷文のスタンプが施されており、色調は灰色を帯びるオリーブ色を呈する碗である。255は器内面に雷文および帽子を被った人物のスタンプ文がみられる。

256は口径15.8cmを測る鮮明なオリーブ色を呈する青磁碗である。0.8mmを測る比較的厚目の釉が施されている。257、258は線描蓮弁文の施された青磁碗であり、緑灰色系の色調を呈する。

以上が15世紀代前後に比定できる。

259～263は白磁の皿であり、口縁部が端反になると内湾するものとある。灰白色を呈している。265～276は染付皿、碗、小杯等であり、端反の皿が多く出土している。

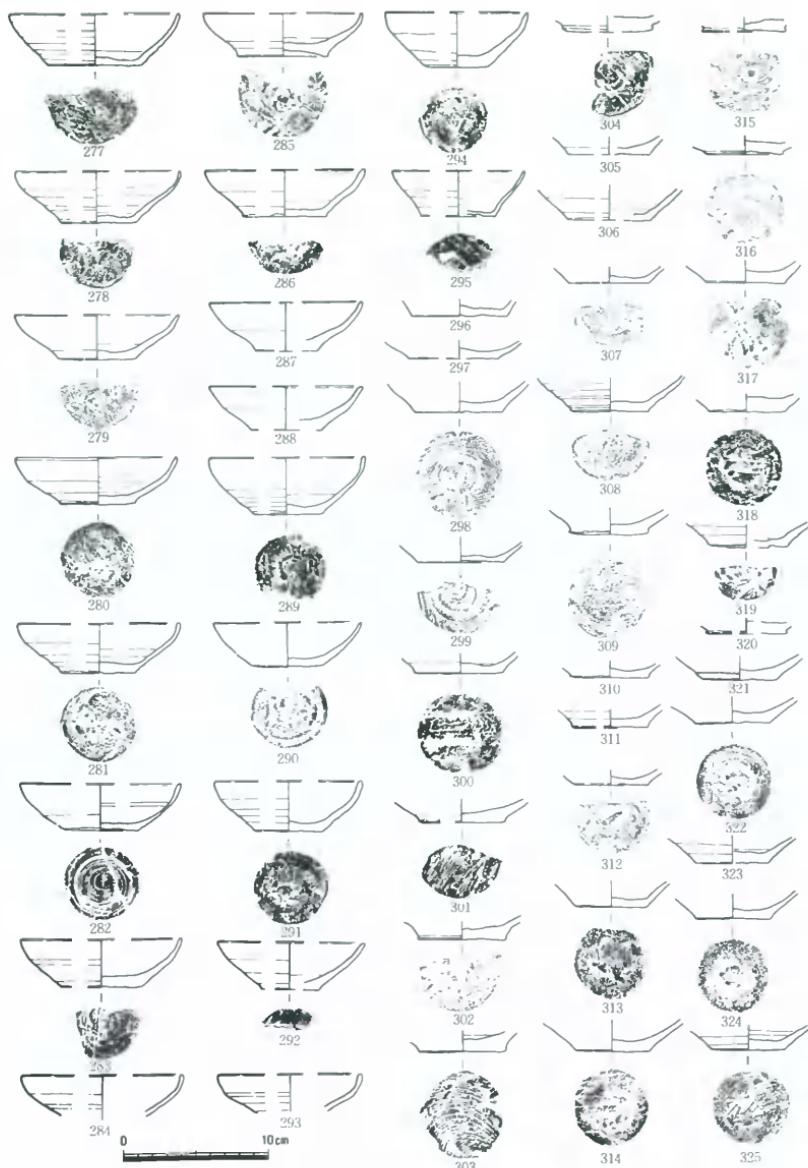
以上が15世紀後半より16世紀後半、17世紀初頭までに比定できる。

これらの中には火災により二次焼成を受けたと考えられる破片が認められる。器内外面の施釉が変化を起し、表面がザラつき、不透明な状況を呈する。火災、構造物の立て替え等の時期を抑えることのできる遺物である。230、248、259、266～268、273がそれにあたる。

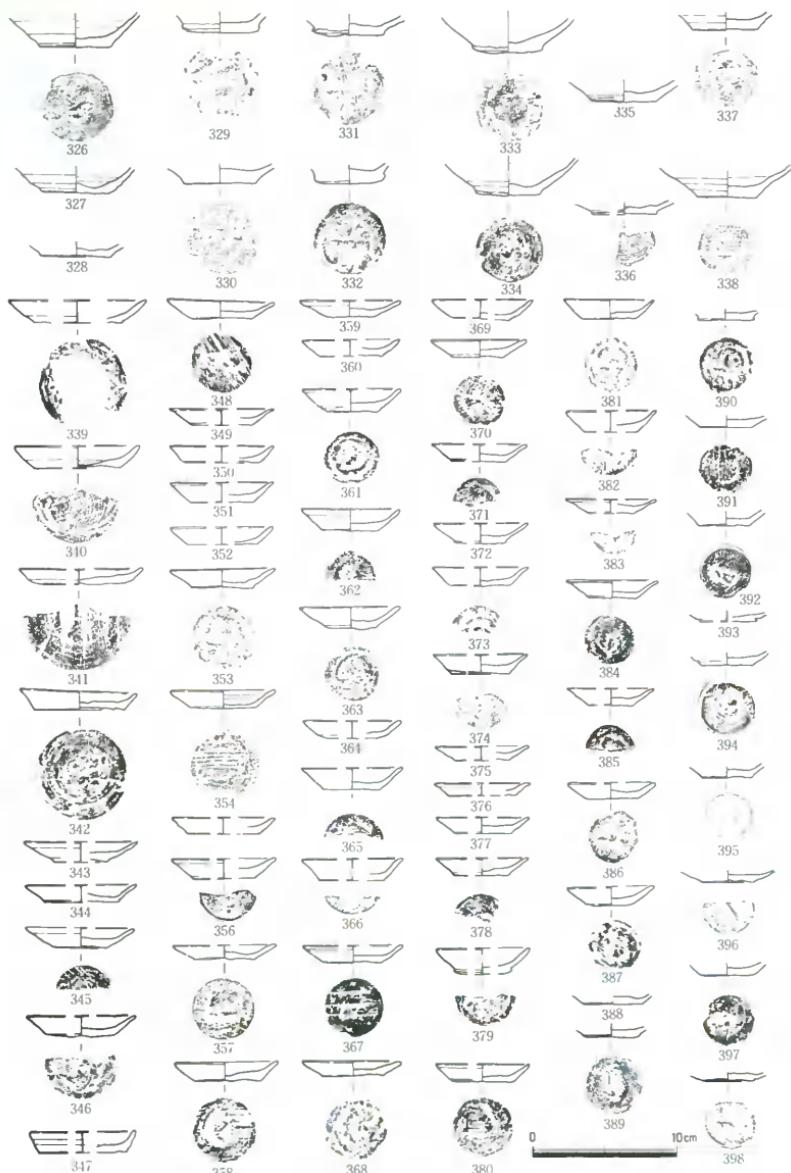
土師質土器（第47～49図、図版21～23）

出土遺物のなかで最も量の多い土器が土師質土器であり、椀、小皿、鍋の順にみられる。他に中型の皿、擂鉢、瓦質の鍋等も一部含まれている。

土師質椀には底部をヘラ状工具による切り離しと、貼付高台、糸切りによる3種類が認められる。糸切り底は数片のみの出土で、303、315、316、336等がそれであり。胎土中に金雲母を多く含み、色調灰橙色系を呈し、土器の回転は右方向である。前者は底部切り離し、底面より口縁に向う体部の内湾が顕著な特徴をもち、色調は乳白灰色系から灰褐色系までみられるが、大

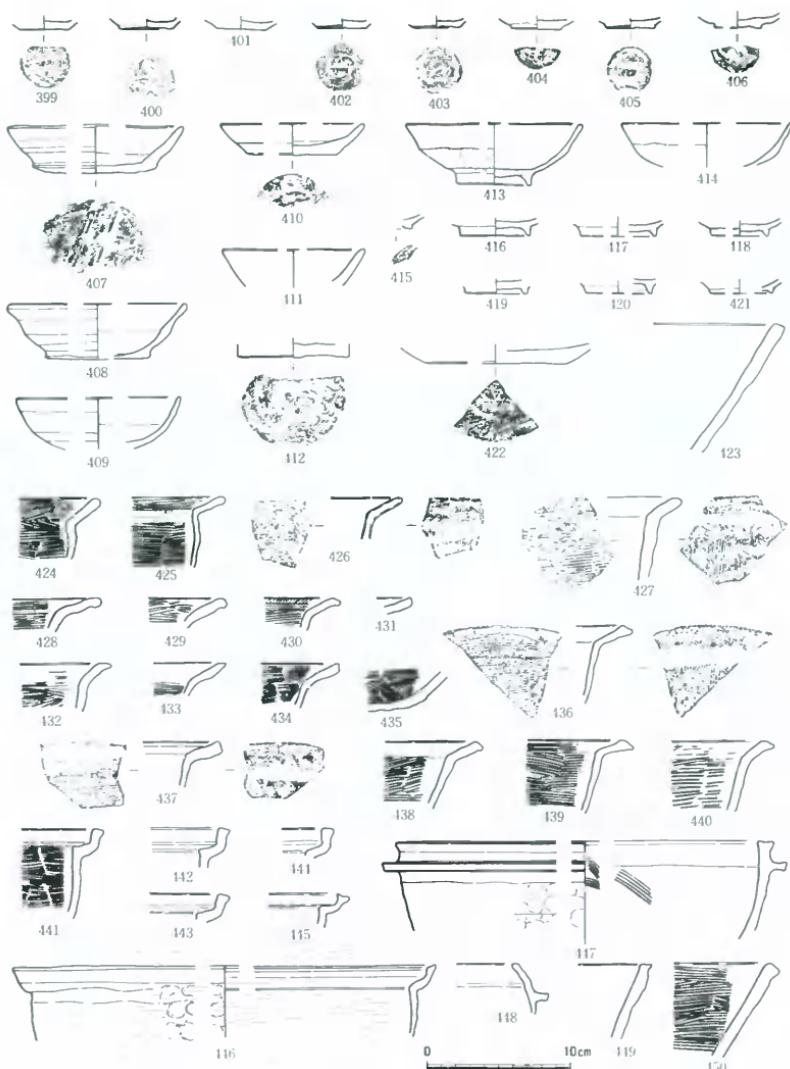


第47図 土師質土器 1/1



第48図 土師質土器 (1/4)

半が灰白色系の明るいもので占められている。277~338がそれである。包含層から完形品で出土したものは280が1点のみであり、計測不可能なものが多い、あえて復元実測を行い、その



第49図 土師質土器 (1/4)

傾向を観察すると最大径は13.1～9.2cm、口径12.9～9.0cm、器高4.0～3.0cm、底径6.75～3.4cmの個体差が認められる。各部において極端な変化は認められず、0.1～0.4cmの規模で漸次法量が小型化しており、なかでも底径の規模は0.1cm単位で変化が存在する。最大径は約11.2cm、器高3.2、3.4、3.6、3.8cm、底径は3.9、4.4、4.8、5.0、5.2、5.4、5.6、5.8、6.0、6.2cmのものが多い。土器の回転は左方向が認められ内面底には仕上げナデが施されている。

409、413～421が前者の椀と異なる形態、技法をもっている。**409**は色調灰白色を呈し、最大径11.3cmを測る非常に丁寧に作られている椀である。**413～421**は付高台の椀であり、体部中位に稜線をもち、外面下半に指頭圧痕、上部がヨコナデにより仕上げられている。最大径12.2cm、口径11.8cm、器高4.3cm、底径5.1cmを測り、色調淡灰褐色を呈する。県南部にみられる早島式土器の形態、技法に類似しているが、色調、胎土に若干異なりが認められる。形態、法量からは13世紀の中葉以後の時期が与えられる。

339～406が土師質小皿であり、色調、胎土、技法は土師質椀とはほぼ同じ傾向を示す。底部切り離しはヘラ状工具により行なわれており、板目痕がみられる。内面底は仕上げナデが施されており、土器の回転は左方向が認められる。実測可能な小皿は**342、348、353、354、358、362、363、368、370、381、384**の11点であり、他は復元実測である。その傾向を観察すると最大径は8.1～6.0cm、口径7.8～5.7cm、器高1.7～0.9cm、底径6.1～3.0cmの個体差が認められる。各部における極端な変化は認められず、0.1cm内外の変化規模で漸次法量が小型化している。最大径は7.4、7.2、7.0、6.6cm、器高1.6、1.2cm、底径4.6、4.4、4.0、3.8、3.6cmの数値を測るものが多い。

土壤-9を参考にすれば、**358**等の土師質小皿は**280**等の土師質椀との同時使用が考えられる。13世紀中葉から14世紀後半を含む幅を考えておきたい。

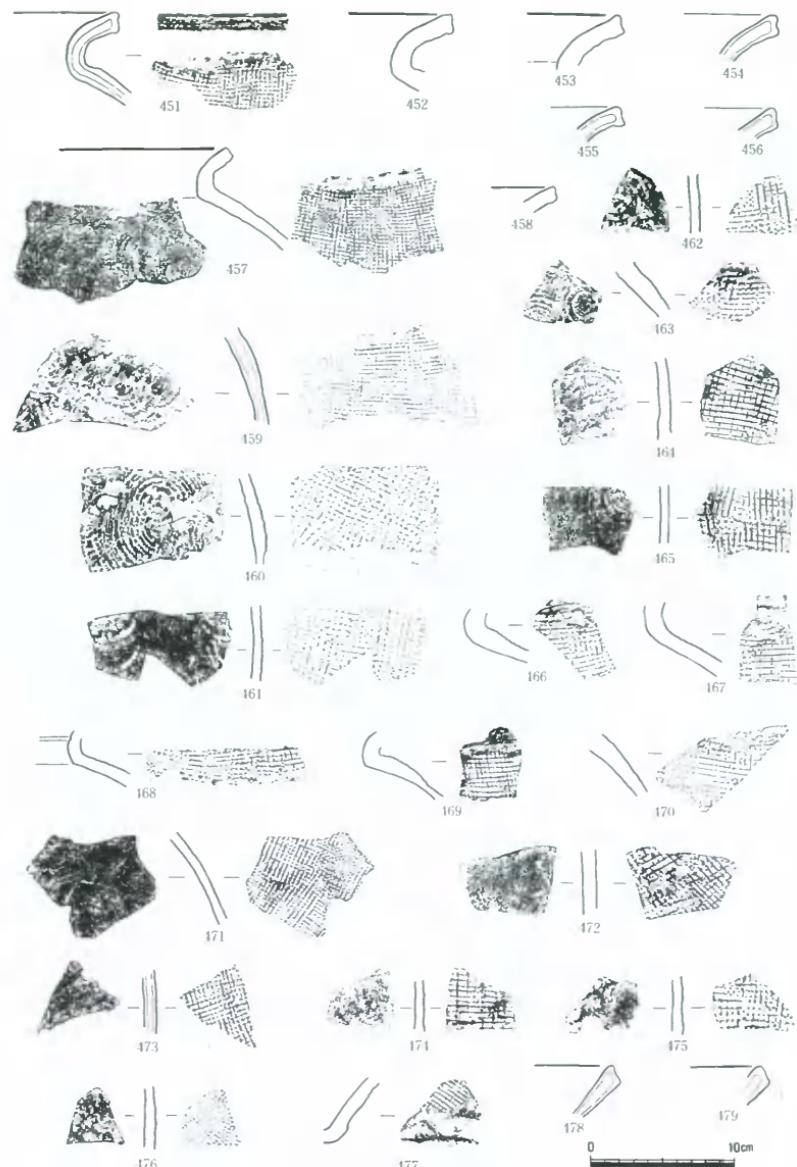
424～448が土師質の鍋であり、口辺の形態より大きく3種類にわけることができる。**424～440**は口縁部が「く」の字に屈曲し、器内面に横位、外面に縦位のハケメが施されている。淡褐色～暗灰褐色系の色調を呈するものが多い。

441～446は外部に向って階段状に屈曲拡張する蓋受状を呈する口縁部をもち、口縁端部に平坦面を有する。外面口縁下に指頭圧痕が施され、色調は灰色系を基調としている。**447～448**は鍔付の鍋で灰白色、および灰褐色系を呈し、器外面鍔部下位は全面に指頭圧痕が施されている。

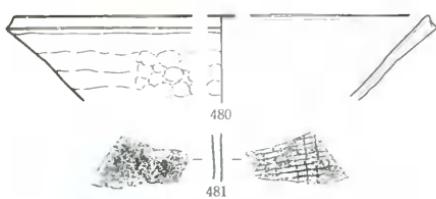
他に**423、449、450**等の土師質鉢が含まれている。

亀山焼（第50・51図、図版18）

451～481が亀山焼の甕および擂鉢（こね鉢）の破片である。大型の甕が多く、なかでも器壁の薄いものが若干小振りな器形になると考えられる。口縁下端より肩の屈曲点までの傾きが40～60°前後を測る。灰白色、淡灰色系を基調とするものが中心であるが、**464、465、472**等は焼



第50図 龜山焼 1/4



第51図 龜山焼 (1/4)

ら $0.35 \times 0.65\text{cm}$ までの方形が存在し、一辺 $0.3 \sim 0.4\text{cm}$ 前後を測るものが多い。なかには**474**、**481**のように $0.35 \times 0.65\text{cm}$ のように横に長い方形が存在する。

擂鉢（こね鉢）は黒灰色を呈し、口縁部が肥厚する形態である。**477**～**480**がそれにあたる。**457**等の口縁の形態が**451**～**456**等より古面を呈すると考えられ、胴部外面には平行叩目が認められないことより、13世紀後半以降の所産と思われる。

備前焼（第52・53図、図版18、19-2）

椀類を除いた擂鉢、甕、壺、燈明皿の各種が出土しており、**483**～**535**がそれにあたる。赤色に発色したものが多い。擂鉢では**483**～**488**、甕では**505**～**521**、壺では**526**～**528**が中世の枠でとらえられ、**489**～**495**、**504**、**531**～**535**等の擂鉢、燈明皿が近世・近代と考えられる。

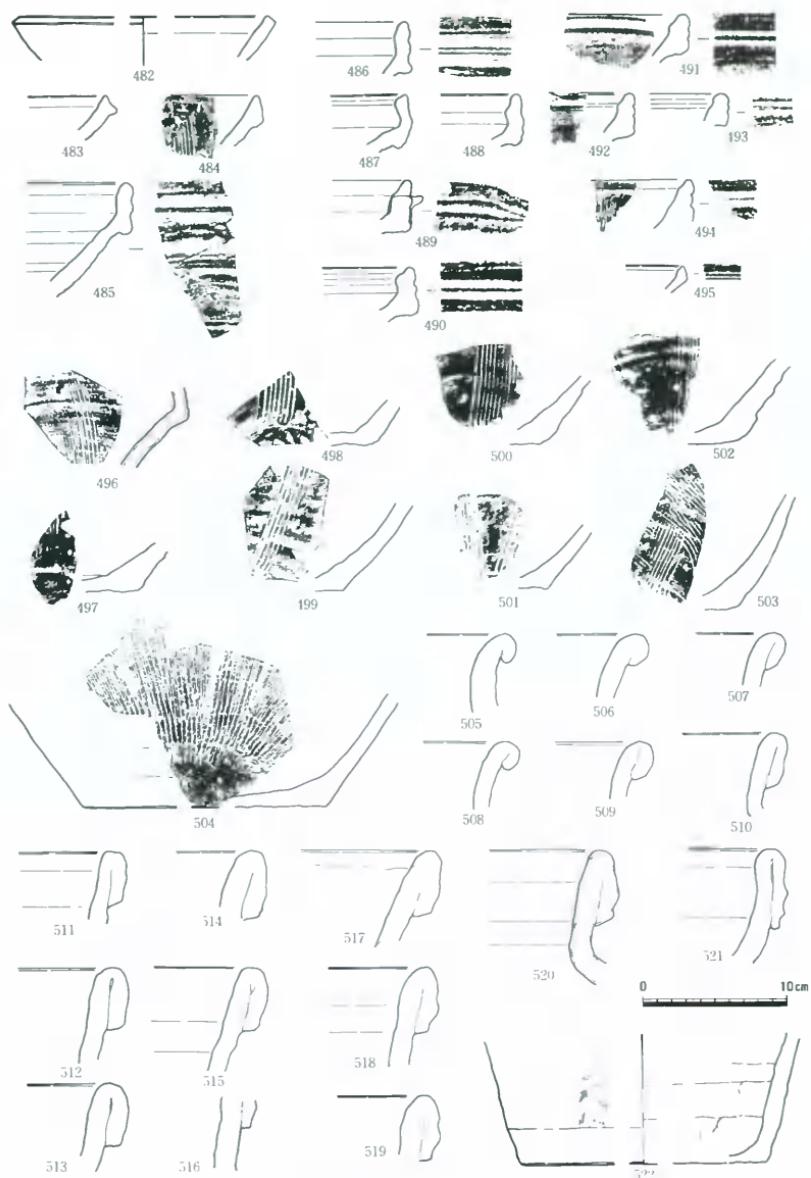
擂鉢は**485**～**488**、甕は**510**～**520**、壺は**526**～**528**の器形が多く、これらが同時使用された可能性が強い。擂鉢**483**、**484**は甕**505**～**509**等との関係が想定でき、近世、近代でも擂鉢**489**～**495**、**504**等と燈明皿**531**～**535**等の関係も同様である。

522～**525**の底部については不明であるが、中世に属すると考えられる。

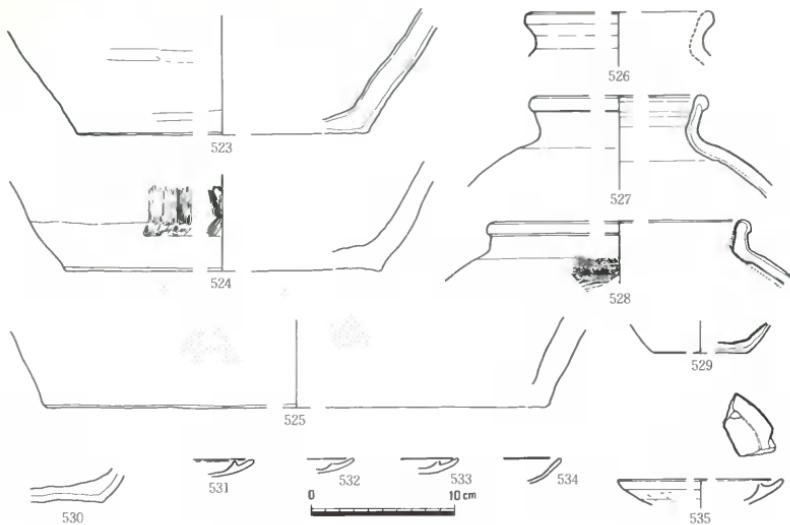
備前焼編年（註3）を参考に観察してみるとⅢ期よりⅤ期までの遺物があり、13世紀後半から16世紀後半までの300年間、中世全体と考えられる。擂鉢**483**・**484**、甕**505**～**509**はⅢ～Ⅳ期にまたがり、13世紀後半から14世紀後半にかけての時期が考えられる。擂鉢**485**～**488**・**496**～**503**、甕**510**～**520**、壺**526**～**528**はⅣ～Ⅴ期にまたがり、15世紀から16世紀後半にかけての時期が考えられる。後者をⅣB期に比定されている備前市不老山東口窯出土品（註4）と比較すると、本遺跡では擂鉢の口縁屈曲部は内傾せずに、ほぼ同じ器壁厚で垂直ぎみに立上がり、上端部がまるくなるものと、内傾する面をもつ2者があり、外面には凹線文が顕著である。不老山東口窯出土品より若干新しい傾向が認められる。

甕では玉縁が口縁部の約 $1/2$ まで垂下しており、玉縁外面には凹線によるまるみをもった凸が顕著に認められる。玉縁内面は幾分膨らみを持ち、卵形になるものが多い。甕においても擂鉢と同様の変化が見える。壺では口縁部が多少、外に向って傾き、頸が短くなっている。口縁部の傾き、その長さ、胴部形態においても若干異っている。総じて不老山東口窯より新しい

成良好にて青灰色を呈する。器外面は格子叩目、内面は青海波文がみられ、青海波文には太筋と細筋の両者が認められる。**471**～**475**のように胴部内面に青海波文が確認できないものもある。外面に行なわれる格子叩目は $0.29 \times 0.29\text{cm}$ か



第52図 備前焼 ①/4



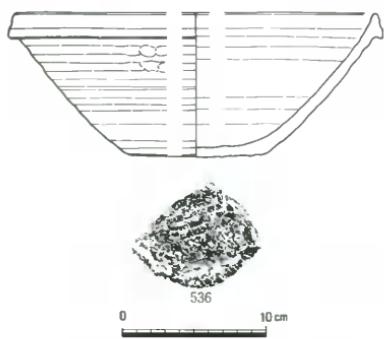
第53図 備前焼 (1/4)

要素を含む器形が中心を占めると考えられる。Ⅳ期の新相より新しい時期に比定できる。

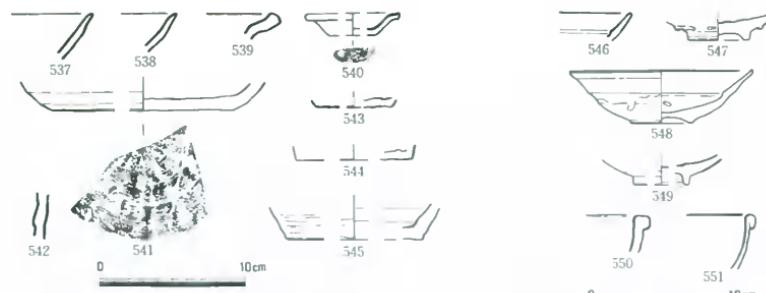
東播系須恵器 (第54図)

536が一点のみ出土している。片口鉢と考えられるが、約1/4位の破片でありその部分は確認できない。復元では最大径26cm、口径25cm、器高約10cm、底径9.0cmを測り、灰白褐色を呈するこね鉢である。口縁端は上下に拡張されており、上縁は鋭く尖り、下縁は垂下している。体

部内外面は水びきによるヨコナデが顕著であり、内面底より上位3cmまでに摩耗の痕跡が認められる。外面底は荒い糸切りが施されており、その上に板目痕がみられる。内面底は仕上げナデが施されている、これに類する東播系須恵器は14世紀中葉に比定されている樋本遺跡(註5)No 6 鍛冶炉下の土壌内より出土しており、伴出する遺物に早島式土器のヘソ挽がみられる。おおよそ14世紀中葉より15世紀初頭に比定できる。

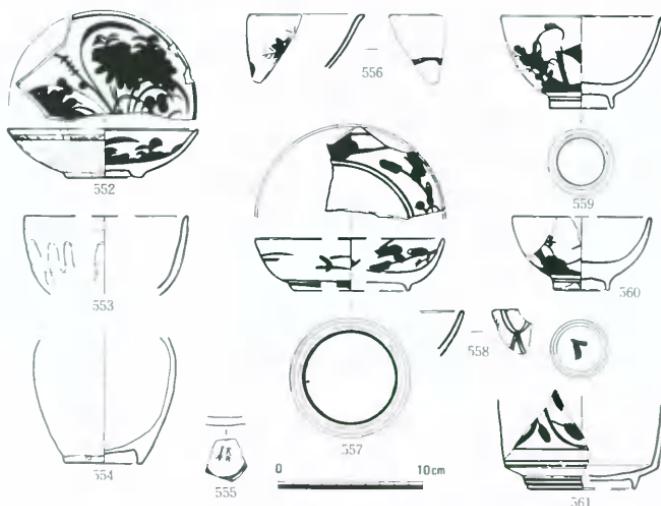


第54図 東播系須恵器 (1/4)

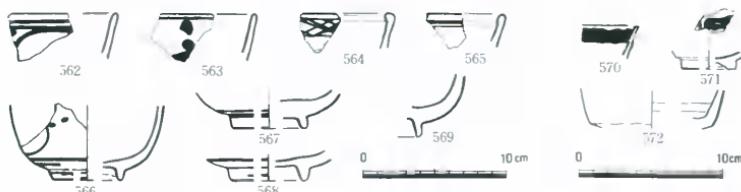


第55図 美濃、瀬戸、常滑、信楽焼 (1/4)

第56図 肥前陶磁器 (1/4)



第57図 肥前陶磁器 (1/4)



第58図 肥前陶磁器 (1/1)

美濃・瀬戸、常滑、信楽焼（第55図、図版17）

約40点ほどの小片が出土しており、実測可能な537～545を掲載した。544を除く537～541、543～545が15世紀～16世紀代、542が18世紀中項の瀬戸、美濃系の製品と考えられる。灰釉平碗、折縁の盤・小皿、内ハゲ皿、鉄軸の壺等である。544は常滑あるいは信楽系の可能性がある。

肥前陶磁器（第56～58図、図版17・18）

唐津系陶器、伊万里系磁器、平戸系半磁器が確認できる。唐津系陶器は約80点ほど出土しており、すべて小片である。546～548、550がそれにあたり、549、551は若干異質であり産地不明である。548は内面見込みに胎土目痕、547は砂目痕が認められ、16世紀末から17世紀前半期に比定できる。また、18世紀代の刷毛目の大型製品が多く存在する。

伊万里系磁器は肥前陶器のうち最も多く出土しており、総数約280点を数える。552～554等が17世紀前半、556～561等が17世紀後半から18世紀を中心に19世紀までの製品が見られる。

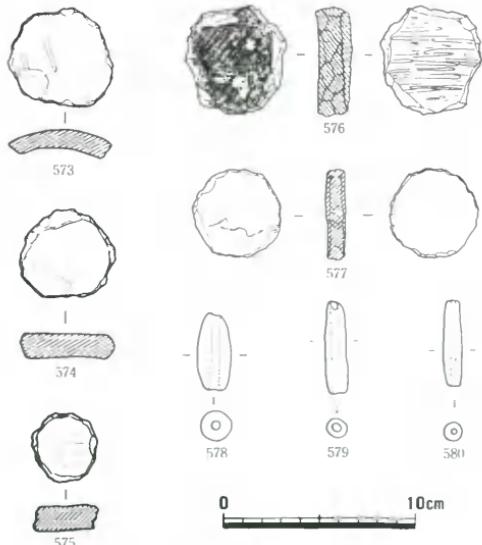
562～569は木原山窯、平戸系等と呼称されている製品であろう。磁器の原料が入手不可能な地域で製作されたと考えられており、器に白化粧を施した後に呉須による絵付を行い、焼成したものである。施釉は全面に及ぶ。伊万里系磁器に比べると器壁が厚く、胎土も異なる。胎上の状況は唐津系陶器に類似し、貫入は全面に認められる。約110点を数える。570～572は産地

が不明である。

京焼系の製品が38点ほど出ており、器内外面に細かい貫入がみられる。その他に産地不明の陶磁器が121点ほど出土している。

円板状土（石）製品（第59図）

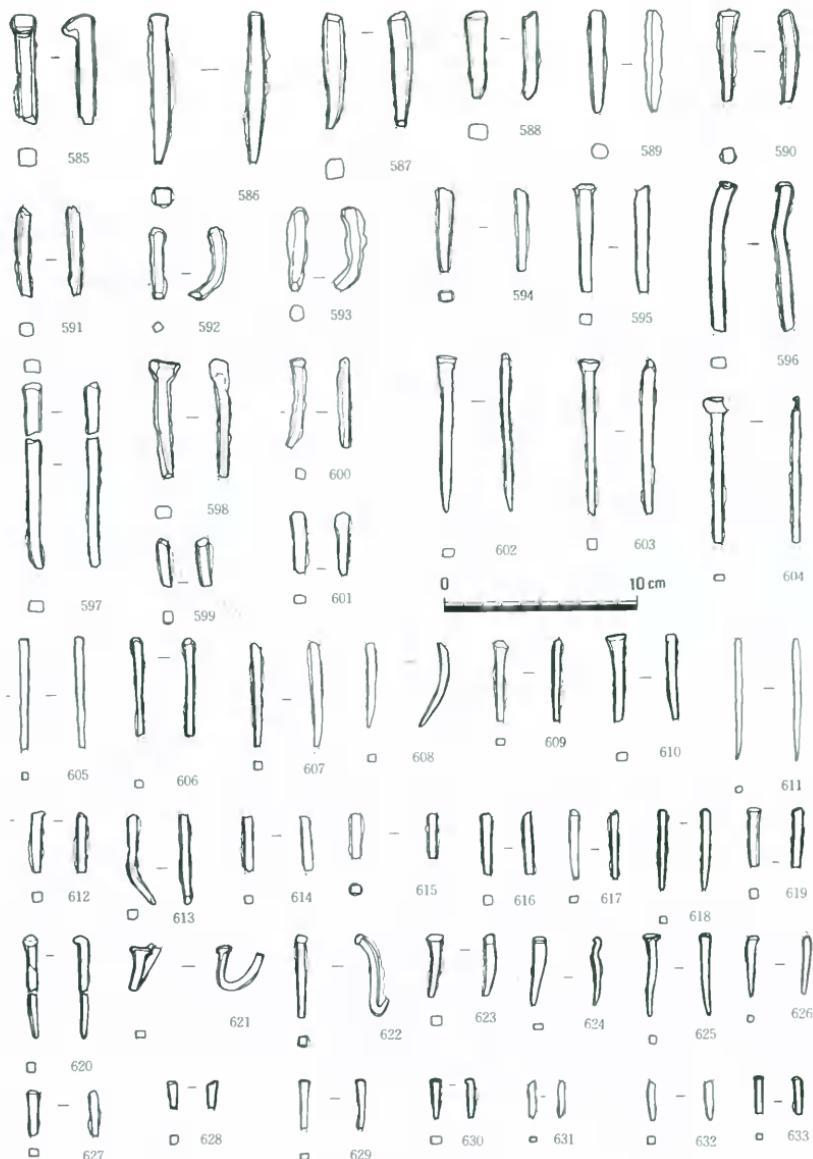
5点とも井戸一の北側、配石一の上位より出土したものである。573～576は備前焼壺あ



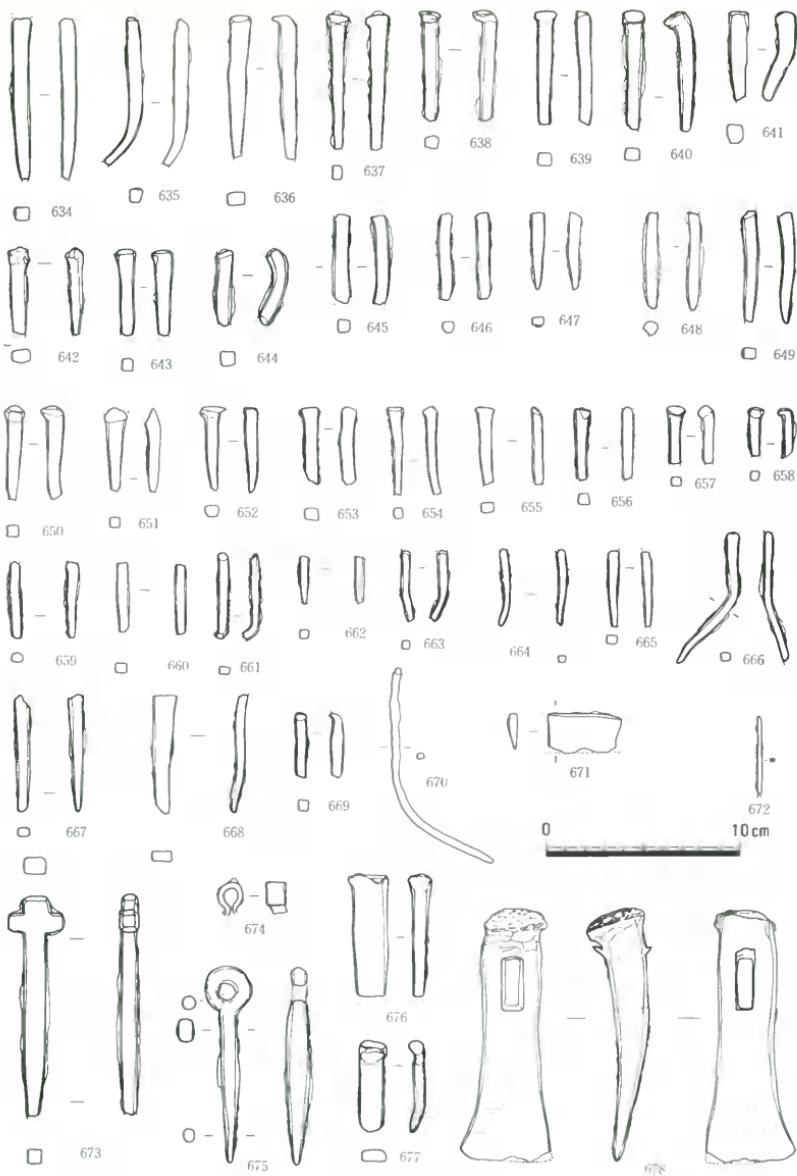
第59図 円板形土製品、土錘 (1/3)



第60図 銭貨 (1/2)



第61図 鉄釘 (1/3)



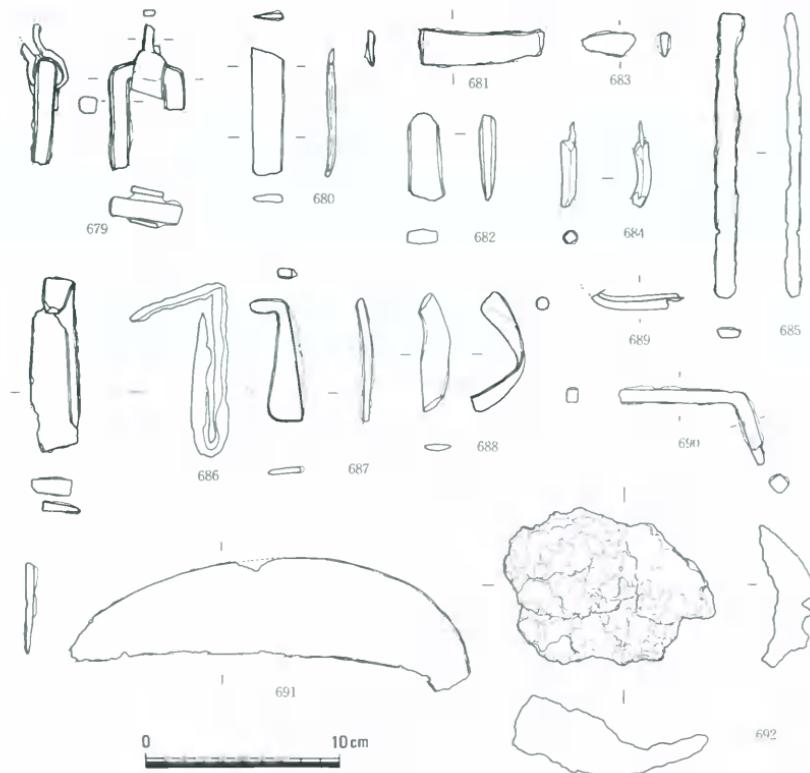
第62図 鉄製品 (1/3)

るいは甕の破片を利用して作られており、周縁の調整は非常に雑な打欠きである。576は $5.5 \times 5.3 \times 1.4$ cm、重さ62.2gを測る。577は $4.6 \times 4.5 \times 0.95$ cm、重さ36.11gを測る石製品であり、両面ともに摩耗している。これに反して、573～576は手の加わった痕跡をとどめていない。

土鍤（第59図）

長管状のもの2点、紡錘状のもの1点が出土しており、579、580は長さ約4.4～4.7cm、最大径約0.95～1.05cm、重さ3.93～4.86gを測る。これらは粘土を二等辺三角形状に薄くのばし、短辺上に芯になる物を置き、三角形の頂点に向って巻いていった痕跡をとどめる。578は長さ3.9cm、最大径1.69cm、重さ6.78gを測り、淡褐色を呈する。

錢貨（第60図）



第63図 鉄製品 1/3

581～583は当遺跡出土であり、584は多治部氏の居城と呼ばれている塩城山城での表採品である。581は開元通宝（621年）、582、583は至大通宝（1310年）、584は元祐通宝（1086年）である。また、582はP-482、583はP-785'上面からの出土であり柱穴に伴う可能性がある。

鉄製品（第61～63図、図版24）

K. Lトレーンチ南部、井戸一北側配石-1周辺、下田削平部よりまとめてみられるが、完形品での出土は数点である。全体では細片を含め146点が出土しており、釘を中心を占めている。585～666、669がそれにあたり、すべて角釘であり頭部が「L」字状に屈曲、あるいはその部分がとれている。規模は小ささままであるが、全長2.11～8.33cm、厚さは約0.4～0.9cmでありかならずしも正方形ではない。重さは0.96～16.52gまでが認められる。完形に近い大型品636を例にとれば、全長7.5cm、厚さ0.96×0.94cm、重さ16.52g。630は全長2.11cm、厚さ0.57×0.54cm、重さ0.96gを測る。全体では5.0cmを前後するものが多いようである。667、668は釘と比較して断面形が扁平であり、先端に刃部が認められる。671、680、681、686等は小刀の可能性があり、686は折り曲げられ放棄されたものであろう。珍しい形態の673は全長11.4cm、厚さ0.87×1.17cm、重さ57.16gを測る。675は全長10.15cm、厚さ1.31～0.86cm、重さ9.2gを測り、頭部が環状を呈する。676、677は楔の類と考えられる。678は全長13.06cm、刃部幅4.63cm、挿入穴2.67×0.77cm、深さ1.75cmを測り、頭部は敲打された痕跡をとどめる。柄を装着し、敲打・掘削の両方に使用された道具であろう。これらは中・近世に所属する時期のものが中心と考えられるが、691は新しい時代の鎌の可能性が強いものである。

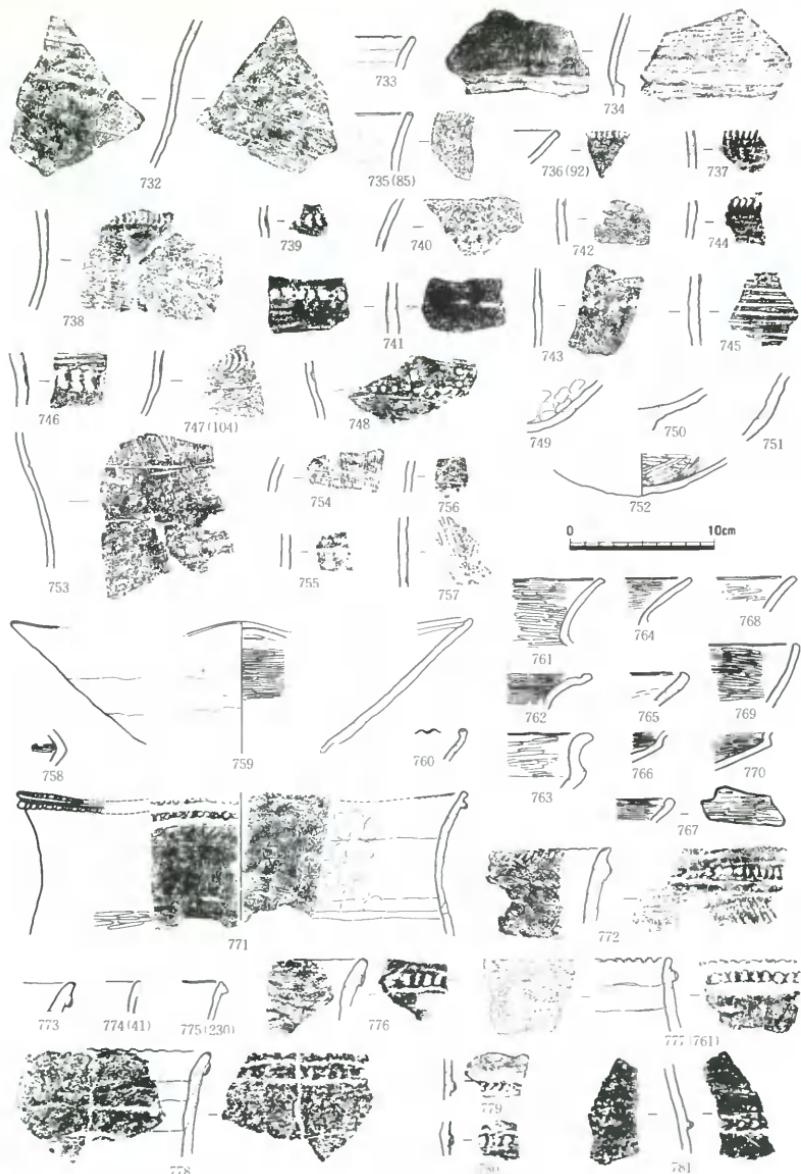
692は配石-2の下位包含層より出土しており、11.0×8.3cm、厚さ0.9～2.97cm、重さ265gを測る椀形鉄滓である。若干ではあるが磁力が認められる。他に9点ほどの鉄滓が出土しており、製練滓と思われるもの2点、鍛冶滓と思われるもの7点が認められ、中世に伴う鉄滓が多い。

縄文土器（第64・65図、図版13,14）

ほとんどの上器は黒ボク土内からの出土であり、谷内に流れ込み二次的に堆積した遺物である。縄文後期の中津式土器より晩期の黒土BⅡ式までのものを含んでおり、なかでも晩期の土器が中心を占めている。693～704が後期に比定できるものと考えられる。710～712の外面は擦痕がみられ、712は下位から口縁部に向うものである。715、717、719～722、726～729、731、734等の器面には二枚貝による条痕がみられる。731は器内面に顕著であり、外面はナデにより消されている。口縁端部に刻目を有するものと有さないものがある。736～748は頸部あるいは屈曲部に半截竹管による爪形が施されており、745、746には二枚貝条痕が認められ、縄文晩期中葉に比定できる特徴を有する。753～757は、頸部あるいはくびれ部上位にヘラによる継ぎ位の沈線が施されている。757は押引きの痕跡をとどめる。707、759～767は内外面を研磨された精



第64図 繩文土器 (1/4)



第65図 縄文土器 1/4

製土器であり、暗褐灰色を呈する浅鉢が主体になっている。759は外面にザラツキがあり、煤の付着が認められる。771～781が刻目貼付突帯文を特徴とする土器であり晚期後半に比定されている。775を除くものは突帯が口唇部より一段下位に貼付がおこなわれており、口唇部にはすべて刻目がみられる。772は器外面のナデ上位に縦位のミガキが施されており、他は横位の細いナデが内外面に認められる。器面に貝殻条痕の存在は認められない。779～781は胴部にも刻目貼付突帯がみられ、総じて器壁の薄いものである。突帯が口縁部直下に貼付けられる774、775等との同時期の関連が考えられる。器壁の厚い772、776～778等は前述した741、746等との関連において把えられる可能性もある。これらの土器は橙褐色系の色調が主体であり、接合の方法は内傾接合がとられている。

石器（第66・67、図版14）



第66図 石器 (1/3)

石鎌、スクレイパー、石庖丁、乳棒状石斧、打製石斧、磨石、凹石、砥石、円礫等が出土しており、この他に図化していない河原石利用の円礫が10点ほどある。剥片ではサヌカイト約30点、黒曜石8点（註6）、チャート2点が出土している。

782～785は石鎌であり、782の黒曜石製以外はサヌカイトが使用されている。0.27 g～1.40 g の重量であり、782、783は非常に細い丁寧な造りである。縄文、弥生の両者が存在すると考えられる。786～788、790がスクレイパーであり、786の水晶製以外はサヌカイト製である。788は断面三角形を呈し、一面に自然面を残している。自然面に



第67図 石器 (1/3 · 1/4)

相対する稜線部分に刃部が認められ、屈曲部より上半が鋭く、下半が潰されている。789は結晶片岩を利用した弥生時代の磨製石庖丁片である。791~794は789と同じ石材が利用された乳棒状石斧792、打製石斧793、磨石794であり、縄文後・晚期の所産であろう。759は長さ13.4cm、幅11.0cm、厚さ8.4cm、重さ1730gを測る河原石円盤で、全面が円滑な状況を呈する。

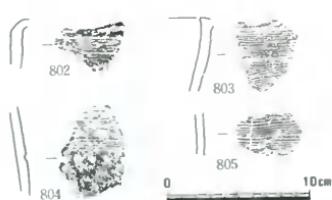
796、797は凹石であり、797は

長さ11.3cm、幅8.0cm、厚さ6.8cm、重さ1020gを測り花崗閃緑岩が利用されている。798~801

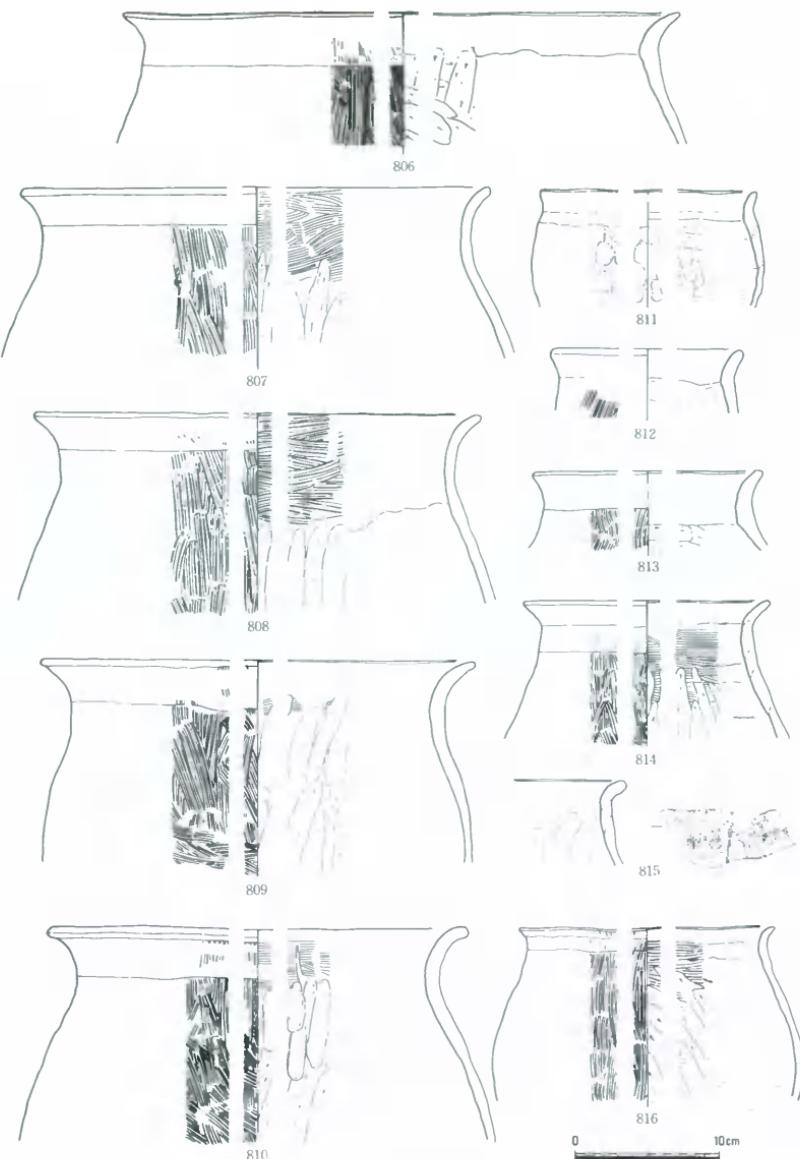
は砥石であり、798が凝灰岩質流紋岩、799、800が頁岩である。801は流紋岩であり、前者と比べて稚な造りである。古墳時代以降の所産と考えられる。

弥生土器 (第68図)

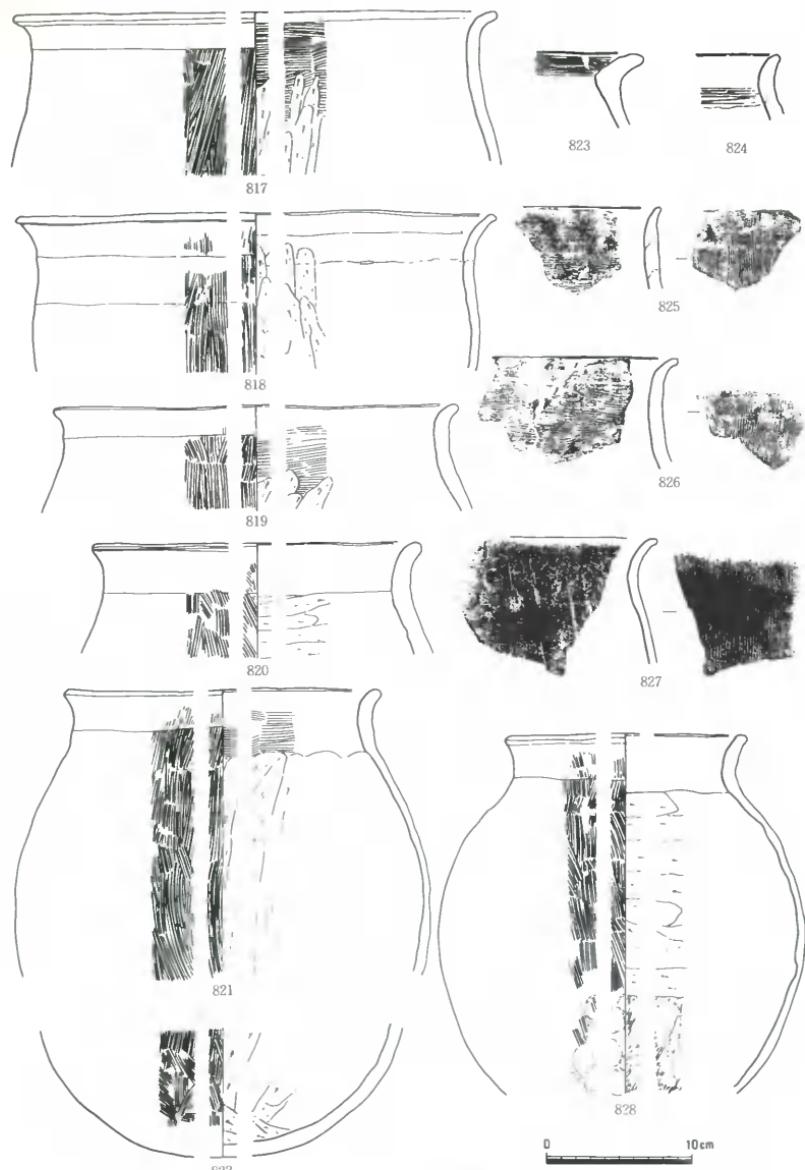
甕の口縁部に近い破片が4点出土しており、「く」の字形と「L」字形の二者がみられ、803が後者にあたる。器外面は平行櫛描き文が施され、幅約



第68図 弥生中期土器 (1/4)



第69図 土師器 1/1



第70図 土師器 1-4

4.7cm以上を測り、804、805は下位にヘラ先による刺突文がみられる。内面はヘラミガキおよびナデによる円滑な仕上げである。803が古相を呈する。

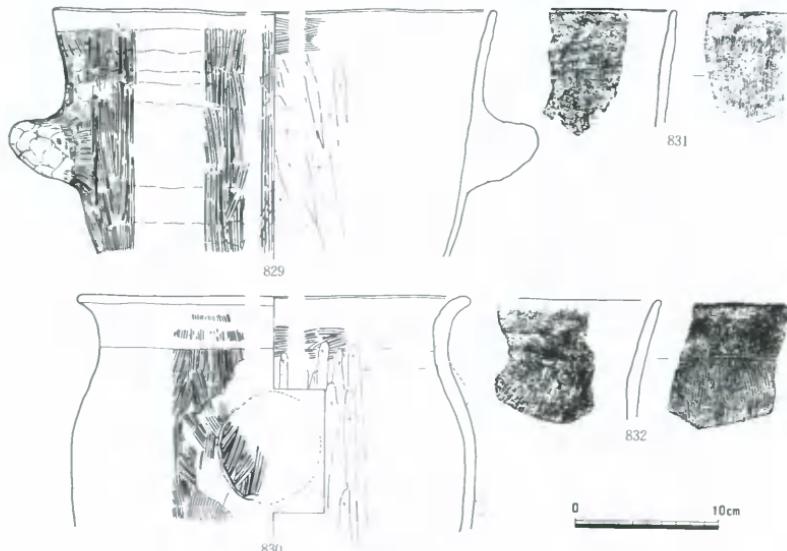
土師器（第69～71図、図版16）

No42センター杭を中心とした $4 \times 3\text{ m}$ の範囲内に大型破片が集中して分布していた。建物一5の南西隅の柱穴等にも切られる状態での出土である。それらの遺物は黒ボク上位層の傾きに沿って出土しており、海拔299.04～298.84mの斜面高低差をもっている。遺構の存在する可能性はなく、出土状況から堆積土の凹部部分に流れ込んだものと推測される。

823、824を除く、806～832のすべてがNo42センター杭周辺からの出土である。器種は甕が大半であり、わずかに829～832が瓶である。全体に大型品が多く、806は口径38.5cm、808で30.2cmを測り、806～808、817、818等の甕は829～832の瓶とセメント関係になる可能性が高い。

甕、瓶においては共通する調整がみられ、外面は整然とした鋭い縦ハケ、内面上位は横ハケ、胴部内面は下位からの円状のヘラ削り（搔取り）が基調となっている。なかには806、811～813、818、820、827のように内面上位に横ハケの無いものもある。また、横位のヘラケズリをもつ820、828等が存在する。

総じて、焼成は良好であり、色調は淡褐色、橙色系が多い。時期は7世紀後半より8世紀前半頃と考えられる。

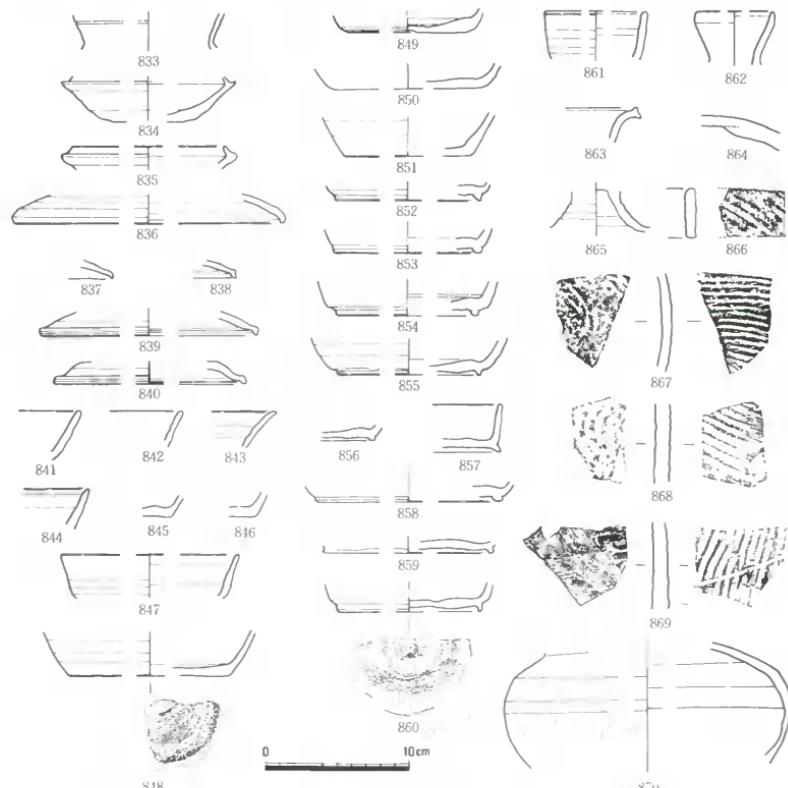


第71図 土師器 1/1

須恵器（第72図、図版15）

器種は広口壺、杯身、摘み付の蓋、高台付の身無台の杯身、壺、平瓶、高杯、甕等の破片が出土している。すべて小片であり、図化不可能なものを含めて100点ほどである。前述した土師器とほぼ同じと考えられる包含層出土であり、古墳時代後期後半より奈良・平安時代までのものを含む。870は一括出土した土師器の周辺より出土したものであり、暗灰青色を呈する焼成良好の平瓶である。外面胴部下半にまで自然釉が認められ、内面中位最大径部分に接合痕と考えられる粘土の変化が認められる。7世紀後半～8世紀初頭に比定できる。834は右廻りの回転がみられ、外面底へラキリ後の雑な調整、内面底は仕上げナデが施されている。古墳時代後期後半の杯身である。

836、870が奈良・平安時代に比定できるものであろう。867～869の大型品の破片であり、外



第72図 須恵器 (1/4)

面は平行タタキ目、格子タタキ目が認められ、平行タタキ目がほとんどである。内面は太筋・細筋等の青海波文がみられる。奈良時代を中心とする時期の土器片が多いようである。

註

- (註 1) 松本和男「田治部氏屋敷址」『岡山県埋蔵文化財報告』16 1986

昭和60年10月22日から11月8日まで確認調査を実施した。7本のトレンチ(105m²)にて遺跡の範囲を押へ、表土層直下から柱穴、溝状遺構、土壤等が検出された。室町時代の掘立柱建物群の存在することが推察された。

- (註 2) 工事による道路面の低下に伴い、水田への通水が不可能となるために道路南側の水田面を下げ、下段の田面と同高にする必要性から調査を実施した。なお、道路北側の調査に関しては、地権者である前田正治氏ならびにご家族のご理解と御協力を頂いた。

- (註 3) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報』第5号 1968

- (註 4) 河本 清 葛原克人「不老山古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972

- (註 5) 高畠知功「遺物 2 中世」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 岡山県教育委員会 1987

- (註 6) 金山喜昭(野田市立博物館)、鈴木正男(立教大学)、戸村健児(立教大学)、福岡 久(日本大学) 各氏の共同研究による熱中性子放射化分析法では隱岐島産という結果を頂きました。

なお、石材の肉眼同定には岡山理科大学三宅 寛教授によるものである。記して感謝します。¹⁰

第4章 結語

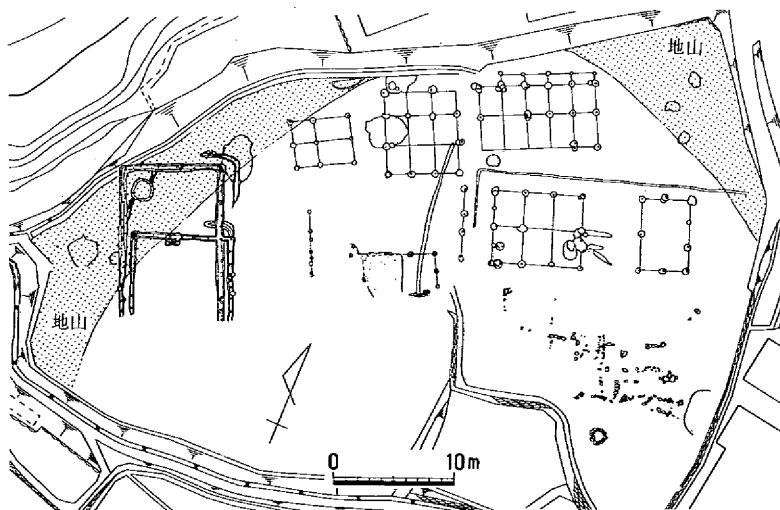
第1節 遺跡の概要

I 遺構、遺物について

調査区の遺構を全体的にみると、全域に若干の間隔をもって配置された構造物が目につき、建物が中心を占めている状況が看取できる。これらの建物配置は西偏 $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ を基本としていることが理解でき、方向の異なりからA・B・Cのグループに分けることができる。Aは西へ 30° 前後、Bは西へ 25° 前後、Cは西へ 20° 前後の傾きを基調としており、建物配置の計画性が認められる。

Aグループの遺構に南面する建物-2、Bグループの遺構に建物-1・5・6、柱穴列-3、溝-2、Cグループの遺構に段により区画された建物-3・4、配石-1、溝-3等が含まれる。しかし、A、B、Cのグループが時代差をそのまま反映するか否かは決定しがたい要素を多分に含んでいる。すなわち、建物を構成する柱穴内出土の遺物より建物の建築時期の上限を知ることは可能であるが、機能した時期および廃絶期までは不可能に近い状況である。

そこで、とりあえず上限を与えてくれる柱穴内出土遺物から建物を整理してみると、建物-1は16世紀初頭以降の年代が与えられるV期(註1)の備前焼壺が出土している。建物-2は瀬



第73図 田治部氏屋敷址遺構分布図 (1/600)

戸焼の灰釉平碗小片が出土しており、包含層出土の537と接合する。15世紀前半(註2)に比定できる。建物-3は唐津系陶器で砂目積の皿が出土しており、1600～1630年代(註3)に比定できる。建物-4は唐津系陶器で砂目

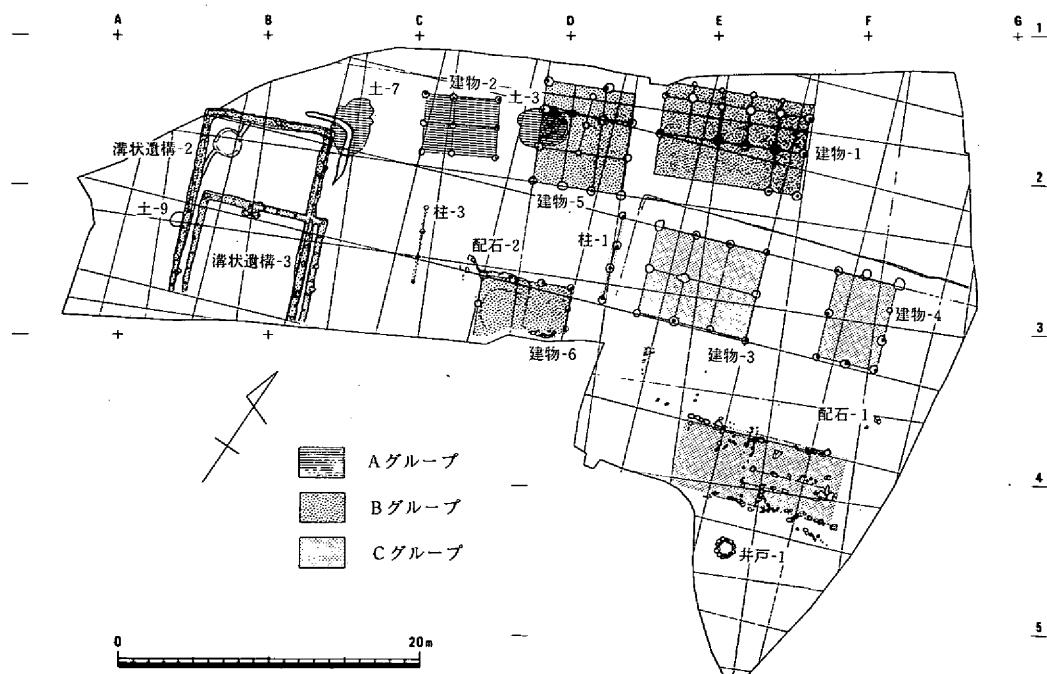
積の皿26、伊万里系磁器碗583が出土しており、1630～1650年(註3)に比定できる。建物-5は明代の染付碗28が出土しており、16世紀中葉前後に比定できる。建物-6は切り合いのある土壙-18より新しく、配石-2より古い関係にある。土壙-18は土師質椀から13世紀後半～14世紀前半頃に推定でき、配石-2は17世紀代に比定できる。建物-6はその間に造られたものであり、柱穴内より至大通宝(1310年)が出土している。14世紀前半以降の可能性が強い。

礎石建物を想定した配石-1は造成土中に肥前系陶磁染付碗161を含み、18世紀中葉前後に比定できる。同じく建物と考えた溝状遺構-2は溝状遺構-3に切られ、溝状遺構-2が16世紀中葉頃に廃絶された土壙-7を切っており、土壙-7、溝状遺構-2、溝状遺構-3の順序で造られている。

以上であり、少くとも建物-6が14世紀前半、建物-2が15世紀前半、建物-1が16世紀初頭、溝状遺構-2・3が16世紀中葉、建物-5が16世紀中葉、建物-3が17世紀前半、建物-4が17世紀中葉、配石-1が18世紀中葉前後以降に存在していたことが考えられる。

時期のおさえられる土壙関係では土壙-9が16世紀以降と考えられる溝状遺構-2により切られている。13世紀後半～14世紀前半を推定している。土壙-3は建物-5の柱穴に切られており、15世紀後葉以前に比定できる。

柱穴および包含層出土遺物の上限からみた遺構の年代幅は14世紀前半の建物-6に始まり、配石-1の18世紀中葉前後までのほぼ500年間におさまる。さらに、廃絶期の明確な土壙およ



第74図 時期別遺構配置図 (1/500)

び上限を参考にし、存在期間等を考慮すれば、本調査区において確認できた遺構はおおよそ13世紀後半～19世紀代まで使用された可能性が考えられる。

ここでは、主要遺構である建物の機能した時期を、前述した建物の方向、および柱穴内出土遺物を併用して追求してみたい。まず、参考となるのはD-2の中央北側にコーナーを持ち、F-2・D-3面方向に延びる浅い段状の遺構である。

おそらく、方形の区画を有するものと考えられ、その内側に区画辺と桁、梁等の方向、規模が統一された建物-3・4、配石-1、および井戸-1等があり、配石-2、溝状遺構-3を含め同時に存在した可能性が強いものである。これらの時期は建物-3・4、配石-1の上限を示す遺物から17世紀初頭以降から18世紀後半以降の幅が考えられる。はからずも、建物方向が西偏20°の傾を持つCグループと、17世紀以降の肥前系陶磁器を含む遺物の共通性から、おそらく17世紀末から19世紀代まで機能していたと考えられ、近世中頃を中心とする屋敷の配置状況を示す一例であろう。

建物-1・5・6、柱穴例-3、溝状遺構-2が西に25°前後傾くBグループに入る遺構であり、上限の年代は14世紀前半から16世紀後半以降のおおよそ300年の幅が認められる。Cグループより一時期ステージの古い様相を呈する建物群である。これらの遺構の共通性を規模からみると、建物-5の梁行は597cm、梁間195～202cm、建物-6の北辺長593cm、柱間194～204cmの同数値を示し、同規模の建物になる可能性がある。建物-5の桁行を南に延し、2倍にした距離13.54mに建物-6の北辺にあたり、計画的な配置が考えられる。建物-1の梁間190～201cm、建物-5の桁間195～202cm、建物-1の桁行4間の長さ790cmは溝状遺構-2の北辺主柱穴間794.5cmとほとんど同数値を示しており、共通した意識の存在が考えられる。必ずしもBグループが同時的な存在であったとは決定しがたいが、ここでは建物規模、方向等の類似状況より最も新しい16世紀代の建物-5に共存する遺構群として把えておきたい。

残るは南面する建物-2であり、西に30°前後傾くAグループの遺構である。15世紀前半の上限を示す瀬戸焼の灰釉平碗が出土しており、近い時期と考えられる遺構に土壙-3・7等が存在する。

以上により遺物配置方向に分類したA・B・Cのグ

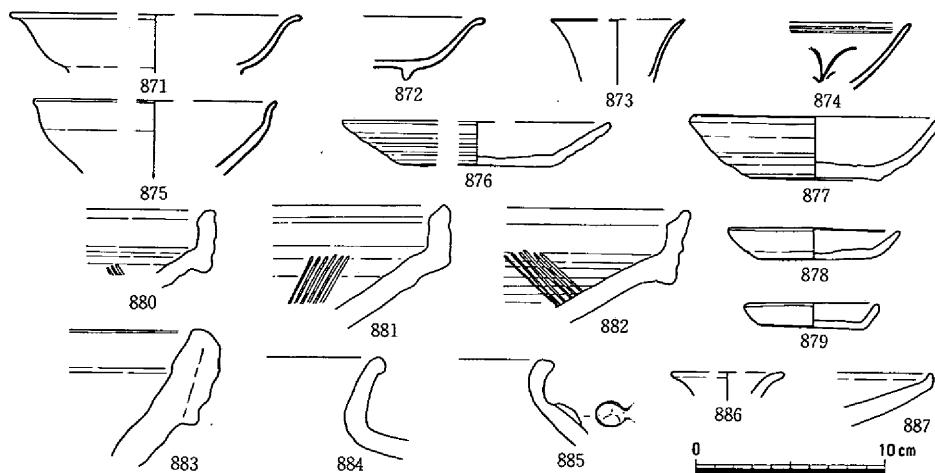
表-3 遺構・遺物変遷表

	14c	15c	16c	17c	18c	19c
中国製陶器	■■■■■			■■■■■		
土師質土器	■■■■■					
龜山焼	■■■■■					
窯業焼	■■■■■					
瓦器		■■■■■				
瓦器・瀬戸焼		■■■■■				
建物			■■■■■			
壁・漆焼				■■■■■		
伊万里焼				■■■■■		
木製白漆器					■■■■■	
鐵 貨	■					
Dグループ	■■■■■					
Aグループ			■■■■■			
Bグループ				■■■■■		
Cグループ					■■■■■	
漆器		■■■■■			■	

ループはA・Bグループが中世、Cグループが近世と考えられ、時期的にもA・B・Cの順序で展開していった可能性が推測できる。

南向き、東向きの建物方向が西偏30°から20°と北に向う変化をしており、建物数が徐々に増加大型化している。それらの配置にも柱穴の切り合い関係は存在せず、比較的まとまった範囲を占地しているが、A・B・Cグループの建物群がグループを越えて同時併存したか否かは明確にしがたい。しかし、各グループの建物規模において、少なからず同数値を示す個所が認められる点ではA・B・Cは関連を持って継続した可能性を指摘することができる。

建物方位、柱穴内遺物から大きく3時期に分類したが、出土遺物のなかで最も量の多い土師質土器(註4)，そして、中国製陶磁器、亀山焼等の所属する建物は確認できていない。他の遺構では13世紀後半～14世紀前半に近いと考えられる土壙-9，18が存在するのみである。しかし、13世紀後半～14世紀前半が一時期を画することは土師質土器、中国製陶磁器(註5)、亀山焼(註6)等の出土量からも明らかである。これらの大半はC-2区の南西隅、谷筋底および斜面に投込まれたもの、あるいは流入した状態で出土したものが多く、火災後の破損、不要品が廃棄された可能性が考えられる。A・Bグループの建物面との高低差は約40cm前後を測り、時期差の存在することが理解できる。すなわち、A・B・Cグループ生活面より若干下位に存在することにより、15世紀前半より古い年代を与えることができる。13世紀後半～14世紀前半に該当する柱穴は、13世紀前半以前の遺物を含むことが条件となる。そこで縄文～平安時代の遺物のみが出土した柱穴にあたってみると、非常に少く全体で35穴を数える程度であり、B・C・D・E-2の北側に存在するのみである。無遺物の柱穴は約440穴を数え、ほぼ全域におよんでいる。両者ともにまとまる柱穴は確認できず(註7)，おそらくAグループに先行し、掘立柱建物の存在する可能性は薄いものと考えられる。これらをDグループと呼称する。



第75図 和氣天神山城関連遺物 (1/4)

Ⅱ 田治部氏屋敷址と多治部氏について

多治部氏は新見市大字上熊谷土居に居館を構へ、塩ヶ城を築いて備中新見から美作に至る熊谷川、田治部川の流域の丹治部郷を領有していた国衆であり、名主から成長した土豪と考えれている。塩ヶ城は元暦元年（1184）に一の谷に籠城して、軍功をあらわした多治目太郎元春の開基であると言われている（註1）。

多治部氏の初見は延元元年（1336）5月に足利尊氏が東上するにあたり、大江田氏経の拠守する福山城（福山合戦）を攻めた備中の国人の中に庄、真壁、陶山、成合、新見、多治部等の名が見える。南北朝内乱期にはすでに有力な在地土豪としての基盤を固めていたと考えられる。

これ以後の文献による多治部氏の動向の多くは「東寺百合文書」に残る「備中国新見庄」との関連においてみることができる。すなわち、多治部氏による、東寺領新見庄への濫妨、押領等の状況が東寺へ報告されたもので、14世紀中葉から15世紀末まで認められる。

まず、正平17年（1362）、山名右衛門佐師義が美作から備前、備中国への侵攻に伴い、山名軍を導入し、軍の撤退を機に多治部氏は東寺領の濫妨、押領を始めている。とくに、貞治、応安、明徳年間（1364～1393）の領家方への濫妨は目を見張るものであり、足利幕府による前後7回にわたる濫妨を停止する奉書を下しても多治部師景、多治部備中守四郎次郎の親子は応ずる様子をみせていない。明徳元年（1390）に將軍家御教書、明徳3年（1392）管領細川頼元の施行状で備中守護職細川氏をして、すべての濫妨を停止させられ、新見庄を退去している。

15世紀前半は国衙代官の安富親子が新見庄の代官請をおこなっており、三日市場には地頭方、領家方等の多くの勢力が入り合う状況であった。寛正4年（1463）多治部氏は守護方の被官であったが、相国寺領新見庄東方地頭方の代官に補任されている。応仁2年（1468）新見庄西方領家方が幕府の御料所となり、文明3年（1471）に政所執事伊勢氏の一族、伊勢貞國の下代官として寺家領へ多治部雅樂次郎（蔵人・備中守）が入部しているが、文明10年（1478）には再び東寺に還補されている。しかし、還補後も多治部氏は領家方に居座りをつづけ、文明10年（1478）～延徳2年（1490）に至る13か年間の年貢の寺納状況は非常に悪くなっている。この背景には多治部氏による新見庄領家方の支配、在地の名主百姓らの把握、そして東寺が送り込む細川家の家人山田具忠らに対抗できる勢力の裏付が充分考えられる。文明11年（1479）には中奥の百姓らが東寺の命令よりも多治部氏の命令を堅く守っているという百姓左衛門四郎の報告がある。東寺は延徳3年（1491）新見庄代官に妹尾太郎左衛尉重康を契約し、多治部氏より勢力が一回り大きい秋庭備中守元重を所務代官として対応させている。明応2年（1493）多治部雅樂二郎の子、弥二郎は秋庭氏に押しきられ新見庄を去っており、その後の多治部氏の動向を知る記録は限られている。明応2年以後は蔚ヶ巣城主徳光兵庫頭とともに伊達氏を攻め、永

第76図 土居地区小字名 (約1/300)



正14年（1517）には三村氏との連合軍により新見、伊達の両氏を攻めている。天文15年（1546）には鶴首城三村家親の阿賀郡への侵入により、多治部雅楽頭景春は降伏している。景春は尼子、毛利両氏に従属した可能性のある人物であり、天正3年（1575）に櫻城より落ち延びる城将三村元範を打ち取っている。年末詳ではあるが「原家文書」のうち、原太郎法師に宛てた小早川隆景書状の文面に景治の名前がみられる（註9）。

以上が元暦元年（1184）から天正3年（1575）の約400年間におよぶ多治部氏についての動向概略である。

つぎに、多治部氏と田治部氏屋敷址と呼称された本遺跡との関係について考えてみたい。

当該地は文献、伝承等により比較的早くから多治部氏の屋敷址に比定されていた場所であり（註10），比定地にされるに充分な条件を兼備した地域もある。まず、所在地の新見市大字上熊谷土居の地名である。「土居」は本来、土壘、土堤の意に使用され、領主屋敷等を示す呼称でもあり、中・四国を中心に西日本に多く残る地名である。

さらに、第76図にもとづき土居地区の小字名ならびに古井戸、町並等を観察すると、南北に抜ける主要道を中心にして両側に家屋が配されており、「屋敷」、「家」、「宿」等の小字名の大部分が集中している。この主要道が東に右折した北側にも「家」の小字名をもつものが集っている。おそらく、真福寺参道以西が屋敷址の中心を占めていたと考えられ、参道以東および南側が水田域と考えられる。その両者を画するように当該地西側に菅生川、すぐ東に西谷川が流れ、さらに如意山の北縁をぬって大畠川が西流し、熊谷川と合流している。これらの河川は東西、そして南より土居の町を囲み、自然流路が堀としての機能を果したと考えられ、北方の山を背にし、南に、東に見透しのきく当該地は屋敷の占地条件を充分に満たしているものと考えられる。

菅生川を隔てた当該地の南西約760mには標高587m、比高約300mの塩城山が聳え、頂上付近には軸線を南東から北西にとり、北方に向って3段4面、西方に1段2面の平坦部が確認できる。ここは、塩城山城、塩山城、塩ヶ城、熊谷城、潮城等の名称で呼ばれており、多治部氏の居城に比定されている。

また、当該地の東北東約355mに所在する如意山真福寺には天文、天正年間に活躍をした多治部雅楽頭景治に関連する位牌が祀られている。

表に「丹丘院殿白翁淨雲大居士」、裏に「文禄四己未三月十五日逝去景治公」が刻まれている。文禄四年（1595）まで塩城山城主丹治部雅楽頭景治が生存していたことを知る資料である。

これと関連すると考えられる文書が、当該地の南東約140mに所在する原家宅に残されている（註11）。毛利元就の第3子である小早川隆景から原太郎法師に宛てた書状であり、挨拶伺い的なものと考えられるが、その一部に「景忠、景治懇之由候間、肝要候、」とある。小早川隆景が備中で実動した年代を考慮すれば、おそらく「景治」は多治部雅楽景治である可能性が強い。

さらに、当該地と真福寺の中間やや北方にあたる清土には、14世紀末～15世紀前半頃に推定できる比較的りっぱな宝篋印塔、五輪塔等が所在する。清土の東谷筋にはさらに多くの宝篋印塔、五輪塔等が散在しており、墓地を形成している。

このように遺跡地周辺には多治部氏の存在を彷彿させる城址、寺地、墓址、屋敷址がみられる。これらが土居の町を中心に1200×1000mの範囲内に所在し、有機的な結びつきを持つことにより、多治部氏の活動拠点域としての機能を果していた可能性が考えられる。

そこで、今回の調査結果と従来の多治部氏の動向を比較することにより、その関連をみてゆきたい。まず、調査による遺構には建物、土壙等が多く、15世紀中葉～16世紀初頭のAグループ、16世紀中葉～17世紀初頭のBグループ、17世紀末～19世紀代のCグループ、13世紀後半～14世紀前半のDグループの大きく4時期を中心に展開していると理解した。

出土遺物においては、D期に所属する中国製陶磁器、土師質土器、亀山焼、備前焼等がみられ、備前焼を除いて他の出土量は比較的多い。A期では中国製陶磁器、備前焼、東播系の須恵器、瀬戸焼がみられ、瀬戸の製品が少し目立つようである。B期ではA期と同じ傾向が認められ、中国製陶磁器、備前焼が中心を占め、両者とも多く出土している。C期は一部中国製陶磁器を含むが、備前焼および肥前系陶磁器の量が増加しており、日本製陶磁器が使用土器の中心になっている。

遺物はほぼ13世紀中葉から19世紀までの年代幅が存在する。なかでも13世紀後半～14世紀前葉の中国製陶磁器、14世紀後半～15世紀前半の備前焼、瀬戸焼、15世紀末～16世紀全般の中国製陶磁器、備前焼、17世紀初頭～18世紀末の肥前陶磁器の出土量の多いことから4時期の高まりを想定できる。遺構との関係においてもほぼ一致する状況であるが、一部異なる時期が存在する。

文献では、多治部氏の東寺新見庄に対する濫妨、押領等に関する記載は14世紀後半（1364～1393年）、15世紀後半（1478～1490年）の2時期に集中しており、第1期は南北朝から室町時代初頭、第2期は戦国時代に突入する室町時代中葉にあたっている。第3期は多治部雅楽頭景治の記載が認められる16世紀中葉以降である。文献第1期は遺構のD・A間にあたり、土壙以外の建物の存在が明確に把えられない時期である。それにもかかわらず、遺物の第2期にあたっている（註12）。文献第2期は遺構のA期にあたり、建物-2が1棟存在するだけで遺物においても多少の中国製陶磁器、備前焼が認められる程度である。このように文献第2期に対応する充分な遺構の存在は薄く、多治部氏の濫妨、押領が最も激しく行なわれた時期の遺構に対応させるには、あまりにも貧弱な感を免れない。

文献第3期は遺構のB期にあたり、建物-1・5・6、柱穴列-3、溝状遺構-2が存在し、明の陶磁器、備前焼等の出土が最も多くみられる遺物第3期である。14・15・世紀代の遺構、遺物と比較して、建物の数・規模、遺物の量等が他の時期を凌駕しており、16世紀中葉から16

表-4 遺構・遺物変遷表

	14c	15c	16c	17c	18c	19c
中国陶器群	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
土器・瓦器群	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
丸山焼	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
備前焼	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
吉野燒		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
高瀬・御器焼		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
吉作焼		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
伊万里焼		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
高麗山窯系		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
錢 舊	■					
Dグループ	■■■■■					
Aグループ		■■■■■	■■■■■			
Bグループ			■■■■■	■■■■■		
Cグループ				■■■■■	■■■■■	
諸藩民窯		■■■■■	■■■■■	■		

世紀末に見られる多治部雅楽頭景治との関連を持つて存在した可能性が指摘できる。この後の多治部氏についての文献資料は見あたらず、動向は不明である。しかし、17.18世紀代の遺構・遺物は16世紀代に引続いて多く、建物-3・4、溝状遺構

-3、配石-1・2、柱穴列-1の存在する遺構のC期にあたっている。遺物では備前焼、肥前陶磁器が多い、遺物の第4期である。

すなわち、多治部氏屋敷址と呼称された当該地は13世紀中葉から19世紀代まで人間の営みの跡がみられ、なかでも16世紀以降に最盛期を迎えていた。とりわけ、16世紀代は中国地方の雄である毛利氏が大名領主権を確立する過程であり、毛利氏と備中松山城主三村元親が天正2年(1574)から翌年にかけて備中を中心に兵乱を起している。この時、多治部雅楽頭景治は毛利方に荷担し、櫻城主三村元範を打取る功績をあげ、三村氏を一掃する役割を果している。

この多治部氏の存在は、これらの背景に伝承、文献を残し、さらに城址、寺地、墓址、屋敷址等を一連の自然景観の内に包括し、山陽・山陰を結ぶ交通の要衝に位置する土居地区周辺域との関連が強く考えられる。屋敷址地の一隅を占める本調査区は、広義の多治部氏関連の遺構として把えることが可能であり、戦国時代の城下町の一部と考えられる。17・18世紀代にも比較的大型の建物跡が存在しており、多治部氏あるいはこの勢力に匹敵する権力者の存在が推察される。13世紀後半を前後する時期に見られる遺構・遺物は土居地区周辺域における中世城郭都市の萌芽期にあてることも可能であろう。

現在も生きつづける土居地区の中・近世の歴史的景観は今後の人々の生活、および研究には欠かすことのできない「場」であると考えられ、これからも「場」を生かした土居地区ならびに周辺の発展を切望する次第である。

(高畠 知功)

註

- (註1) 間壁忠彦・間壁貞子「備前焼研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報』第5号 1968
間壁忠彦「備前焼の編年と分布」『15・16世紀を中心とした出土陶磁』島根県立博物館調査報告第3冊 1982
- (註2) 福井県立朝倉氏遺跡資料館の調査員水野和雄氏より教示を受けた。また、遺物の鑑定に際

- して当センター職員田中 寿氏にお世話をいただいた。記して感謝申し上げます。
- (註3) 佐賀県立陶磁文化館の資料係長大橋康二氏より教示を受けた。なお、肥前陶磁器の全般に関する多くの教示を受けた。記して感謝申し上げます。
- (註4) 土師質土器には椀、皿、鍋をとりあげており、瓦質の鍋も含めている。ここでは、本遺跡で最も普遍的な椀、たとえば277～295等のような形態を有し、器内外面に水挽き痕、底部外面にヘラ状工具による切離し痕のみられるものと、小皿を目安にしておおよその年代を推定せざるを得なかつた。まず、椀の最大径、器高を参考にして、県南部にみられる樋本遺跡(第3章(註5))早島式土器の法量表と対比させているという短絡的な方法をとった。それによると田治部の椀は樋本椀B～Oまでの範囲内に納まり、13世紀中葉～14世紀前半の年代に比定でき、小皿においても樋本小皿a～iまでのほぼ同一年代内におさまるようである。しかし、こうなれば14世紀後半以後は椀・小皿に対応する日常雑器の小物の存在が薄くなり、量的な木製椀等の出現をも想起させる。
- しかし、この年代導入の方法には問題が残り、今後の調査、研究により共伴遺物等を含めて充分検討する必要が考えられる。
- (註5) 出土品には同安窯系の製品ではなく、龍泉窯系青磁碗I～5、白磁皿IV～1・2、龍泉窯系小碗III～2、杯III～1・2・3が見られる。いわゆる口禿けの占める割合が多くなる時期が考えられる。
- (ア)横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978に言うⅢ期の3小期(13世紀後半から14世紀中葉)に匹敵するものである。
- (註6) 西川 宏「龜山焼の再評価」『考古学研究』第11巻3号 1965
- (註7) 配石-1の下位についての精査を実施しておらず、近世造成土の乗った緩斜面部に遺構が存在した可能性も考えられる。
- (註8) 『阿哲郡誌』上巻 社団法人阿哲教育会 1929
- (註9) 藤井 駿・水野恭一郎共編『岡山県古文書集』第二輯 思文閣出版 1955
景治は多治部雅楽頭景春、景忠についても鳶ノ巣城の檜崎十兵衛尉景忠(永禄4年)の可能性が考えられる。文書の解釈には文化課課長補佐河原耕作氏のお世話を記して感謝申し上げます。
- (註10) 松尾惣太郎「鎌倉時代」『新見市史』 新見市 1965
- (註11) 「原家文書」の存在は遺跡地近所の後藤 澄氏によりご教示を頂いた、記して感謝します。
- (註12) 遺構数に反比例する量の中国製陶磁器、土師器等が出土しており、調査区以外、おそらく上段の小村宅の周辺にも遺構の存在した可能性が考えられ、火災等による破損品を廃棄した場所が考えられる。

参考(引用)文献

- 1 杉山 博 「第三編備中国新見庄の研究」「庄園解体過程の研究」 東京大学出版会 1982
 - 新見庄の概要、多治部氏関連年表に引用させて頂いた。
- 2 松尾惣太郎 「おもなる国人諸氏」「中世期における備中国の莊園と国人」 1967
 - 新見庄、ならびに多治部氏の概要全般について参考にさせて頂いた。
- 3 横田賢次郎 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
- 4 小野正敏 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易

陶磁研究会 1982

- 5 塚本茂夫 「塙ヶ城をめぐる地名と多治部氏についての私考」『備北文学』26号 1984
 • 調査時には周辺遺跡の具体的な状況、ならびに多治部氏について多くの教示を得ました。記して感謝申し上げます。
- 6 葛原克人 「広島・岡山」『日本城郭大系』第13巻 創史社 1980
- 7 新見市地籍台帳 同帳の閲覧にあたっては、新見市税務課、新見市役所熊谷支所の便宜を得た。
 記して感謝申し上げます。

表-5 多治部氏関連年表

1336年 (延元元)	<ul style="list-style-type: none"> 足利尊氏が東上する建武三年に「備中には、庄・真壁・陶山・成合・新見・多治部の者共、勢山を切塞で、鳥も翔らぬ様に構へたり」の下りが『太平記』にみられる。
1370年 (建徳3)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部備中入道々元（応安3年）・多治部備中守師景（応安5年）・多治部少輔次郎（明徳2年）や、彼らの若党福本小三郎・宮田三郎左衛門尉（明徳2年）などの領家方庄家乱入・所務違乱がくりかえされた。
1390年 (明徳1)	<ul style="list-style-type: none"> 東寺は、権崎備前守という人を、新見庄の公文と惣追捕使の両職に補任した。ところが備前守は、「凡当庄所務、敵方多治部在所為近隣之間、旁以非無怖畏。仍且加代官扶持、且可致庄家警固之由」を望んで辞退したため、東寺は、その子息鶴寿丸を両職に補任した。
1391 (明徳2)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部氏は、公文宮田氏と同様に、福本氏を西方惣追捕使にした。
1392年 (明徳3)	<ul style="list-style-type: none"> 隣郷の土豪多治部氏の領家職押領がくりかえされた。多治部次郎四郎は、新見庄内に要害を構えて、濫妨をほしいままにしていた。
1461年 (寛正2)	<ul style="list-style-type: none"> 備中北部を支配した。
1461年 (寛正2)	<ul style="list-style-type: none"> 新見庄の最繁華地帯であった市場（三日市場）には、地頭方・領家方、及び路一里をへだてた多治部郷に政所のあった国衛の勢力も、また15里の山をへだてた高梁に、守護所のあった守護細川氏の勢力も、入り合っていた。
1464年 (寛正5)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部氏は、守護方の被官であったのだが、地頭方の代官に補任された。守護が主宰する一切経勧進のための奉加金を要求した。本位田家盛は、東寺の意向をきいて、地方代官多治部氏と相談している。
1465年 (寛正6)	<ul style="list-style-type: none"> 代官多治部は、その田半損・畠四分一免を不満とする地頭方の百姓に、逃散されてしまうほどだった。
1467年 (応仁1) ↓	<ul style="list-style-type: none"> 多治部氏は、新見氏とともに、さかんに領家方の所領を押領して、新見庄で封建的領主関係を新見庄の庄民との間にうちたてた。
1486年 (文明18)	<ul style="list-style-type: none"> 新見氏などの他の国人と同じく、多治部氏は、応仁・文明の過程で、直務支配をしようとする東寺の実力の無さを十分に見せつけられていた三職・名主・百姓らの動きを、組織していった。
1468年秋 (応仁2)	<ul style="list-style-type: none"> 地頭新見氏が、「東寺から代官をお請けした」と申しふらして、年貢を徵収しようとしていた頃、隣郷の地頭多治部氏も、新見領家方に手を出しかけていた。

1471年 (文明3)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部氏は、新見庄領家方に人を入れて、この地を支配する機会をつかむことができた。しかし、新見庄での後進地区の百姓ら（中奥とよばれた釜・足立・吉川・和忠などの新見庄）を、多治部氏は、そう簡単に、支配できなかった。
1478年 (文明10)	<ul style="list-style-type: none"> 1478～1490年に至る13カ年間の年貢の寺納状況は非常に悪く、総数100貫である。1485・1486年は、祐成（清）の代官請による。在地の名主、百姓らは、すでに多治部氏に把握されていたのであった。 <p>天下は静まり、新見庄領家方は、ふたたび東寺に還付されたが、もはや領家方には、新見氏と同様に多治部氏が、その勢力を深く植付けていた。</p> <p>多治部氏・新見氏は、細川家の家人山田具忠や、国人妹尾重康らを代官として、対抗してくる東寺に服従しなかった。</p> <p>多治部氏は、東寺に味方した三職らをにらんでいたのだが、三職らが、寺家還補によって、東寺に書状をおくっただけで、三職らを罪科に処していた。</p>
1479年 (文明11)	<ul style="list-style-type: none"> 中奥の足立の百姓左衛門四郎は、中奥の百姓らが、東寺の命令よりも多治部殿の命令を堅く守っていることを報告している。
1490年 (延徳2)	<ul style="list-style-type: none"> 東寺は、飯尾加賀守清戻も申入れにもかかわらず、寺家直務を主張して、多治部雅楽二郎の代官請（七十貫請）をことわったのである。
1491年 (延徳3)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部雅楽助は、東寺から新見庄の代官に補任されていた乗泉から、年貢徵収をたのまれた。（乗泉は、新見庄に下向しなかった。）しかし、多治部は、「火強噛儀」、年貢を責取りながら、東寺には、それをおさめようとなかった。 <p>備中の豪族で郡代であった妹尾太郎左衛門尉重康は、東寺と新見庄領家方の年貢徵収を契約していた。重康の代官であると考えられる大和守明重は、新見庄に派遣され、延徳3年（1491）11月28日に、領家方に入部した。しかし、在地には、多治部の被官の大田佐度・大田越中が、「多治部方の放状がないかぎりは、弓矢にかけても、領家方の支配はさせない」とがんばっていた。</p>
1492年 (明応1)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部孫次郎と大田越中守らは、領家方の百姓らに、「御年貢不可致沙汰候」と触れ廻っている。このために、三職をはじめ、豊岡・長田らの高瀬・中奥・里三カ村の百姓らは、多治部氏から「甘餘年御免にて候」とか、「流不作」とか、いろいろ口実をもうけて妹尾重康の代官に年貢を納めようとはしなかった。
1493年 (明応2)	<ul style="list-style-type: none"> 多治部孫二郎、新見庄を放棄。
1496年 (明応5)	<ul style="list-style-type: none"> 重康の代官明重の報告によると、在地領主多治部氏や新見氏が、押領によって、妹尾重康の支配をさまたげた。
1517年 (永正14)	<ul style="list-style-type: none"> 伊達陸介宗衡は三村氏と多治部氏との連合軍による夜襲を受ける。
1546年 (天文15)	<ul style="list-style-type: none"> 鶴首城三村家親の軍が阿賀郡に侵入、多治部雅楽頭景春を降す。
1574年 (天正2)	<ul style="list-style-type: none"> 小早川隆景は三村元親を松山城に攻め、天正3年6月2日元親は松蓮寺で自刃。櫻城の三村元範も、天正3年毛利勢により攻撃され、塩が城主多治部雅楽頭景春により殺される。
1574年 (天正2)	<ul style="list-style-type: none"> この年以後、東寺と新見莊現地との交渉もとだえる。

図版 1



新見市上熊谷土居地区航空写真(俯瞰)

図版2



1. 遺跡周辺航空写真（東から）



2. 田治部氏屋敷跡周辺航空写真（西から）



1. 塩城山上から土居地区を望む（南西から）



2. 塩城山城山麓から上土居地区を望む（南西から）

図版 4



1. 遺構検出状況（北西から）



2. 遺構検出状況（西南西から）



1. 遺構完掘状況（西南西から）



2. 建物-3・4 完掘状況(西南西から)

図版6





1. 配石-1 (北々西から)



2. 配石-2 (東北東から)

図版 8



1. 土壌-1 (南々東から)



5. 土壌-14 (西南西から)



2. 土壌-4 (東から)



6. 土壌-15 (南々西から)



3. 土壌-7 (南から)



7. 土壌-16 (南西から)



4. 土壌-9 (東から)



8. P-538 (南から)



1. 土壌-18 (南々東から)



2. 井戸-1 (北西から)

図版10



1. 柱穴検出状況（南から）



2. 方形柱痕（南々西から）



3. O. P. トレンチ南端石組状況（北々西から）



4. 配石-1 下位土層（西から）



5. 縄文土器出土状況



6. K. L トレンチ南端土層断面（南々西から）



7. M. N トレンチ土層断面（西から）



8. 遺跡近景（南西から）



1. 溝状遺構発掘調査風景（西から）



2. 建物一3 発掘調査風景(西南西から)

図版12



1. 塩城山城（北西から）



2. 宝篋印塔（南々西から）

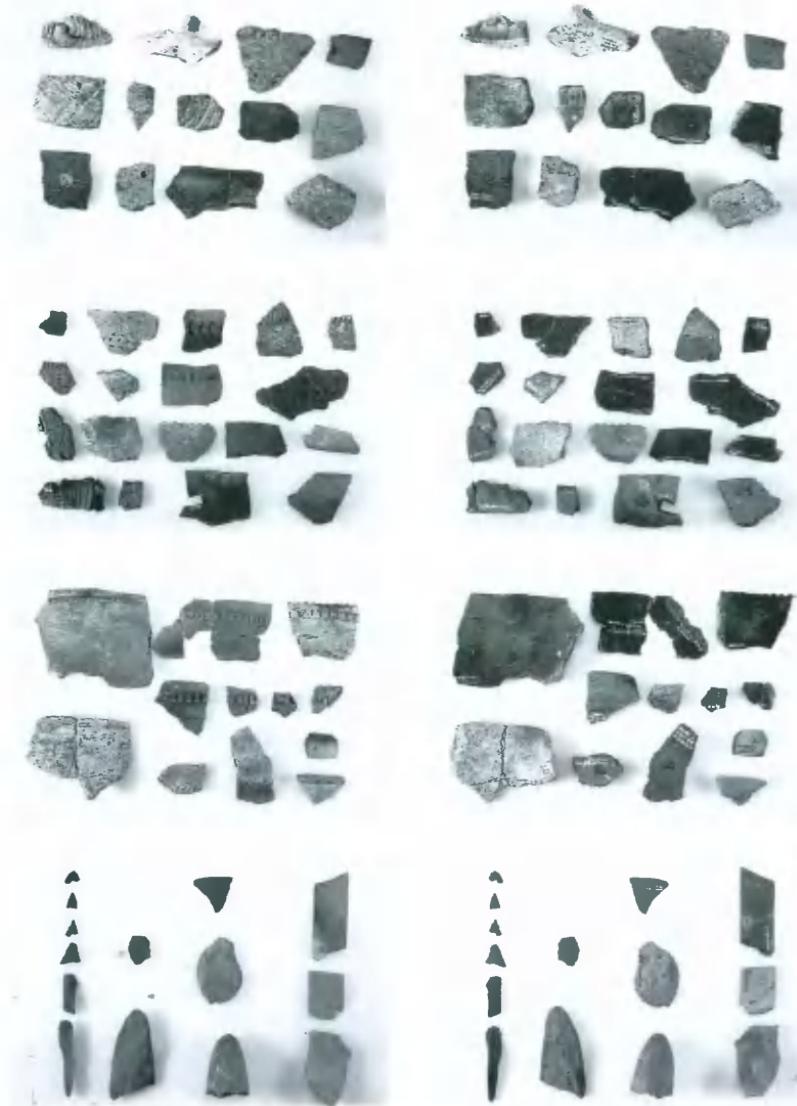


1. 縄文晚期土器



2. 縄文晚期土器

図版14



1. 縄文後・晚期土器、石器



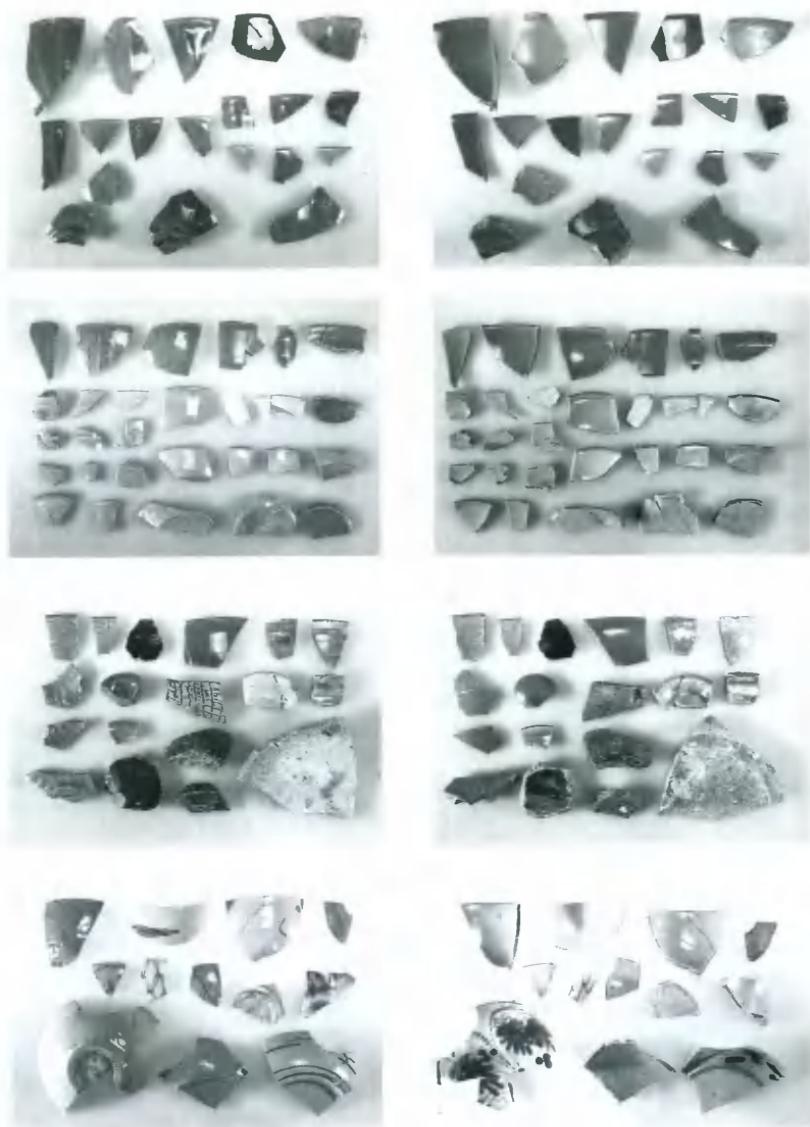
1. 須恵器

図版16



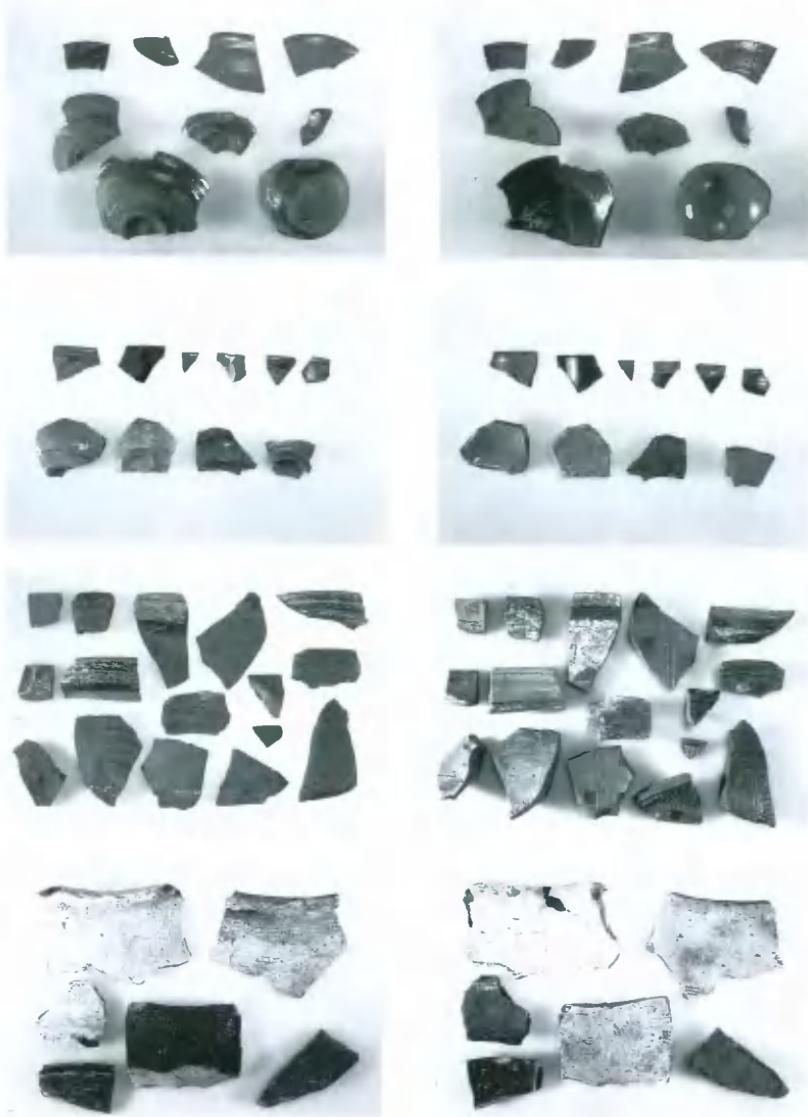
1. 土師器

図版17



1. 陶磁器

図版18



1. 陶磁器



1. 磁器

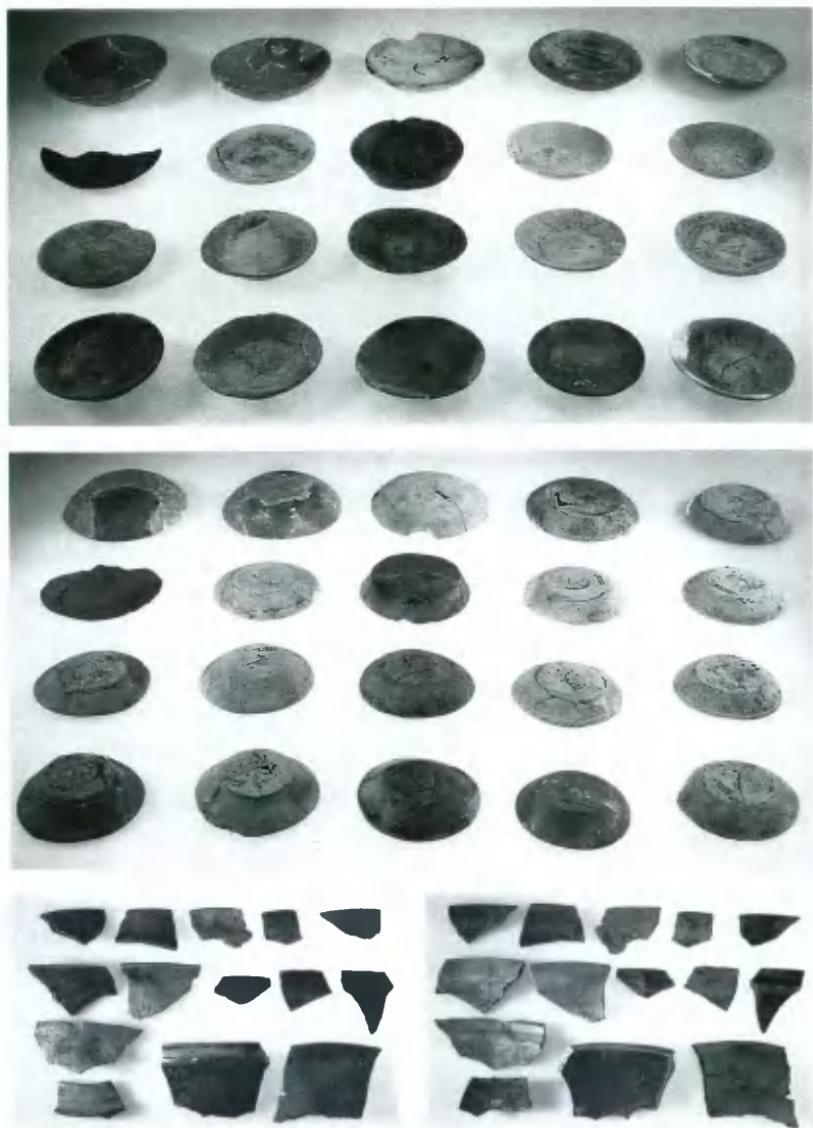


2. 備前焼

図版20



1. 土師質椀・皿

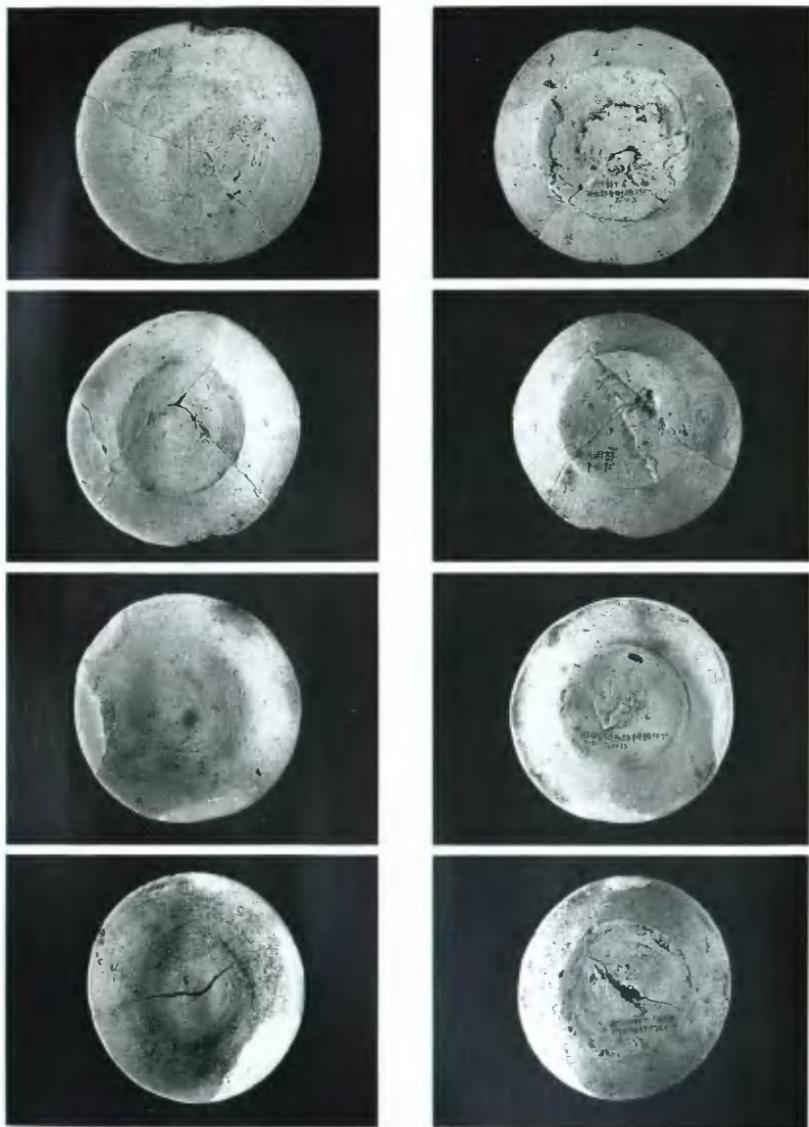


1. 土師質小皿・土鍋

図版22



1. 土師質小皿



1. 土師質小皿

図版24



1. 鉄製品



2. 鉄滓

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 67

田治部氏屋敷址

1988年3月25日印刷

1988年3月31日発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

〒701-01 岡山市西花尻1325-3

TEL (0862) 93-3211

発行 岡山県教育委員会

〒700 岡山市内山下2-4-6

TEL (0862) 24-2111 内線 3004

印刷 岡山県農協印刷株式会社

〒700 岡山市富町2-5-27

TEL (0862) 52-5141